

神戸大学大学院 国際文化学研究科

Graduate School of Intercultural Studies, Kobe University

グローバル社会のフロンランナーを育成する

2022-2023

神戸から始まる 新しい国際文化研究

神戸大学大学院国際文化学研究科は、2007年に大学院総合人間科学研究科の改組により創設された、比較的新しい研究科です。私たちを取り巻く社会の様相はグローバル化の進展に伴ってますます複雑化し、時には激しい摩擦や対立が生じています。そのような刻々変化する現代社会の諸問題に対処するには複眼的なアプローチを備えた知の拠点が必要です。国際文化学研究科は、異文化共存を見据えた先端的な文化研究の推進を理念として掲げ、単一のディシプリンを越えた領域横断的な研究を積み重ねています。本研究科には2専攻、15のコースが設けられていますが、それは個別の専門領域を深く掘り下げながらも、そこに留まることなく、異分野の学問研究の養分を吸収しながら、従来にはないテーマや視点を探索し、これまで見えなかった問題群を発見するための配置となっています。

こうした領域横断的な国際文化学研究を推進するために、本研究科では、研究科内に国際文化学研究推進インスティテュートを設置し、その下に移住・移民研究センターと地域連携センターを置いています。とりわけ国内外の大学や研究機関と連携して取り組んでいる研究プロジェクトの柱の一つに、「移住・移民の常態化を前提とする持続的多文化共生社会の構築」(日本学術振興会(JSPS)の学術知共創プログラム)があります。移民の常態化が進行する現代社会において、人の移動が、異文化との接触の増加による様々な摩擦をもたらし、社会分断を生んでいる現実に対し、その分断を解消・予防し、逆に利益を生み出す構造に転換するための理論知を創出する必要に迫られています。本プロジェクトでは、国内外の多様なステイクホルダーとの連携のなかで、自然科学と人文学・社会科学との文理融合の協働を通じ、社会内部での分断を回避し、ホスト社会市民と移民とが互いにより良い生活を享受できる、「持続的多文化共生社会」モデルを提示することを目指しています。

本研究科では多彩な専門と経験を有する教員・学生が自由闊達に意見を交わしながら研究を進めていく環境が整っています。海外からの留学生も多数おり、この研究科自体が地球全体の縮図であるといっても過言ではありません。海外の大学への交換留学や海外大学でも学位取

得ができるダブルディグリー・プログラム、また日本語教師養成サブコースなどの制度を整えて皆様をお待ちしています。グローバル化する世界で生じる問題の解決には多様なアクターに対する共感と想像力が不可欠です。この研究科に集う皆さんがそれぞれの専門的知識と知性を結集して、未来につながる新たな公共的価値の創造に取り組んで下さることを心から期待しています。

研究科長
藤濤 文子



研究科の理念と目標 Our mission and aims

国際文化学研究科は、異文化共存を見据えた文化研究の先端的領域を開発し、人類文化を把握するための新たなパラダイムを構築することをその理念としています。

そしてそれを実現するために、以下の5つの研究目標を設けています。

- (1) 文化を複合体と捉え、異文化間の関係性を視座として文化研究を行う。
- (2) 複合体としての文化を、衝突、融合、交渉などの異文化間の相互作用という視座から、動的に研究する。
- (3) グローバル化する現代世界の文化変容を多角的に研究する。
- (4) 言語や情報に関わる先端的コミュニケーション研究の開発を行なう。
- (5) 中心／周縁、文明／未開、先進／後進などの一元的で単眼的なパラダイムから、多元的で複眼的なパラダイムへのシフトを実現し、現代世界の文化動態に則した研究方法を開拓する。

アドミッション・ポリシー Admission Policy

国際文化学研究科では、深い異文化理解能力と自在なコミュニケーション能力を有し、豊かな学識と創造的な研究能力を備えた人材を育成することを目指しています。

上記の教育研究上の目標をふまえ、本研究科が求めるのは次のような学生です。

前期課程 Master's Program	<ul style="list-style-type: none">・文化の多様性をふまえ、異文化間の関係性を多角的に探究することに強い意欲を持ち、それを達成する基礎的な能力を有する学生・言語情報コミュニケーションの動態を深く理解し、現代のグローバル社会の諸課題に取り組むことに強い意欲を持ち、それを達成する基礎的な能力を有する学生・高い専門性の上に立った学際的研究を行うことに強い意欲を持ち、それを達成する基礎的な能力を有する学生 <p>[求める要素:知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・協働性、関心・意欲]</p>
後期課程 Doctoral Program	<ul style="list-style-type: none">・文化の多様性と相互作用の動態を究明し、文化研究の先端的な領域を主体的に開拓することに強い意欲を持ち、それを達成する基礎的な能力を有する学生・言語情報コミュニケーションの諸課題を探究し、グローバル化する現代世界を多角的に研究することに強い意欲を持ち、それを達成する基礎的な能力を有する学生・高度な専門性の上に立った領域横断的な研究を行うことに強い意欲を持ち、それを達成する基礎的な能力を有する学生 <p>[求める要素:知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・協働性、関心・意欲]</p>

ディプロマ・ポリシー Diploma Policy

国際文化学研究科は、深い異文化理解能力と自在なコミュニケーション能力を有し、豊かな学識と創造的な研究能力を備えた人材を育成することを目指しています。この目的を達成するため、以下に示す方針に従って当該学位を授与します。

前期課程 Master's Program	<p>本研究科に原則2年以上在学し、履修要件として定めた所定の単位を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、修士論文又は特定の課題についての研究成果の審査及び最終試験に合格すること。全学のディプロマ・ポリシーに定める人間性・創造性・国際性・専門性の四つに加え、学生が修了までに身につけるべき能力を次のとおりとします。</p> <ul style="list-style-type: none">・文化が多様であること、それらの文化が相互に影響しながら変容するものであることを理解し、異文化間の関係性を多角的に探究することができる能力。・言語情報コミュニケーションの動態を深く理解し、現代のグローバル社会のさまざまな課題に取り組むことができる能力。・高い専門性の上に立った学際的研究を行うことができる能力。
後期課程 Doctoral Program	<p>本研究科に原則3年以上在学し、履修要件として定めた所定の単位を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格すること。全学のディプロマ・ポリシーに定める四つの能力に加え、学生が修了までに身につけるべき能力を次のとおりとします。</p> <ul style="list-style-type: none">・多様かつ相互に影響しながら変容する諸文化の構造と動態を究明し、文化研究の先端的な領域を主体的に開拓することができる能力。・言語情報コミュニケーションの諸課題を探究し、グローバル化する現代世界を多角的に研究することができる能力。・高度な専門性の上に立った領域横断的な研究を行うことができる能力。

目次

国際文化学研究科への招待

アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー	1
研究科の構成・研究科の育成する人材	2
博士前期課程・博士後期課程	3

15の多様な専門コース

日本学	4-5
アジア・太平洋文化論	6-7
ヨーロッパ・アメリカ文化論	8-9
文化人類学	10-11
比較文明・比較文化論	12-13
国際関係・比較政治論	14-15
モダンティ論	16-17
先端社会論	18-19
芸術文化論	20-21
言語コミュニケーション	22-23
感性コミュニケーション	24-25
情報コミュニケーション	26-27
外国語教育システム論	28-29
外国語教育コンテンツ論	30-31
先端コミュニケーション論	32
日本語教師養成サブコース	33

国際交流

留学案内	34-35
国際文化学研究推進インスティテュート	36-37

充実した研究・教育サポート体制

就職と進学	38-39
全学の研究支援施設・学生寮・奨学金	40
研究会・研究誌の紹介	41
研究サポート	42
論文題目	43
教員一覧	44-45

Invitation to the Graduate School of Intercultural Studies

15 Specialized Courses	50-57
------------------------	-------

国際文化学研究科への招待

INVITATION TO THE GRADUATE SCHOOL OF INTERCULTURAL STUDIES

研究科の構成 世界とかわり、世界で生きるための 15 の専門コース

専攻と領域

現代社会の文化のあり方を比較考察し、文化間の対立・紛争といった現代的な課題に取り組むには、個別地域の文化及び異文化間の相互関係を考察すると同時に、グローバル化する世界の文化の動向それ自体を考察する能力を培うことが不可欠です。

そのため、国際文化学研究科では、個別地域文化研究を踏まえ、異文化間の相互作用のあり方や特質を多角的に解明する「文化関連専攻」と、グローバル化による文化の現代的位相を解明する「グローバル文化専攻」の2専攻を置いています。

「文化関連専攻」には、各地域固有の文化特性や文化の変容を学際的に研究する「地域文化系領域」、異文化の接触・対立・交流の実態を多角的に探求する「異文化コミュニケーション系領域」を置き、(1) 個別地域文化の理解、(2) 異文化間の関係性・相互作用の理解、(3) 異文化

コミュニケーション能力の育成を目指します。

「グローバル文化専攻」には、グローバル化に伴う西洋近代原理の揺らぎの中にある、現代の社会的・文化的状況をトータルに研究する「現代文化システム系領域」、言語・非言語的コミュニケーション活動と多様な情報メディアの利用に関わる諸問題を探求する「言語情報コミュニケーション系領域」、外国語教育に関する先進的研究と当該分野の卓越した実践者の養成を目標とする「外国語教育系領域」、さらに、後期課程では、国際電気通信基礎技術研究所（ATR）との連携の下に、連携講座「先端コミュニケーション論」を置いています。そして、これらの領域を通して、(1) グローバル化による文化変容の解明と新たな公共文化の構築、(2) 先進的なグローバルコミュニケーションの開発、(3) グローバル化時代の外国語教育システムの開発を目指します。

専攻	領域	コース
文化関連 個別地域文化研究を踏まえ、異文化間の相互作用のあり方や特質を多角的に解明する	地域文化系 各地域固有の文化特性や文化の変容を学際的に研究する	日本学 アジア・太平洋文化論 ヨーロッパ・アメリカ文化論
	異文化コミュニケーション系 異文化の接触・対立・交流の実態を多角的に探求する	文化人類学 比較文明・比較文化論 国際関係・比較政治論
グローバル文化 グローバル化による文化の現代的位相を解明する	現代文化システム系 グローバル化に伴う西洋近代原理の揺らぎの中にある、現代の社会的・文化的状況をトータルに研究する	モダニティ論 先端社会論 芸術文化論
	言語情報コミュニケーション系 言語・非言語的コミュニケーション活動と多様な情報メディアの利用に関わる諸問題を探求する	言語コミュニケーション 感性コミュニケーション 情報コミュニケーション
	外国語教育系 外国語教育に関する先進的研究と当該分野の卓越した実践者の養成を目標とする	外国語教育システム論 外国語教育コンテンツ論
	連携講座（博士後期課程に設置）	先端コミュニケーション論

研究科の育成する人材 世界へ広がるキャリアパス

博士前期課程

文化関連専攻

—専門職として—

- ・国連、JICA 等国際機関の専門職
- ・日本文化の紹介・交流などを企画する各種団体職員・公務員
- ・博物館・美術館の文化プランナー
- ・高度な専門知識を備えた中学校・高等学校教員（英語系）
- ・地方自治体・企業における文化交流事業の企画立案者
- ・外資系・合併企業の研修担当者
- ・文化活動・異文化理解を先導する地域 NPO リーダー

—実践対応力をもったビジネスプロとして—

- ・外資系・合併企業社員
- ・商社等企業社員
- ・日本企業の海外進出要員

グローバル文化専攻

—専門職として—

- ・音楽・美術等の芸術に通じた文化政策専門職員、アートマネジャー
- ・ジェンダー・公共性等、変容する現代文化の諸問題に取り組むジャーナリスト、公務員
- ・高度な専門知識を備えた中学校・高等学校教員（英語系）
- ・語学教育系企業の社員・教員
- ・言語教育教材等の編集者
- ・留学生センター研究員・専門職員・アドバイザー
- ・日本語教員
- ・通訳・翻訳家
- ・言語系・IT 系企業研究所職員

—実践対応力をもったビジネスプロとして—

- ・ソフトウェア技術者
- ・システムエンジニア

博士後期課程

世界の「国際文化学研究」を推進する先進的研究者

—専門職として—

- ・国際機関 / 研究所研究員
- ・国公立 / 企業系研究所等研究員
- ・大学・短期大学・高等専門学校教員

取得できる学位

博士前期課程 修士（学術）
博士後期課程 博士（学術）

取得できる資格（博士前期課程）

中学校教諭専修免許状（英語）
高等学校教諭専修免許状（英語）

博士前期課程 — 夢に応じた2つの「学び」の形 —

国際社会のキーパーソンを育てる<キャリアアップ型>、時代をリードする新進研究者を育てる<研究者養成型>
— 入口から出口まで、目的に応じた多様なスタイル —

	キャリアアップ型	研究者養成型
入試 (一般入試、社会人特別入試及び外国籍学生特別入試)	1.基礎科目 外国語、日本古典文、情報、日本語（外国籍学生特別入試のみ）から選択。ただしコースごとに選択可能な科目を定めているので、詳細は募集要項を参照のこと。 2.専門科目 3.口述試験	
カリキュラム	<ul style="list-style-type: none"> ●キャリアアップのための高度な外国語能力・情報処理能力・プレゼンテーション能力を育成する演習科目 ●一方通行でないインタラクティブな少人数制「特殊講義」を中心に履修 ●所定の単位の修得と修了研究レポートの提出で修士号が取得可能 	<ul style="list-style-type: none"> ●指導教員による充実した個人指導（チュートリアル） ●研究者としての基礎学力を培う「高度専門演習」を中心に履修 ●後期課程の「特別演習」履修も可能 ●修士論文、または複数業績を組み合わせた「修士フォリオ」の提出
進路像	修士号を取得し、専門職として国際的に活躍する	後期課程入試を経て、後期課程に進学を希望する学生に対応。研究者や高度専門家としての道を歩む

2つの教育プログラム

博士前期課程にはキャリアアップ型プログラムと研究者養成型プログラムがあります。一般入試及び社会人特別入試志願者については、入学願書提出に際して、どちらかひとつを選択します。外国籍学生特別入試志願者については、入学後に、いずれかを選択します。

キャリアアップ型プログラム

前期課程修了後、就職を希望する学生に対応した教育プログラムです。幅広い専門的知識と実践的な応用能力の修得によって、キャリアの高度化を目指します。

特殊講義を中心とした所定単位の修得と、キャリアデザインに即した修了研究レポートの提出によって、修士号が取得できます。

研究者養成型プログラム

前期課程修了後、後期課程入試を経て、後期課程への進学を希望する学生に対応した教育プログラムです。

研究者や高度専門家の養成を目指したカリキュラムが提供されています。高度専門演習を中心とした所定単位の修得と修士論文（または修士フォリオ）の提出が修了要件になります。

その他

日本語教師養成サブコース（→P.33）、ダブルディグリー・プログラム（→P.35）があります。

アカデミック・スキル演習

各分野で研究を進めるうえで必要な方法論・技術などのアカデミック・スキルを効率的に修得することを学習目標とします。

- ・ITスキル実習
- ・アカデミック・コミュニケーション（英語）
- ・アカデミック・ライティング（英語）
- ・アカデミック・ライティング（日本語）
- ・社会研究方法論
- ・フィールド調査法
- ・統計・計量分析法

修士フォリオ

修士フォリオとは、修士論文に代えて提出できる、一つのテーマのもとでゆるやかに関連する複数の研究成果から構成されるものです。単一の論文という形式にとらわれず、従来は修士論文として認められなかった多様な研究成果作品・調査報告などがフォリオの一部として認められます。職業や職場との関連をふまえた実践的な研究が行いやすくなり、また複数回にわけて提出するため、計画的な執筆や調査が可能になります。

博士後期課程 — 自立した研究者を育てる「学び」のスタイル —

専門分野を深く究める<コースワーク型>
— 3年間で博士号を取得するための多様で柔軟なサポート —

	コースワーク型
研究テーマ	コースの研究分野に即したテーマ
カリキュラム	個人研究
研究指導体制	指導教員が中心となりコース全教員がサポート
博士号取得のプロセス	<1年次> コースの共同演習で構想を発表、学術論文の投稿、博士基礎論文の提出 <2年次> 学術論文の投稿、学会発表、博士予備論文の提出 <3年次> 毎月1回、部分草稿をコースの共同演習に提出、全教員から指導とサポートを受ける。博士論文の提出
期待される成果	個人の自由な発想と独創性を最大限に生かした学術的研究成果

日本学コース



日本学コースでは、世界の多様な文化の中で日本文化を相対化しつつ、日本という地域における人間の営みを、文化の面から明らかにします。文学・芸術・宗教・思想などの文化や社会に関する古代から現代にいたるきわめて広範囲の諸問題に取り組み、共に研究し学んでいこうと考えています。

日本の文化や社会を深く理解するためには、古文書解読や資料調査を求められることも多いのですが、そのための専門的な能力を高める機会も提供しています。通俗的な日本論に惑わされることなく、高度の専門的技量と学問的能力をもって日本の文化や社会を論じられる人材を育てることを目指しています。

進路実績 (前期課程) 関西学院大学職員、船井電機、アップオン、NEXCO中日本、コウキ商事、兵庫県立高校教諭、初芝学園中学・高校教諭ほか。

(後期課程) 学芸員(芸北民俗芸能保存伝承館、高知県立歴史民俗資料館、茶道資料館、平和祈念展示資料館)、兵庫県庁職員、高校教諭(群馬県立高校、私立灘中学・高校教員)、神戸大学百年史資料室、桃山学院大学国際教養学部准教授、上海外国語大学日本文化経済学院准教授、関西学院大学言語教育センター朝鮮語講師、大学非常勤講師(立命館大学、京都精華大学ほか)、吉林大学外国語学部日本語学科講師、国立公文書館、など。

在籍学生数 (前期課程) 6名
(後期課程) 4名

論文テーマ例 (前期課程) 「職員会議の変化と1980年代」「神戸市の男女共同参画事業と少子化」「三島流兵法書にみる村上水軍の「軍楽」」「但馬城崎「温泉時縁起」の研究」「18世紀初頭の華道の思想」「『今昔物語集』の楊貴妃説話の典拠をめぐって」「対外宣伝雑誌における日本芸能のイメージ」「靖国神社問題を再考する」「'Made in Italy' in Contemporary Japan」「戦後日本の『純潔教育』」「三島由紀夫の思想」「ホラーゲームにおける恐怖表現」「熊本藩の雅楽伝承」ほか。
(後期課程) 「『日本霊異記』の冥界説話から見る冥界観の変貌」「囃子田の演技の実践に関する民俗誌的研究」「ドキュメンタリー映画における音」「米軍占領下沖縄における文化政策とラジオ」「移動する領土をめぐる説話の諸相」「近世藩儒の研究」「戦前の映像文化(幻燈・玩具映画・小型映画)の受容とその歴史的変遷」「新しい波」と1950年代のアヴァンギャルド芸術運動ほか。
廣田吉崇さんの博論に基づく著書『近現代における茶の湯家元の研究』(慧文社、2013)は「林屋辰三郎芸能奨励賞」を受賞しました。

所属教員の紹介

板倉 史明 准教授 日本文化表象論特殊講義ほか

日本映画・映画学。映画学の方法論をベースにして、国際的かつ歴史的な視座から日本映画を研究しています。

長 志珠絵 教授 日本社会変容論特殊講義ほか

近現代日本の文化史、ジェンダー史。最近のテーマは戦争の記憶論、米軍占領下日本の文化研究。

辛島 理人 准教授 日本社会経済論特殊講義ほか

政治経済史・国際文化論。戦時戦後の日本アジア関係やアメリカ民間財団の日本での活動を、ポリティカルエコノミーや文化交流に注目して研究しています。

昆野 伸幸 教授 日本言語文化論特殊講義ほか

日本思想史。1920年代から40年代にかけてのナショナリズムについて、歴史意識や宗教といった視点から研究しています。

寺内 直子 教授 日本芸能文化論特殊講義ほか

日本伝統音楽・芸能論・民族音楽学。身体を用いて表現する音や芸能などに注目し、日本列島の文化を、アジアや世界の様々な文化との関連の中で動的にとらえます。

所属学生からのメッセージ

田中 やよいさん

(博士後期課程 3年)

大阪市立大学文学研究科前期博士課程修了

研究テーマ：1943年鳥取地震に見る災害アーカイブの近代史

私は、災害の記録がどのようにアーカイブ(保管、利用、伝達)されていくのか、1943年鳥取地震の事例を中心に研究しています。近年、大規模な災害の発生により、過去の災害記録が見直され、学際的に扱われています。そうした過去の災害記録は、「何を記録しようとしたのか」という点に、発災当時の社会状況などが反映されます。1943年鳥取地震はアジア太平洋戦争期に発生し、東南海地震(1944年)や三河地震(1945年)とともに「戦争に隠された」と評されてきました。私は、当時の社会における総力戦体制の影響に着目して、公文書や新聞、雑誌などの分析を行っています。そのことを通じて、災害アーカイブが社会との関係でどのように形成されているのか、検討していきたいと考えています。

進学にあたっては、いくつかの懸念がありました。大学院修了から数年経ち、研究テーマも新たに着手し始めたものであること、現住地と大学が離れていること(片道4時間程度)、就業していることなどです。受験情報を集めるなかで、こうした懸念について「どのようにすれば実現可能になるか」という姿勢で対応していただいたことや、研究科案内(この冊子です)でさまざまな立場の院生が所属していることを知り、この研究科を選びました。

研究テーマについては、当初、研究計画書を作成した時点では、展望できていない部分がありました。しかし、ゼミやコース指導を受け、ほかの院生の研究報告を聞く機会を得たことで、自分の研究テーマに対して多角的な視点を持つことができたように思います。通学には少し時間がかかるのですが、ゼミの日程や時間を調整することで、参加できています。

なお、2020年度は大学に行くことができませんでしたが、同期型オンライン形式で、ゼミ、コース指導、コロシアムが実施されました。とくに、ゼミはオンライン化によって参加する機会が増え、論文指導や他の院生の報告を聞く時間があつたことで、孤立感なく研究を続けられました。学修環境の変化のなかで、大学院に所属していることを改めて意識した年になりました。

松元 実環さん

(博士後期課程 3年)

神戸大学国際文化学研究科博士前期課程修了

研究テーマ：戦後日本の「性」教育



純潔教育に関する研究は、現在の性教育への関心を発端とするものが多く、加えて女性の人権問題への関心に基づくものも多く見られます。そこで、わたしは男性を対象にすることで、純潔教育をより体系的に捉えることを目指しています。具体的には、当時の教科書や教育雑誌などを集めたり、実際に純潔教育に関わっていた方にインタビューしたりすることで、これまであまり注目されてこなかった観点から研究対象を捉え直す試みを行っています。

大学院では、さまざまな専門分野の先生方の授業を受けることができます。さらに、日本学はコース発表の機会も多く、領域を渡って多面的なアドバイスを受けられるなどの充実したサポート体制が魅力です。また、そこで学ぶ学生の研究対象もさまざまであるため、自らの視野を広げながら専門性を高めていくことができる環境で、充実した研究生生活を過ごすことができている。

わたしは、戦後日本の性教育である「純潔教育」について研究をしています。敗戦とそれに伴う占領によって様々な新しい制度が作られる中で、特に子どもや若年層の性的逸脱を問題視して開始されたのが純潔教育です。その内容は現在の性教育の基礎となりつつも、より幅広く、時には実践的な側面を持つのが特徴です。

修了学生からのメッセージ

小林 彩夏さん

(2019年度博士前期課程修了)

神戸女学院大学文学部卒業

研究テーマ：三島由紀夫の思想—古典観と天皇観を中心に



近年、メディアなどで天皇や皇族が注目されることが増え、天皇制という問題が私たちにとって非常に身近な存在になってきました。近代の天皇制は、戦後に天皇の神格化否定いわゆる「人間宣言」が行われたことで、それまでの「現人神」から「象徴」としての存在へ変遷を遂げてきました。そのような激動の時代を生きた作家である三島由紀夫は、時代の変化とともに自らの政治的な思想、殊に天皇制について

の考えを強く主張しました。こうした天皇制とひとりの作家の思想との関係について考えることが私の研究テーマです。修士論文では、歴史学と文学の視点を取り入れ、これまであまり追及されてこなかったメディアの史料を中心に彼の思想を繙くことを目指しました。

大学院では、日々の講義や演習を通じて専門性を高めることが可能です。多くの授業は少人数で行われ、時には活発な議論が交わされることもあります。特に日本学はコース発表の機会も多く、様々な領域を専門とする先生方から多面的なアドバイスを得やすい環境にあり、整ったサポート体制のもとで自らの研究テーマを深められます。

院生研究室では、年齢も出身も専門も異なる仲間との交流から知見が広がることもあり、刺激的で充実した研究生生活を送ることができました。

福島 可奈子さん

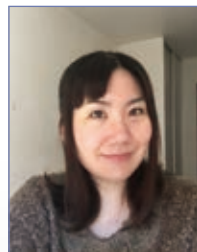
(2019年度博士後期課程修了)

ブリュッセル自由大学哲学・文学研究科修士課程修了

2018-2019年度日本学術振興会特別研究員 DC2

研究テーマ：戦前日本の映像文化史(幻燈・玩具映画・小型映画)

現在、日本学術振興会特別研究員 PD、武蔵野美術大学非常勤講師



現在わたしたちが当然のごとく毎日見る「映像」は、人々がいつ発見し、文化としてどう育んできたのでしょうか。戦後にテレビなどの電子機器が流通するまで、映像とは暗闇のなかに映し出す光のイメージでした。私が専門とするのは、日本人が西洋から輸入された様々な映像機器(光学装置)と出会い、自家業籠中の物とする明治時代から戦前までの映像文化史です。そのなかでも博士後期課程では、プロフェッショナルによる映画作品ではなく、無名のアマチュアや子供が家庭や集会などで楽しんだ映像文化を、三時代の流行—明治期の幻燈、大正・昭和初期の玩具映画、昭和初期の小型映画—から掘り下げて研究しました。それにより従来の映画史研究では見過ごされてきた、日本の映像産業文化の多様性と技術的な連続性を明らかにしました。

私の研究では膨大な史料の精査が必要であったため、ときには研究過程で五里霧中になることもありました。しかし日本学コースでは、少人数制に加えてコース発表の機会が多く、毎回様々な研究領域の教授陣から具体的なアドバイスを得られたため、狭隘化しがちな視野を正しながら研究テーマを深めていくことが可能でした。また学年ごとに段階的な論文の提出が必須であったため目標が立てやすく、博士論文完成に向けて着実に執筆することができました。また在籍中に、神戸大学の協定校であるパリ・ディトロ(第7)大学へ交換留学し、シネマテーク・フランセーズなど現地の博物館での調査や研修にも参加しました。日本とフランス、映像と他芸術との相関関係から、理論研究だけでなく実践経験を積むことができたのも、国際文化学研究科・文化関連専攻・日本学コースならではの魅力だと思います。

博士号を取得した現在、私自身も学生を指導する立場です。これまでご指導下さった先生方のような確かな指導ができていくのか自問自答の日々ですが、博士後期課程で学んだ理論と実践が、現在の研究生生活の何より大切な基礎になっていることは間違いありません。

Q&A

文学研究科の教育・研究内容との違いは何ですか？

国際的な視野から教育・研究を行っています。また、文学研究科では扱われることの少ない学際的、横断的研究分野や研究テーマを積極的に取り上げています。

仕事をしながら教育課程を修了することができますか？

これまで在職中の院生に対しては、5、6時限目を開講するなどの対策を取ってきました。事前にコース教員と相談されることをお勧めします。なお、博士前期課程の学生の場合、長期履修制度を申請すれば、2年分の学費で最長4年まで修了年限を延ばせる場合があります。

アジア・太平洋文化論コース



現代のアジア・太平洋地域は、経済や国際交流等の面で激しい変動を経験しながら急速に発展しています。その意味では今まさに地球上でも最もホットな地域の一つであると言えるわけですが、それらの表面的な発展の流れを追うのみではこの地域の持つ特質は理解できません。東アジアにせよ、東南アジアや太平洋地域にせよ、各地域が古くから保持してきた複雑きわまりない多彩な伝統というものが、その伝統がグローバル化の波をかぶりつつ変容してきた結果が、現在の姿なのです。したがって、この地域の特質を深く理解しようと思えば、社会構造、宗教、歴史、経済状況等々の諸方面から掘り下げた専門的な研究が不可欠となります。本コースでは、それらの専門的な研究視点、研究方法を多様な教授陣が様々な専門領域の授業で伝授し、指導する体制を整えています。

就職実績 (前期課程) アジア・太平洋地域関連で活動している諸企業、諸団体等への就職が予想されます。最近の修了者の就職先例: 八重洲出版、トランス・コスモス(株)。(後期課程) 日本での大学・短大・高専・各種研究所、企業などへの就職の他、留学生の場合には出身国での大学や企業における専門職への就職等も期待されます。最近の修了者の就職先例: 中国・内蒙古大学専任講師。内蒙古師範大学専任講師。中国・北京外国語大学外国語学院専任講師。

在籍学生数 (前期課程) 7名
(後期課程) 10名

論文テーマ例

- バンコクの中間層をデモに駆り立てた要因の研究—PDRC及びUDDにおける末端支持者の政治意識—
- インドネシアにおける大学生の恋愛と性をめぐる葛藤
- 国際交流活動と進路選択—東南アジア青年の船を事例に—
- アイヌ文化の表象と実践—白老町における文化活動を事例として
- 初期日豪関係の展開と日本イメージに関する歴史学的研究
- 明代(14-17世紀)の雲南麗江ナシ族・木氏土司
- 清末から中華民国初期の内モンゴルにおける近代学校教育の展開と知識人の輩出—ハラチン地域と帰化城トゥメド地域の事例を中心に—
- 清代内モンゴルにおける農地所有とその契約に関する研究—帰化城トゥメト旗を中心に—(第12回アジア太平洋研究賞受賞博士論文)

所属教員の紹介

伊藤 友美 教授 東南アジア社会文化論特殊講義ほか

フィールドワークの手法を中心に、タイを中心とした上座仏教圏の社会、宗教、女性などの分野を主として研究しています。

谷川 真一 教授 中国社会経済論特殊講義ほか

現代中国の政治と社会、国際関係などの分野を主として研究しています。

貞好 康志 教授 東南アジア国家統合論特殊講義ほか

インドネシア現代史、華僑華人研究などの分野を主として研究しています。

深川 宏樹 准教授 オセアニア社会文化論特殊講義ほか

文化人類学、社会人類学、オセアニアの社会と文化、人間概念と社会性の研究などの分野を主として研究しています。

所属学生からのメッセージ

団 陽子さん

(博士後期課程 3 年)
 ペンシルベニア大学文理学部卒業、神戸大学国際文化学研究所博士前期課程修了、日本学術振興会特別研究員 (DC2、2017 年 -2019 年)、メリーランド大学カレッジパーク校訪問研究員 (2018 年 -2019 年)
 研究テーマ:「中華民国の対日賠償要求問題:米国の日本占領をめぐる米ソ対立を中心に」

近隣アジア諸国と日本との間でしばしば政治的な火種となる歴史問題。その問題にもかかわる第二次世界大戦の日本の戦後補償について、対日戦争の戦勝国であり最大の被害国ともいえる中華民国の視点から研究をしています。一見、中国研究と思われがちですが、日本の戦後処理には多くの連合国がかかわっており、中華民国の文献を読むだけでは全体像が見えてきません。日本占領の主体であった米国の文献やその他諸国の動向などの歴史的な調査が欠かせません。また、補償とは戦後世界の経済や安全にもかかわる問題なので、さらに政治学的な視点も求められます。

アジア・太平洋文化論コースではアジアを中心とした様々な分野の先生方がおり、幅広い視点から指導を受けることができます。また、当コースが所属する文化相関・地域文化系では、日本学コース、ヨーロッパ・アメリカ文化論コースとの共同の指導体制が整っており、まさに学際的指導が実施されているといえます。お力添えにより、2018年には『中国研究月報』の学術研究賞を受賞することができました。

また、国際文化学研究所では、本学だけでの研究にとらわれず、学外で研鑽を積むことにも力を注いでいます。私は、米国の大学に訪問研究員として滞在し、現地の公文書館や図書館にて文献調査を行いました。また、現地のセミナーに参加し、学会報告を行うなど、自身の研究の幅を広げることもできました。当研究科では、学外での挑戦を支える教員・事務職員の方々のサポートが充実しているといえるでしょう。

そして、日々の研究の下支えとなるのは、やはり院生研究室で過ごす時間。当研究科には、日本人学生の他に、多くの留学生が在籍しています。研究室では、院生たちが互いに助け合い、多様性を尊重しながら日々研究に励んでいます。

当研究科、本コースの魅力は、このように充実した研究環境にあると思います。これから進学されるみなさんも、この環境を活かして実りある研究生活をお送りください。

修了学生からのメッセージ

シーリン (錫莉) さん

(2011 年度博士後期課程修了)
 内蒙古師範大学卒業、2010-2011 年度日本学術振興会外国人特別研究員 DC2
 現在、内蒙古大学蒙古学研究所准教授
 研究テーマ:「清代外モンゴルにおける書記および書記養成に関する研究」



世界史上最大の帝国を築き上げ、史上空前レベルの東西交流に貢献したモンゴル民族の歴史は、世界各国の歴史家たちを魅了して盛んに研究されてきました。中でも、日本におけるモンゴル史研究は素晴らしい伝統を持ち、西洋の歴史家に比べても豊かな研究成果をあげることによって、各国の学者たちに強い影響を与え、世界中のモンゴル史研究をリードして来ました。私は、歴史研究者になるという志を持ち、日本で歴史研究の方法を学びたいという一心で、2005年10月に中国・内モンゴル自治区から日本に渡りました。

その後、私は、2012年3月まで神戸大学大学院国際文化学研究所のアジア・太平洋文化論コース博士前期及び後期課程にて、萩原守教授のご指導の下で、清代モンゴル史を研究しました。

神戸大学に留学していた7年間は、私にとって本当に実りある期間でした。アジア・太平洋文化論コースで様々な視点から研究指導を受け萩原先生の研究指導を通じて幅広い知識を身に着けた私は、日本のモンゴル史研究の強みである漢籍資料のみならず他言語資料をも収集し、直接手に取って詳細に分析するという極めて重要な基本的な研究方法を習得することができました。そして私は、2012年3月に博士号を取得して中国の内蒙古大学蒙古学研究所に就職し、研究を継続することとなりました。現在はこのセンターで、清代モンゴル史研究、満洲語、中国の文書制度史などの講義を担当しながら、大学院生の研究指導を担っております。2017年に、博士論文である『清代外モンゴルにおける書記および書記の養成に関する研究』を内モンゴルで出版し、2018年度内モンゴル自治区第六屆哲学社会科学優勝成果政府賞二等賞を受賞しました。

アジア・太平洋文化論コースはアジア諸地域の政治、歴史、文化などを研究対象とした専門家の教授たちがそろったコースです。在学中、コース内で研究報告するたびに先生方からいただいた具体的なアドバイスや有益なコメントが博士論文の完成に大いに役立ちました。本コースの先生方や萩原先生に教わったことは、私の人生の中で貴重な経験となり今後の研究でも大切な指標となるでしょう。

Q&A

留学生や社会人入学の院生もいますか？

本コースでは日本人と留学生の両方がいつも多数在学しており、年度によっては、社会人入学・長期履修生の院生もいます。

白 那日蘇 (ハク ナルス) さん

(博士後期課程 3 年)
 内蒙古師範大学卒業、内蒙古師範大学大学院修士課程少数民族史専攻と愛知大学大学院中国研究科修士課程文化人類学専攻を修了
 研究テーマ:「蒙疆政権における軍事組織の研究」



私は、中国の内モンゴル自治区科爾沁 (ホルチン) 左翼後旗出身のモンゴル人です。2019年4月から神戸大学の本研究科アジア・太平洋文化論コース博士後期課程に進学し、内モンゴル近現代史を研究しています。内モンゴルで小学校から大学院まで全て母語であるモンゴル語で授業を受けたことは、私の人生にとって貴重な経験でした。愛知大学では中国語で授業を受けましたので、モンゴル語、中国語、日本語で教育を受けた経験があります。

蒙疆政権とは1936-1945年に内モンゴルの西部地域、満洲国の西隣りに存在していた政権です。近代モンゴル史の風雲児ともいべき徳王 (トムチョクドンロブ郡王) と日本人顧問たちが協力して運営していました。蒙疆政権は単なるモンゴル人の政権ではなく、日本、中国、モンゴル、ソ連という複雑な国際関係の中で成立した政権です。その軍事組織の歴史を発端から終焉まで研究すると、近代内モンゴルの実像が現れてきます。

現在、私は主に以下のような方法で研究に取り組んでいます。一つは、文献史料の読解です。日本側の史料として日本人軍事顧問が残した一次史料が東京の防衛省防衛研究所に大量に残されています。内モンゴルでは当事者たちの回想録が『内蒙古文史資料』として出版されています。私は愛知大学で文化人類学の研究手法を学んだ経験があり、現地調査も試みています。また、萩原先生のゼミではモンゴル史や中国史の知識のみならず、キリル文字モンゴル語や満洲語も学びました。今後はロシア語も習得したいです。「日本モンゴル学会」、「内陸アジア史学会」、「日本アルタイ学会 (野尻湖クリルタイ)」等の学会でも毎年発表を聞いたり自ら口頭発表を行ったりし、関連する学術雑誌にも2本の論文を投稿しています。国際文化学研究所ではアジア諸地域を専門とする先生方が多数おられ、自分の専門以外にも他の地域や国々の歴史・文化などの勉強をする機会があります。

私は、2021年4月から日本学術振興会特別研究員DC2に内定し、学間に専念できるようになりました。特別研究員に内定したことは一生の名誉だと感じています。

アラムス (アラ木斯) さん

(2012 年度博士後期課程修了)
 内蒙古農業大学卒業、神戸大学大学院国際文化学研究所博士後期課程修了
 現在、中国・内蒙古财经大学専任講師
 研究テーマ:「清代内モンゴルにおける農地所有とその契約に関する研究」



私は、2004年4月から神戸大学に留学し、総合人間科学研究所と国際文化学研究所のアジア・太平洋文化論コースで博士前期課程と後期課程を修了しました。修士及び博士論文では、「草原の遊牧民であるモンゴル人は定住していないから土地所有意識がなかった」という一般的な認識に反論して、少なくとも清代の帰化城トウト旗のモンゴル人には強い土地所有意識があったということを明らかにしました。

まる9年間の留学生活中に、研究科の名称や研究室の場所など、たくさんの変化がありましたが、指導教員である萩原先生の研究に対する厳しさは全然変わりませんでした。そのお陰で、博士論文によって2013年に日本の「第12回アジア太平洋研究賞 (井植記念賞)」を受賞しました。コースの名前と同じ「アジア太平洋研究賞」を受賞できたのも、アジア・太平洋文化論コースがアジア太平洋地域の政治、歴史、文化などを研究する教授たちがそろったコースであったからだだと思います。萩原先生やコースの先生方から教わったことは、一生役に立ちます。

私は、2013年3月に神戸大学で博士後期課程を修了した後、内モンゴル工業大学で専任講師として経済法、土地法、文化人類学などの授業を教えていました。今年の3月からは、転動して内モンゴル财经大学で専任講師として教えています。

写真は、ドイツのボン大学で撮ったものです。

ヨーロッパ・アメリカ文化論コース



ヨーロッパ・アメリカ文化論コースでは、近代以降、世界の政治・経済・文化などで中心的な役割を果たしてきたヨーロッパとアメリカの社会と文化について、多様な角度から総合的に教育・研究します。これらの地域で発展した文化は世界へと広まりましたが、現在、批判的に再検討されていることは周知の通りです。それに加えて、最近では、欧米の中にありながら近代成立の過程で周縁にあった社会と文化に関する研究も進展してきました。このコースでは、以上のような成果を踏まえて、現代の我々の生活と意識に深く根付いているように見える欧米的な思考や価値観を再検討し、その21世紀における意義を探っていきます。歴史・言語・宗教・思想・文学・芸術・社会制度など、幅広い分野にわたって具体的な考察を積み重ねることで、いまだ知られざるヨーロッパやアメリカの深奥に迫りたいと思います。

所属教員の紹介

井上 弘貴 教授 アメリカ多民族社会形成論特殊講義ほか

政治理論、公共政策論、アメリカ政治思想史を専門としています。とくに最近では、戦後アメリカの保守主義の思想史をはじめとする研究を行なっています。

小澤 卓也 教授 ラテン・アメリカ文化交流論特殊講義ほか

ラテンアメリカ、とりわけ中央アメリカの近現代史が専門です。最近ではグローバルな歴史的視点に立ちながら、中米社会を大きく規定している民族問題や輸出作物生産文化の研究を進めています。

進路実績 (前期課程) 大和証券、日立製作所、三田市役所、関西電力、時事通信社、在外公館専門調査員、東洋電機製造、大成建設、ニトリ、浜松市役所、クボタ、神戸大学大学院博士後期課程進学、明星産商、他
(後期課程) 佛敎大学専任講師、神戸大学非常勤講師、神戸松蔭女子学院大学非常勤講師、大和大学非常勤講師、同志社大学非常勤講師、大阪市立大学非常勤講師、神戸大学国際文化学研究推進センター協力研究員

在籍学生数 (前期課程) 7名
(後期課程) 3名

論文テーマ例 グリム兄弟『ドイツ伝説集』、ウィリアム・モリス研究、『ハリー・ポッター』に見るヴィクトリア文化の受容、アメリカイタリヤ移民、ブロンテの自然観、I Love Lucy における視覚的ギャグの分析、ポルトガルにおけるミランダ語の成立、戦間期アメリカ合衆国における平和主義、孤立主義、ポピュリズム、英国庭園研究、イーヴリン・ウォーの『プライズ、ヘッド再訪』、アメリカの移民政策と中国系移民の現状、他

西谷 拓哉 教授 アメリカ言語映像文化論特殊講義ほか

文学と映画を中心として、アメリカ合衆国の多文化的文化状況や表現の独自性などについて研究しています。専門は19世紀中葉のアメリカン・ルネサンス期の文学ですが、小説の映画化という観点から両者のナラティブとしての特徴を比較することにも関心を持っています。

衣笠 太朗 講師 ヨーロッパ社会文化論特殊講義ほか

専門はドイツ＝中東欧境界地域の近現代史であり、主に現在のドイツ、ポーランド、チェコの境界に位置するシレジア(シュレージエン/シロンスク/スレスコ)における分離主義運動や住民移動について研究しています。

修了学生からのメッセージ

平瀬 紗良さん

(博士前期課程 1 年で、就職のため退学)

研究テーマ:「アメリカにおける大量投獄と刑務所システム」



学部時代は映画や人種問題などのアメリカ文化を中心に学んでいました。学部 4 年次に就職活動をしていましたが、活動していくうちに将来と自分自身についてより深く考える時間をもちたいと考え始め、大学院に進学することを決めました。そして学部時代から興味があったアメリカの人種問題についてさらに専門的、集中的な勉強をするために、ヨーロッパ・アメリカ文化論コースに進学しました。

入学時は BLM 運動を研究テーマとしていましたが、様々な授業や先生方の指導を通して興味関心を広げた結果、テーマを変更し、アメリカにおける大量投獄と刑務所システムの歴史、問題点とその背景にある刑務所ビジネスや制度についての考察を行いました。

この研究科とコースの魅力は、自身の研究分野について様々な分野、観点から多角的に研究することができるだけでなく、自身の研究分野とは異なる地域や事柄についても学びながら興味関心を広げ、自身の研究に繋げていくことができることです。

私は、専門性が高く深い学びに溢れた授業や、先生方や他の学生との高度な議論を通して、新たな興味関心を探索し思考力を養うことができました。また、専門的な授業を受けながら、自分の興味関心や将来についてこれまで以上に深く考える時間が持てたことで、自分自身を見極めることができ、自身が本当に就きたい職業、就くべき職業を見つけることができました。国際文化学研究科で培った多角的な視野と思考力を活かし、英語の専門職員として日本の防衛と日米同盟の強化に貢献していきたいと思っています。

梶ヶ山 薫さん

(2019 年度博士前期課程修了)

研究テーマ:「映画『赤い薔薇ソースの伝説』(Como agua para chocolate)にみる母性表象」
現在、在ジャマイカ大使館専門調査員

私は学部時代にラテンアメリカ地域とその映像の世界に魅了され、メキシコやキューバ映画の研究をしたいと考えていました。まだまだ日本では研究があまり進んでいない分野である一方で、私の研究を理解し、サポートをいただけたのが神戸大学国際文化学研究科でした。特にヨーロッパ・アメリカ文化論コースは、様々な

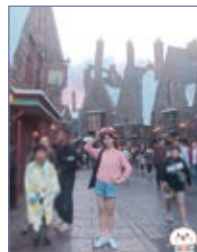
国や地域が一つのコースにまとまり、一つの国では完結しえない事柄を国境や地域を越え、多角的に研究ができることが最大の魅力であると思います。私にとっても映画からラテンアメリカ地域を研究するにあたり、米国やヨーロッパ地域との関係を理解することは必要不可欠な事でした。それらを当たり前に学び、様々な方々にサポートしていただける環境に身を置けたことは有意義なことだったと思います。また、在学中には研究のブラッシュアップのために在キューバの映画研究所での調査や、メキシコ国費留学プログラムの一つ「日墨戦略的パートナーシップ研修計画」に参加し、約一年間のメキシコ留学を実現することができました。

私は現在、在ジャマイカ大使館の専門調査員として、日本とジャマイカ、ペリズ、パハマとのより一層持続可能な関係性を構築すべく、文化交流事業の開催や現地調査を行っています。このヨーロッパ・アメリカ文化論コースで学び、ご指導いただいた多くの事が糧になっていることを日々実感しています。これから、入学を考えている皆さんにはぜひ、自分の興味から積極的に世界へ視野を広げてほしいと思います。

姚 程琳さん

(2020 年度博士前期課程修了)

研究テーマ:「アメリカにおける伝統的家庭の価値観と同性婚問題の関係」



政治、経済、思想などの分野で多角的に世界をリードしてきたアメリカの文化や歴史に興味があり、日本の大学院で高度な研究をしたいと思い、国際文化学研究科のヨーロッパ・アメリカ文化論コースに入学しました。

このコースには、宗教、政治、思想などの多様な講義や演習のもと、指導を受ける体制が整っています。様々な専門分野を持つ先生方から親切に指導を受けることができ、多方面から知識や情報を得て、アメリカ全般の理解を深めることができます。また、日々の講義や演習以外でも、豊富な研究資料の読解をつうじて思考能力を磨きながら研究の専門性を高めていくことができます。

近年、ジェンダーの問題が注目されつつ、同性愛差別と同性婚はどこの国の社会においても頻繁に取り上げられる問題になっています。同性婚に対する考え方とアメリカ人が持つ家族の価値観とは密接な関係を持っています。歴史の条件や経済状況の変動により、家族の機能と意味が変化し、家庭生活に関わる結婚や親の位置づけの見直しが進められています。こうしたアメリカの家族の変容とその原因を探索しつつ、21 世紀のアメリカの家族のあり方や性別の役割分担を再検討することを通じて、同性婚について研究を行いました。

院生研究室では他のコースの学生との多国籍の交流ができるのも大変魅力を感じました。充実した毎日を楽しみながら、専門の研究と多彩な学生生活を通じて新しい世界と出会え、自分の視野を広げることができました。

森 春奈さん

(2020 年度博士前期課程修了)

研究テーマ:「キューバにおけるエドゥカシオン・ポプラーを通してのノンフォーマル教育の可能性 -Centro Memorial Dr. Martin Luther King Jr. を例に-」
現在、エクアドル大使館専門調査員

中南米、特にキューバの独自性がとても面白い…と学部時代から漠然と抱いていた関心を、より学問的な研究として発展させるための第一歩を学ばせてくれたのが、神戸大学国際文化学研究科のヨーロッパ・アメリカ文化論コースです。先生方による的確な指導の下、社会主義体制を貫くキューバにおけるノンフォーマル教育の可能性に関する研究を行いました。

なお、「ヨーロッパ・アメリカ文化論」コースということもあり、中南米地域を理解するために不可欠ともいえるスペインをはじめとしたヨーロッパや北米地域における歴史や社会構造、思想等にも触れることができ、より多角的な視点から修士論文の執筆に挑むことができました。在学中は休学のうえ、「トビタテ!留学 JAPAN」制度を利用しメキシコとキューバで資料収集を行いました。その際にも指導教員やコースの先生方、国際交流課の方々に手厚くサポートしていただき、安心して論文執筆に向けた活動を進めることができたと感じています。

現在は、より「学問的な」中南米地域への視点を養った中、在エクアドル日本大使館にて、専門調査員としてエクアドル経済に関する情報収集や報告書の作成、現地の日系企業の支援等を行っています。ヨーロッパ・アメリカ文化論コースでの学びは、今後のキャリアや学問の追求においても、重要な土台であり続けるであろうと考えています。

Q&A

社会人ですが、仕事をしながらの入学は可能でしょうか？

規定年限で修了を目指す場合、博士前期課程では少なくとも 1 年次においては週に 1～2 回以上の登校が必要ですが、「長期履修制度」を利用すれば最長 4 年まで修了年限を伸ばせますので、登校日と学期毎の履修単位をかなり少なくすることができます。また、博士後期課程の場合は、指導教員との相談により柔軟な受講が可能場合もあります。

外国語の知識はどの程度必要ですか？

英語の文献が読める程度の知識は必要です。どこかの地域に関することを専門的に研究する場合は、当該地域の言語の知識を持っている必要があります。前期(修士)課程の「キャリアアップ型プログラム」では、それほど高度な外国語力がなくても大丈夫でしょう。

専門の先生がいない地域や領域のことを研究テーマにすることはできますか？

ある程度柔軟に対応することができます。受験を考えている場合は、いずれかの教員と連絡を取って、具体的なテーマについて相談してください。

文化・異文化コミュニケーション系

文化人類学コース



本コースでは、多様なテーマと地域を研究対象にする文化人類学の専門スタッフが、充実した教育研究カリキュラムを提供しています。今日の文化の諸問題は、グローバル化に伴うさまざまな文化と価値観の対立、分裂、統合と融和、生成と消滅といったダイナミズムを特徴としています。本コースでは、地に足のついた研究調査（フィールドワーク）から世界を見渡す広くしなやかな視点をもつことで、深い異文化理解をもとに多様な文化が対話可能となるような方法をともに考えていきます。文化をめぐる複雑な問題に積極的にとり組み、国際的に活躍する専門家、研究者をめざす学生、文化人類学の高度な研究を志す留学生も歓迎します。

就 職 実 績（前期課程） 奈良県立大学（専任講師）、京都産業大学（助教）、多摩美術大学（助手）、広東貿易職業技術学校（講師）、中日新聞社、イオン、旭化成、東京三菱銀行、モバゲー、活水女子大学、韓国法務省、バンダイ、大阪府高校教員、青年海外協力隊（コスタリカ派遣）、アビームコンサルティング、東京国際貿易、三菱総研DCS、関西福祉科学大学、神戸松蔭女子学院大学（非常勤講師）、（株）富士ソフト
（後期課程） 神戸大学（准教授、助教）、大阪観光大学（教授）、島根大学（准教授）、武蔵大学（准教授）、法政大学（准教授）、東京医科大学（専任講師）、外務省（専門調査員）、立命館大学衣笠総合研究機構（専門研究員）、帝塚山大学（非常勤講師）、浙江大學（専任講師）、大妻女子大学（専任講師）、滋賀大学（特任准教授）、立命館大学（准教授）、国立民族学博物館（助教）、武庫川女子大学（講師）

在 籍 学 生 数（前期課程） 11名
（後期課程） 10名

論文テーマ例（前期課程）
カーゴカルト、観光、民俗芸能の伝承、ポストコロニアル、マルティカルチュラル・オリエンタリズム、中国の女性の地位、悪石島のボゼ、ローカル・ハワイアン、プリミティブ・アート、在日ベルー人、映像人類学、クラ交易、バングラデシュのフェアトレード、国民文化と教育、在日コリアン、国際結婚、在日ベトナム人、奄美出身者同郷団体、文化遺産、伝統の創造、多文化共生、朝鮮族、映像、アイデンティティ・ポリティクス、ポピュラー音楽の表象、ジャマイカのペンテコステ教会、在米カリビアン、カーニバル、在米コリアン・アイデンティティ、ラストファリ運動、ジャマイカのエチオピア正統教会、キリスト教と文化の文脈化、日系アルゼンチン人、ドミニカ共和国野球移民、スポーツ移民とトランスナショナリティ、在米華人、エスニック・コミュニティとメディア、マルティレイシャル、在日ブラジル人、移民の子弟教育、メキシコ女性と住民参加型開発、カナダ先住民、ディアスポラ・アイデンティティ、日系ハワイ人、帰米二世、ヒスパニック、カリフォルニア州バイリンガリズム、限界集落
（後期課程）
文化の真正性、ヴァヌアツ・アネイチウム、歴史人類学、難民、カレンニー、ホームステイ、在日ベトナム人、ケアと家族、朝鮮族村落変容、朝鮮族移民の女性化、華僑・華人、ベトナム観光、オーストラリア・アボリジニ、「問題飲酒」、先住民と非先住民、カリブ海地域、ジェンダー、男性性、ダンスホール文化、ダンスホール・ゴスベル、ポピュラー音楽、カリブソ、ソカ、ナショナル・アイデンティティ、人種と民族ポリティクス、混血の表象、当事者性、「オモニ」―韓国社会における「母性」とケア、マイノリティ、牧畜民ヒンバ／ヘレロの土地認識

所属教員の紹介

梅屋 潔 教授 民族学特殊講義ほか

社会人類学、東アフリカ民族誌、妖術・邪術研究、日本の民俗宗教、開発の人類学などの分野を主として研究しています。

岡田 浩樹 教授 民族誌論特殊講義ほか

朝鮮半島、日本を中心とした東アジア諸社会およびベトナム、植民地主義および近代化過程における家族、宗教の再編成、マイノリティと多文化主義、宇宙人類学などの分野を主として研究しています。

齋藤 剛 教授 文化人類学特殊講義ほか

社会人類学、中東民族誌学、人類学的イスラーム研究、モロッコ、グローバル化と宗教・民族などの分野を主として研究しています。

下條 尚志 准教授 現代人類学特殊講義ほか

歴史人類学、ベトナム・東南アジア研究、多民族・多宗教の混濁、河川・海域世界、移民・難民、戦争・社会主義・市場経済化のなかの生存戦略などを主として研究しています。

大石 佑香 講師 社会人類学特殊講義ほか

生態人類学、環境人類学、人類史、生業、物質文化、先住民、シベリア民族誌、北極地域研究などの分野を主として研究しています。

所属学生からのメッセージ

眞明 夏三さん

(博士前期課程 2 年)
立命館大学国際関係学部卒業
研究テーマ：「ガーナの葬式」



私はガーナの葬式をテーマとして研究をしています。死という、人類に普遍的な事象ですがその在り方は実に様々です。ガーナの人々がどのような死生観に基づいて、どのような葬式をしているのか、文献調査やフィールドワーク(現地調査)をもとに研究していきたいと思っています。

私は学部時代に国際関係学を専攻し、新卒で就職、1年半働いた後に退職しました。その後、青年海外協力隊に携わる中で、自分の価値観が必ずしも現地の人々に当てはまるわけではないと感じ、自分ではない人々の視点を知りたいと考え、文化人類学を志しました。文献を読み、先生方と話す中でガーナの葬式という研究テーマにたどり着きました。

大学院、そして文化人類学コースに入るといことは、自分の面白いと思うことを突き詰められる環境に身を置くことだと感じています。授業だけでなく、読書会、個別指導などを通して、文献を読み、議論を深めます。特に合同ゼミという、コースに在籍する学生と先生方の全員が出席するゼミでは、毎週数名の学生が研究報告を行い、その発表に対して出席者からコメントがもらえます。合同ゼミは以後の研究の方向性を検討できる貴重な機会であるとともに、定期的に発表順が来るので、研究の進捗の1つの目安にもなります。

また、先生方、学生ともにさまざまな専門性を持つ人が集まっていることも特徴です。在籍する学生数は多いですが、誰一人として全く同じ研究をしている人はいません。授業や合同ゼミのコメント、さらに研究室での何気ない会話など、誰と話しても自分とは異なる視点を持っており、いろいろなところに研究のヒントが転がっています。

文化人類学コースにいる人と話していると、自分たちとは異なる文化、慣習、宗教など、「違う」ことを拒否するのではなく、面白い、なんでだろう、と深掘りしていく考え方を持っている人が集まっていると感じます。また、研究では他の文化を見るだけでなく「自分たち」って何なんだろう、とも問いかけます。研究を進めていくと知らないこと、わからないことばかりで途方もない気分になることもありますが、先生方や他の学生とともに「違い」や「わからないこと」を面白いと思いながら研究を進めていくことができます。

修了学生からのメッセージ

平野 智佳子さん

(2019 年度博士後期課程修了)

研究テーマ：「ポスト植民地状況を生きるオーストラリア先住民のアボリジナル・ウェイに関する人類学的研究—中央砂漠における飲酒をめぐる諸実践に注目して」

現在、国立民族学博物館助教



オーストラリア中央砂漠、どこまでも続く荒野に現れるアボリジニの小さなコミュニティが私の調査地です。そこでアボリジニたちと共に暮らしながら、規制下における酒の獲得、分配の方法を調査しています。

人類学的研究に不可欠ともいえるフィールドワークでは、自らの「常識」が覆される瞬間が度々訪れます。私にとってアボリジニたちとの生活は驚きと困惑の連続でした。彼らと行動をともにしていると、従来のものの見方ではどうしても説明のつかないことがあると気づかれます。そうした違和感は、時として「分かり合うのは無理なのではないか」という苛立ちや徒勞感に結びつくこともありますが、簡単に手放してはいけません。なぜなら、それらが現地の人々の生きる世界を読み解くための重要な手がかりとなるからです。

大学院では、このフィールドワークでの発見を民族誌としてまとめていきます。先行研究の読解や整理、調査データの扱いや議論の展開の方法等、論文執筆の技術の習得は決して容易ではありませんが、先生方は根気強く指導してください。院生仲間との交流も心の支えになるでしょう。論文執筆に並んで、研究生活では調査資金の獲得も大きな課題となりますが、日本学術振興会の特別研究員など競争的資金に関してコース内にしっかりとしたサポート体制が築かれており、採択実績も継続して出ています。

文化人類学コースでは数年間に渡る課程を修了した後、多くの院生がアカデミズムの世界に羽ばたきます。研究者として第一線で活躍される先輩方の背中を見て私も研究職を志しました。まだまだ駆け出しですが、院の扉を叩いた日の知的好奇心は衰えることなく、益々刺激的な毎日を過ごしています。フィールドで得られた知見から私たちの生きる世界を紐解くことに関心のある方はぜひ本コースの扉を叩いてみてください。皆さんと人類学の議論を交わす日を楽しみにしています！

Q&A

学部では文化人類学を専攻していませんが、大丈夫でしょうか。

必ずしも学部で文化人類学の専門コースにいる必要はありません。ただし、文化人類学についての基本的知識を身につけておくことよいでしょう。最近は手頃な入門書、概説書がふえていますので、まずはそれらを参考にし、所属する大学の文化人類学関係の講義・演習を受講することをお勧めします。大切なことは、明確なテーマをもち、これを文化人類学の視点から考える姿勢です。

木村 彩音さん

(博士後期課程 2 年)

研究テーマ：「オーストラリア先住民トレス海峡諸島民の混血と混濁性をめぐる人類学的研究」



私の先住民との出会いは、子どもの頃読んだ絵本でした。民族衣装を着て、動物や精霊と話し、自然と調和して生きる姿がとても印象的でしたが、将来自分が彼らの研究することになるとは思ってもみませんでした。私が研究対象としているオーストラリア先住民のトレス海峡諸島民は、風や波を読み、ジュゴンやウミガメを獲って暮らす海の民です。それだけ言うと、絵本と同じく自然と調和して生きる人びとのようですが、それは彼らの全てではありません。フィールドワークを通じて、彼らの人間臭さや近代に生きるたくましさに触れると、

自分の中の先住民像が偏ったものであったことに気付かされます。このように、自分の中の思い込みや常識が相対化されることこそ、現地の人びとと深く付き合うこと、そしてそこから彼らの世界を理解しようとする文化人類学の醍醐味だと思います。

文化人類学コースでは、国内外様々な場所をフィールドとする院生が集まり、人類学的思考の訓練を積んでいます。人類学を基本的な土台としつつも、それぞれ多様な分野、現象に関心を持っていて、互いに議論を交わし新たな知見に触れるのはとても刺激的です。

また院生は、そうして得た知見やフィールドワークの成果を、学会発表や論文投稿などを通じて積極的に発信することが求められます。本コースでは、それに必要な論文執筆や発表の技術、議論の深め方などを身につけるサポート体制が整っています。週に一度開かれるコース内のゼミでは、実際の論文の草稿を検討しながら院生同士で議論を交わすほか、コースの先生方全員から指導を受けることができます。先生方には様々な分野とフィールドのエキスパートが揃っており、多様な角度から根気強くコメント、指導をさせていただきます。こうしたプロセスを経て、博士後期課程の院生は博士論文の完成に必要な技術と思考力を身につけます。

研究を続けていくことは決して容易なことではありませんが、充実した研究環境はその継続を大いに後押ししてくれるものだと思います。私自身も、本コースの恵まれた環境と周囲の人たちに支えられていることを日々実感しています。

澤野 美智子さん

(2013 年度博士後期課程修了)

神戸大学文学部人文学科卒、韓国ソウル大学校社会科学大学院人類学科修士課程修了
博士論文題目：「(オモニ)を通して見る韓国の家族—乳がん患者の事例から」

現在、立命館大学総合心理学部准教授

私の研究テーマは、韓国の家族です。特に、乳がん患者さんたちが病気に対処するなかで家族とどのような相互行為を行っているのか、ということに注目して博士論文を書きました。現在はさらに、代替療法的な食餌療法、ケア、ジェンダーなどの問題へと広げて研究を進めています。

博士課程では、研究者としての心構えから論理的な文章の書き方、博士論文のアドバイスにとどまらず、将来就職したとき学生を教えるためのスキルに至るまで、長期的な展望を見据えたご指導をいただきました。指導教員以外の先生方に教える請いに行くことも積極的に奨励される雰囲気です。ひとつの問題に対して様々な角度からご意見をいただくことができ、考えを深めることができました。

また、院生たちで行う研究会や読書会も、研究情報を交換したり学問的知見を深めたりするにとどまらず、研究上の悩みを共有したり互いにアドバイスをしあったりするうえでも非常に有意義でした。志願者の皆さんも、このような恵まれた環境を活かし、充実した大学院生活を送ってください。

指導教員以外に研究上あるいは論文の指導を受けたり、論文テーマが変わって指導教員の変更をすることはできますか？

教員全員の共同指導体制をとっており、指導教員以外からも指導を受けることができます。また、研究テーマを変更する必要がある場合には、所定の手続きを経て指導教員をコース内で変更することも可能です。

文化・異文化コミュニケーション系

比較文明・比較文化論コース



本コースでは文明・文化が地理や言語などの様々な境界を越える諸相について、主に科学技術文明と言語文化を考察の対象として、その発信・受信行為がもたらす変容のダイナミズムを歴史的に比較研究します。とりわけ、グローバリゼーションが進展する中で明らかになっている、文明・文化における優位と劣位という非対称性を念頭に、一方的な受容とされる現象の背後に抵抗、偏見、創造などの側面があることに注目し、その交流や変容における双方向性について、最新の研究を題材に理解を深めることを目指しています。

進路実績 長崎市職員(学芸員)、三菱東京UFJ銀行、パナソニック電工、ニシキ商会、ニトリ、GMOクラウド、兵庫県立大学客員教授他。

在籍学生数 (前期課程) 0名
(後期課程) 0名

論文テーマ例 科学技術の発展と安全・安心社会の相関、魯迅「故郷」と日本の国語教科書、日本における『聊斎志異』の翻訳と翻案—「竹青」を中心に、村上文学の越境—短編小説の日中対訳をめぐって、ラフカディオ・ハーン『骨董』と『北斎漫画』—挿絵という、もうひとつの文化表象を読む、生野銀山お雇い外国人ジャン・フランソワ・コワニエと日仏交流、西川如見の文献に見る宇宙観・自然観、そのほか、明治期来日外国人、古典テキストとイメージ、環境問題、科学史、科学社会論に関するものなど。

所属教員の紹介

北村 結花 准教授 伝統文化翻訳論特殊講義ほか

近代における日本古典文学の受容について『源氏物語』を中心に研究しています。古文をはじめ、さまざまな文献を丁寧に読むことを基本にしたいと思っています。

田中 祐理子 准教授 越境文化形成論特殊講義ほか

近現代の医学を中心とした科学の歴史と、同時代の哲学を研究しています。科学と人間性の関係を、生命科学や原子物理学の歴史を通じて考察しています。

深町 悟 講師 越境文学論特殊講義ほか

19世紀後半から第一次大戦ごろの英国近未来戦争小説(『進攻小説と私は呼んでいます』)が英国内、あるいは海外でどのような影響を与えたかを研究しています。

近藤 祉秋 講師 越境社会文化論特殊講義ほか

内陸アラスカ先住民社会について文化人類学的な観点から研究をしています。人間と動物の関係、マルチスピーシーズ民族誌、キリスト教化などが研究のテーマです。

塚原 東吾 教授 科学技術社会論特殊講義ほか

科学史および科学技術社会論を研究しています。最近では地球環境問題、気候変動とアンソロポセン、それにバイオ資本主義の問題を検討しています。

修了学生からのメッセージ



島 早里奈さん

(2021年度博士前期課程修了)

神戸女学院大学文学部卒業。研究テーマは「江戸時代の文献からみる魚食の分析～『江戸流行料理通』・『俳風柳多留』より」。現在、社会保険診療報酬支払基金職員。

大学在学中に様々な文献を通して、和食文化に興味を持ち始めていた私は、卒業後も研究を深めたいと思い、神戸大学国際文化学研究所のオープンキャンパスに参加しました。そこで「塚原研究室（通称：つかけん）」に所属する方々、先生の研究姿勢に魅了されました。実体験や調査の大切さを痛感し、辻ウェルネススクッキングでは日本料理を、京都・萬亀楼では庖丁式を経験し、江戸時代から続く鎌倉の料理茶屋「八百善」では、江戸料理の体験と八代目店主へのヒアリングを実施しました。

比較文明・比較文化論コースに入学後は、グローバル的な視野から食文化についての理解を深める機会を頂戴しました。岐阜県での科学史学会では、朴葉味噌など地域の料理を、写真に掲載している、ピビンバ発祥の地、全州（韓国）で開催されたICHSEAでは、韓国料理を体験することができました。大学院の大納会では、国際色豊かなゼミ生達と体験した韓国をはじめ諸外国の食文化について情報交換しました。

また、自身の分野はもちろん他分野、他専攻の授業も受講できる恵まれた環境を活かすことによって知識の幅が広がり、さらに、語学教育にも関心があった私は、日本語教師養成コースも受講しました。

国際色豊かな研究室では、母国をはじめとする各々の国の代表的な料理と一緒に食すことを通じて、諸外国の実情や文化に触れることができ、充実した学生生活を送ることができました。分からないことがあったらお互いに助け合い、時には切磋琢磨しあえる仲間ができた研究室は、私にとって憩いの場であり、鍛錬の場でもありました。諸事情で帰国してしまった留学生とも連絡を取り合っており、コロナ禍で実現できなかった各国の留学生との旅行をいつかは実現させたいと思います。修了後も食文化の研究を継続したいと考えていますので、諸外国にも目を向け、研究室の仲間たちとも繋がり続けたいと思います。是非、皆さんにもこの研究科で、多面的な視野を広げ、多国籍な仲間たちとともに研究を深めて欲しいと考えています。



北村 沙緒里さん

(2012年度博士前期課程修了)

広島市立大学国際学部卒業、神戸大学国際文化学研究所博士前期課程修了。研究テーマは「小泉八雲を中心とした明治期の来日外国人の比較文学研究」。現在、長崎市職員（学芸員）。

私が大学院への進学を志望したきっかけは、学部時代の研究テーマをもっとしっかりと勉強したいという単純な理由からでした。私は本コースで、明治期の来日外国人の著作に見られる「日本」像についての比較研究がテーマでした。修了研究レポートでは、小泉八雲の文学作品を扱い、テキストと挿絵の表象について論じました。私の場合、入試当初の研究計画の内容は博士前期課程の二年間で大きく変わりました。しかし、それも限られた研究期間の中で、恵まれた指導体制と充実した資料環境（図書館など）によって得られた結果だと思います。本コースの特徴は、大きく科学技術文明と言語文化の二つの研究分野に分かれます。異なる分野の境界を越えて、学生生活の中で仲間と研究について語り合えるのは自身の研究への刺激になります。また、コースにとらわれない横断可能な履修システムによって、芸術、思想、文学など、あらゆる視点から自身の研究を深めていくことが可能です。入学時の研究計画を進めていくことも本分ですが、授業を通して得られる研究の新たな視点、見直し、深化は、自分次第でいくらかでも研究に反映できると思います。充実した研究生活を支える環境が整っています。

田井中 雅人さん

(2021年度博士後期課程修了)

早稲田大学政治経済学部卒業

研究テーマ：「放射線被曝防護の国際的基準策定プロセスの科学史的研究」

新聞記者として原爆や原発といった核問題を取材してきた私は、故・中川保雄・神戸大学教授（1943-91）の著書『放射線被曝の歴史』に大いに触発されました。縁あって、中川教授の系譜を継ぐ国際文化学研究所（比較文明・比較文化論コース）の塚原東吾教授の指導を受けながら、博士論文の執筆をしました。

研究では、中川教授の遺族から神戸大学に寄託された段ボール15箱分の資料を読み込みながら、放射線被曝防護の国際的基準がどのように策定され、2011年の福島第一原発事故後にもそれが適用されているのかを検証しました。

2020年12月に神戸大学主催で開催された科学技術社会論（STS）学会の「中川保雄記念シンポジウム」で報告させていただきました。専門分野を深掘りすることで、アカデミズムとジャーナリズムの双方に貢献できればと考えています。

勉強熱心な塚原研究室の学生さんたちとの交流は刺激的です。あいにくのコロナ禍でフィールドワークや対面の機会はめっきり減りましたが、SNSなどでマスコミ志望の学生さんたちの就職相談や作文指導を行い、研究室から新聞社内定者が2人出たのもうれしいことです。



白井 智子さん

(2014年度博士後期課程修了)

クレモン＝フェラン第2大学人文社会科学部研究科修士課程修了。研究テーマは「生野銀山お雇い外国人ジャン・フランソワ・コワニエと日仏交流」。現在、姫路日仏協会会長。

私は、本大学院入学以前、フランス語教育と日本語教育に携わる傍ら、兵庫とフランスとの交流史を色々な時代・人物に焦点を当てて調査・研究をしていました。しかし、これらの研究は題材が多様で一貫性を欠いていたため、ご専門の先生方からご指導いただきながら、これまでの調査結果を練り直し、さらに研究を深めて博士論文として一つに纏め上げたいと考え、大学院入学を決めました。

本コースを選んだ理由は、私が探し求めていた文化交流や比較文化、科学技術史が専門の先生がいっぱいだったことに加え、様々な国や時代における文明や文化、歴史に精通された先生方が結集して、多方面から研究指導に当たっておられたからでした。また、国際文化学研究所は、所属コースに関係なく、他コースの授業も履修可能なため、より一層学際的研究ができ、その上、本大学は複数のフランスの大学と協定を結んでおり、院生でも留学できる機会を得られることも私にとって大きな魅力でした。

在籍中、指導教授を始め、日仏両国で諸先生方からきめ細かなご指導を頂戴し、様々な観点から多角的に研究を進め、大きな成果を挙げることができました。恵まれた環境の中で充実した研究生活を送ることができ、私にとって掛替えのない素晴らしい3年間でした。

Q&A

理系じゃなくても大丈夫？

複雑多様な社会を理解する上で、科学的な物事の見方を身につけることはとても有意義だと思うのですが、大学時代は文系でした。本コースでの研究には理系の学問的基礎が必要なのでしょうか？

私たちのコースでは、科学史や科学技術社会論も勉強できますが、これは科学的・社会的意義や科学の歴史、東西の科学思想の交流等を研究する科目で、必ずしも、高度な自然科学についての知識や、理系の専門性を要求するものではありません。文系の方でもまったく大丈夫です。

海外と日本の古典を同時に研究？

これからの国際社会では世界各地の文明や文化の比較や相互影響についての知識は不可欠だと思うのですが、幅広い国内外の古典や複数の文化などを並行して研究できるか不安です。

私たちのコースでは古典のみならず近・現代の文化や文学の研究もおこなえます。重要なのは、むしろ複数の文化や文明を比較するという研究姿勢で、研究テーマが定まれば、それを掘り下げたり、広げたりするための豊富なリソースが用意されています。すべての分野と科目への関心・学習が均等に要求されるわけではなく、みなさんが研究テーマを選択したとき、そうした幅広い視野から多様なアドバイスと柔軟なサポートを受けられるのだと考えてください。

文化・異文化コミュニケーション系

国際関係・比較政治論コース



本コースでは、社会科学をベースに世界各地域の政治現象を捉えることを目指しています。たとえば、国際社会の変容を踏まえながら、国内の政治と社会の関係が変化する様態を浮き彫りにする高度な研究が、院生によって進められています。また、従来の政治学や国際関係論では十分に取上げられてこなかった分野横断的なテーマについて、積極的に現地調査を行いながら取り組む院生もいます。5名の教員は、政治学の主要なアプローチを全てカバーするバランス良い構成となっており、院生による新しい研究意欲に対応していく体制となっています。

特筆したい点として、論文作成の基本に関して新年度毎にオリエンテーションを行っています。また論文作成指導では、前期課程と後期課程の院生が全員、毎学期出席するグループ研究発表会を実施しています。この場の知的迫力は、ぜひ体験して頂きたいものです。教員と院生の全員が協力して徹底した検討を加え、オープンな場で鍛え合っています。この過程で、参加者には、向上心、自覚性や集団での作法が身に付きます。また政治学の基礎から応用までを修得し、また社会に出て通用する思考力や討論力を体得していきます。

本コースでは、院生がどんな研究テーマを選択しても、新しい多文化共生のあり方を大切に視線に身に付けて頂きたいと思っています。教育政策、移民問題、民主化、ナショナリズムの動態、安全保障問題、福祉制度などについて、政治と文化の関連に注目するアプローチを用いて研究が積み上げられてきたのも本コースの特徴です。また前期課程では歴史学を修めた方が後期課程で政治学を身に付けたい、といった学際的な院生の志向に対応してきました。キャリアアップの方にも、研究者志望の方にも、きっと自分を向上させるきっかけを見つけてもらえるはずと信じています。

わたしたちと共に、新しい国際社会のあり方を見出そうではありませんか！

所属教員の紹介

中村 覚 教授 比較地域社会論特殊講義ほか

国際政治学の諸理論を見直し、新興・発展途上国地域における紛争予防、多文化主義、テロ対策等に適するアプローチやモデルを探求しています。中東・ムスリム地域の安全保障、日本と中東の関係を含む国際関係、国家形成を研究しています。

新川 匠郎 講師 多文化政治社会論特殊講義ほか

議会と政府の関係、ドイツ・ヨーロッパの政治、質的比較の手法を主に研究しています。

安岡 正晴 教授 比較地域政治論特殊講義ほか

現代アメリカ政治（特に移民・人種問題、連邦制、日米中関係など）を研究しています。

李 昊 講師 比較政治社会論特殊講義ほか

近現代中国の政治（特に中国共産党史、エリート政治、党政府関係など）、東アジアの国際関係（特に中国の対外政策、日中関係、米中関係など）を研究しています。

就職実績（前期課程）関西経済連合会、大阪市、神戸大学職員、日本新薬、テス・エンジニアリング、独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構、国際交流基金、(株)日本オラル
（後期課程）アジア経済研究所、Promis学術研究員、日本経済研究所、安全保障貿易情報センター、関西学院大学国際学部専任講師、大阪大学人間科学研究科助教

在籍学生数（前期課程）7名
（後期課程）8名

論文テーマ例 The Futenma Relocation Problem in the U.S-Japan Military Alliance、米国連邦議会下院議員の投票行動の分析、セルビアのヨーロッパ化—メディア表現の自由とコソヴォとの関係正常化に注目して、イラン核問題における討議の論理、スウェーデンにおける移民政策の変容と移民の周辺化？ 1990年代以降のワークフェア強化による集住化と格差拡大、エジプトにおけるテロリズムの社会運動論的分析

院生からのメッセージ

張 志昊さん

(博士前期課程 2 年)
蘭州大学マルクス主義学部卒業
研究テーマ:「一帯一路に対する日本の対応研究」



学部時代にサマーキャンペーンで日本に一度来たことがありまして、その時から日本に興味を持つようになりました。大学を卒業後2年間、日本語を勉強しながら自分が研究したいことを決めてから本コースに進学しました。

国際関係・比較政治自体は大きな概念であり、経済関係、政治関係、社会関係など非常に多くの複雑な要素が含まれています。本コースではグローバル化から安全保障、ナショナリズム、テロ対策、人権などの国際関係についての研究の議題という大きな枠組みの下で、一人一人が自分の好みによって

異なる選択することができます。例えば、私自身は一帯一路に大きな興味を持っているので、日本は一帯一路に対してどのような態度をとっているのか、そしてその原因を研究しています。

本コースは論文指導のために集団指導としてドライブでオンデマンド指導とライブ発表会を行っています。毎回の集団指導で自分の指導教員だけでなく、ほかの先生と院生からの質問と助言をもらうこともできます。また院生研究室で授業に対する疑問や研究上の問題を各院生と交流して、新たな知見を得られると思います。

国際関係は国と国の関係であり、人と人との関係でもあると思いますので、今自分が研究している小さなテーマから国際社会の複雑性に対して独自の理解と判断ができることが期待されています。留学生としての私は将来日中関係のために自分が学んだことを生かして、自分の力を尽くしたいと思います。

木村 英里菜さん

(博士後期課程 2 年)
2018 年ナポリ東洋大学アジア・アフリカ研究科博士前期課程修了
2019 年神戸大学大学院国際文化学研究所博士前期課程修了



私は、学部時代には英語文化学科に所属していましたが、オーストラリア等への留学を経て国際関係学に関心を持つこととなり、当コースに進学しました。

国際関係学の中でも「非伝統的外交」に特に関心を抱き、修士課程では、「日本の広報文化外交政策の理論的考察」と題し、日本のパブリック・ディプロマシー政策をいくつかのモデルを通して理解することを試みました。また、大学院時代には、イタリア・ナポリへの二重学位留学にも挑戦させていただく機会を得て、アジアとは異なる広い視野から学ぶ大変貴重な経験となりました。

現在所属している職場は、まさに自らが研究対象としてきた広報文化外交政策を日本で唯一の公的機関として担う場であり、研究で得た知識を実務のレベルで理解し直しつつ、充実した日々を送っています。そのような中、修士課程で得た「調査力」や、「論理的思考」、さらにそれらをわかりやすく他者に伝える「プレゼンテーション能力」は、非常に役に立っているスキルといえます。

今後は、実務と研究の両側面から「パブリック・ディプロマシー政策」を理解し、そして発信できるよう、さらに邁進したいと思います。

修了学生からのメッセージ

合田 裕海さん

(2021 年度博士前期課程修了)
神戸大学国際文化学部卒業
研究テーマ:「イタリア・五つ星運動から見る『中抜き』政治」
現在、三井住友銀行勤務



私は学部時代の留学先であったイタリアやEU、またそこに住む人について政治面からより研究したいと思い、本研究科に進学しました。ちょうどコロナ禍での修士課程となってしまう海外に行くことはできませんでしたが、修了研究レポートでは主に先行研究や新聞、政党の発する情報をもとに、イタリアの五つ星運動が市民とどのような方法でコミュニケーションをとり政権与党となったのかを分析、研究しました。

本コースの特徴は、先生方や他の学生と積極的に交流する中で自らの研究外のことに触れ、自分の研究を深められると同時に広く知見を得られる点です。政治学と言っても対象や分野、研究方法などは様々で、定期的なコース全員での研究報告会や研究室内、講義などでお互いの専門や関心を共有し、アドバイスを意見、指導を受けることで大きな刺激を受けました。

また私の場合は、他コースの講義に出たり先生方が学部の方で企画する研修プログラムやイベントに参加したりすることでコース外での交流の場を得ていたため、コロナ禍であっても多様な国や立場の人と関わることができ、研究以外でも充実した大学院生活であったと感じています。コース内だけでなくコースを横断して様々な機会を得られる点も本研究科の良さだと思います。

就職後は研究と直接結びつく業務内容ではないものの、大学院生活で得た研究知識や思考法、視点を活かした仕事をしたいと考えています。

佐藤 良輔さん

2018 年度博士後期課程修了
京都産業大学外国語学部卒業、神戸大学国際文化学研究所博士前期課程修了
現在、神戸大学大学院国際文化学研究所科学術研究員



私は、学部生の時にイタリア語を専攻し、大学院でイタリアの移民問題について研究しました。博士論文では、イタリアの移民政策の発展過程において重要な役割を果たした要因について、政治学の知見に基づきながら考察しました。

国際関係・比較政治論コースの特徴は、コースの教員と学生が参加する研究発表会が毎学期開催されることです。発表前に指導教員の先生と面談し、その後の発表会で多角的な視点から批評を受けながら、学位論文の執筆を進めます。このように研究指導を定期的に受けたことは、モチベーションの維持に繋がり、修士論文や博士論文の完成に向けてプラスに働きました。さらに、多種多様な関心をもつ本コースの院生たちと意見を交わしアドバイスを受けられたことは、移民問題という分野横断的なテーマを考察する際に大変役立ちました。

また、国際文化学研究所には様々なコースが置かれているので、所属するコース以外の授業も履修することができます。博士前期課程のときに参加したフィールドワークについての授業は特に興味深く、有意義な時間でした。大学院での年月はあまり長くはないですが、様々な学問に触れることで多くの刺激を受け、充実した研究生生活を送ることができると思います。

Q&A

学部では政治学や国際関係論を専攻していたわけではないのですが、大丈夫でしょうか。

必ずしも学部で専攻している必要はありませんが、研究をより実りあるものとするために、入学までに予め基本的知識を身につけておくのと良いでしょう。

現代政治の複雑な諸問題を理解するためには、これまでの学問領域を横断したり

乗り越えたりしながら、新しい知見を目指す営みは意義高い挑戦であると考えられます。

オープンキャンパスで政治学の勉強の仕方に関して説明しますので、ぜひお越しください。

モダニティ論コース



国民国家という政治原理であれ市場という経済原理であれ、あるいは小説という文学形式であれ遠近法という絵画技法であれ、西欧近代に由来するこれらの社会的・文化的な装置は、現代世界の基本的な枠組みをかたちづくってきました。ところが現在、この西欧近代の原理（モダニティ）は、グローバル化の進展とともに根底から揺らいでいます。こうしたなかで求められているのは、あらためて「モダニティ」の意味を問いなおし、激動する世界のゆくえを的確に読み解くことだといえるでしょう。本コースでは、近現代の社会思想・経済思想・政治思想・文化言説・表象文化を丁寧に分析することをつうじて、アクチュアルな課題に応えうる足腰の強い思考力を養成することをめざしています。

所属教員の紹介

石田 圭子 准教授 文化言説系諸論特殊講義ほか

美学・表象文化論。近代以降の芸術と政治の関わり、芸術における他者とのコミュニケーションなどをテーマにしています。

著書：『美学から政治へ モダニズムの詩人とファシズム』（慶応大学出版会）など。

市田 良彦 教授 近代経済思想系諸論特殊講義ほか

社会思想史。アルチュセール、フーコー、ドゥルーズなどのフランス現代思想を中心に、今日における政治・経済・文化の哲学的分節を考察しています。

著書：『アルチュセール ある連結の哲学』（平凡社）など。

上野 成利 教授 近代政治思想系諸論特殊講義ほか

政治思想・社会思想史。ホルクハイマー、アドルノらフランクフルト学派にかんする思想史研究を基軸にしながら、「暴力」「自由」「公共性」等の鍵概念の社会哲学的な分析に取り組んでいます。

著書：『思考のフロンティア 暴力』（岩波書店）など。

就職実績（前期課程）西宮市役所、神戸大学（職員）、日本山村硝子、高知新聞社（記者）、共同通信社（記者）、イオン、がんこフードサービス、オーケー株式会社、金蘭中学校・高等学校（教員）、JNC、兵庫県高校教員（英語）、宝塚市役所 他
（後期課程）トルコ・チャナッカレオンセキズマルト大学日本語教育学専任講師、三重大学人文学部専任講師

在籍学生数（前期課程）2名
（後期課程）1名

論文テーマ例（前期課程）ミシェル・フーコーとエルキュール・バルバン、ピーター・バーガーの「日常」概念と宗教、批判理論における＜女性的なもの/母性的なもの＞をめぐって、E・フロムとフランクフルト学派—批判理論における精神分析学の受容をめぐって、H・アーレントにおける赦しの概念について、H・アーレントの現象学的決断主義—複数性概念の再考、自由とその制度化—H・アーレントの行為論、W・ベンヤミンにおける神話理論—永遠帰還とアレゴリーとの関係について、W・ベンヤミンの初期言語哲学再考—翻訳と批評を中心にして、ドゥルーズにおける革命の諸問題、戦時中上海映画におけるジェンダー表象、ヴァナキュラー・モダニズムとしての映画—ミリアム・ハンセンの映画理論について 他
（後期課程）エルンスト・ユンガー、技術と近代、ニクラス・ルーマン、社会システム論、ハーバート・スペンサー、映画と公共圏、D.H. ロレンス、エコクリティシズム、ピーター・バーガー 他

鹿野 祐嗣 助教 近代社会思想系諸論特殊講義ほか

現代フランス哲学・哲学史・精神分析理論。当時の社会的・政治的状況を考慮しながら、ドゥルーズの哲学を中心に哲学史や精神分析理論を研究しています。

著書：『ドゥルーズ「意味の論理学」の注釈と研究——出来事、運命愛、そして永久革命』（岩波書店）など。

松家 理恵 教授 表象文化系諸論特殊講義ほか

イギリス文学。18世紀からロマン主義のイギリス文学・思想を中心に、近代の自然観や共感的想像力について現代における意味を考察しています。

著書：『キーツとアポローン——ジョン・キーツの詩とギリシア・ローマ神話』（英宝社）など。

所属学生からのメッセージ

三好 帆南さん

(博士前期課程 2 年)

広島市立大学芸術学部卒業

研究テーマ:「芸術と社会の関係、身体イメージ」



私は身体をキーワードに芸術と社会の関係について研究しています。学部で写真メディアを使った制作活動を行っていたときに、写真イメージをよみとく言説や、写真技術と身体の間に関心を持つようになりました。また交換留学先のドイツで、ミュージアムの公共空間としての可能性を感じ、卒業後は美術館での教育普及活動に携わりました。現在は、文化施設に勤めながら社会人学生として研究を進めています。社会人として働くうちに、芸術と社会の関係性を考える上で、芸術分野のみならず、領域を横断した視点を持つ必要性を感じようになりました。そこで芸術理論と同時にそれと深く関わる思想的背景を学びたく、モダニティ論コースに進学しました。

本コースは、美学、社会思想史、政治思想史、哲学、文学など多岐にわたる講座が開設されており、自身の研究分野を多角的に検討できる環境です。また、本コースの特色であるテキストを丁寧に読むことを通して、物事を批判的に考察する視座を育むことができると感じています。

李 珂さん

(博士後期課程 3 年)

神戸大学大学院国際文化学研究所博士前期課程修了

研究テーマ:「映画と公共圏」



私は、中国の初期映画史について研究をしています。とくに清末民初の上海映画におけるヴァンキュラー・モダニティと公共圏に関する研究をテーマとしています。映画学は、美学、哲学、心理学、社会学、歴史学、経済学、政治学など既存の学問の枠組みを超え、社会のさまざまな側面を総合的にとらえることができる学問だと言えるでしょう。近代社会のあらゆる動向と密接な関係を持っている映画を研究するためには、既存の学問領域にとらわれない学際的な視点が重要です。

本コースでは文化言説論、表象文化論、政治思想史、社会思想史等のゼミが設けられ、便利な研究環境も備えられています。多くの授業は少人数で行われ、さまざまなテキストを丁寧に読解し、その内容について発表を行い、先生や学生と議論する形です。そこで複数の分野の先生の意見を聞き、領域を横断して多面的なアドバイスや啓発を受けることができます。また、院生研究室での、他コースの学生との知的交流も刺激的です。さらに、モダニティ論コースだけではなく、他コースの授業をとることも可能なため、より一層学際的な研究ができます。専門的な知識を身につけながら思考力を磨くことができる環境で、充実した研究生生活を過ごすことができている。

修了学生からのメッセージ

吉峯 旬作さん

(2015 年度博士前期課程修了)

研究テーマ:「H・アーレントの政治思想研究」

現在、兵庫県公立高等学校教員



子どものころから体育系運動部に所属し、ある種の共同体的空間になじみの深かった私は、学部の講義で耳にした「公共性」という言葉に新鮮さを感じました。互いに異なる者どうしが時間や空間を共有するというその概念に興味を抱き、もっと深く勉強したいと意気込み、大学院へ進学しました。

ドイツ・ベルリンへの交換留学も含め、4年間にわたりH・アーレントの政治思想研究に打ち込ませていただきました。しかし修士論文は、書きたいと思っていた内容にはほど遠く、良くも悪くも自分の身の丈を知ることができ、自分の適性をより活かせるような進路を考えるようになりました。現在は県立龍野北高等学校(定時制課程)に英語科教員として勤務しています。兵庫県の西の端、醤油やそうめんで有名なたつの市にある夜間高校です。生徒たちは、昼に仕事や家事、育児などを行ない夕方から登校します。教室という公共空間で、互いの背景に配慮しながら苦楽を共にすることで、地元で活躍する市民へと成長していきます。

私自身、体育祭や文化祭、災害ボランティアを生徒と共に計画・実行する中で、研究室での学びとは異なる学びを日々させてもらっています。ですが、生徒の思いにじっくりと耳を傾け、時に粘り強く語りかける教員として必要な姿勢は、研究室で学友と共に思考し、語り合った経験から学び得たものです。

教育現場に身を置いて当時を振り返ると、コースの先生方や研究所の職員の方々から、勉学に没頭できる環境を与えられたことに改めて有り難さを感じます。目先の利益にとらわれず、やりたいことに没頭できた時間は、私にとって生涯の財産です。研究職を志す方以外にも広く門戸は開かれていると思います。

研究科への進学を考えている方は、将来の進路のことなどに不安を抱いていると思いますが、熱意をもって勉学に励む学生を応援してくれる環境がそこにあります。

Q&A

研究テーマを絞り込むのではなく、広く「モダニティ」全般について学ぶことは可能でしょうか？

可能です。むしろ近現代の思想的諸問題について広く学べるのが、モダニティ論コースの強みともいえます。とりわけ前期課程のキャリアアップ型プログラム履修生の場合には、社会思想・経済思想・政治思想から文化言説・表象文化にいたる科目群を広く履修しながら、幅広い分野について知見を深めることが望ましいでしょう。研究者養成型プログラム履修生の場合には、もちろん適切にテーマを絞り込まなければ修士論文を執筆することは不可能ですが、従来型の大学院では扱いにくい学際的な主題を正面から取り上げることができる点が本コースの最大の特長といえます。

フランス思想やドイツ思想を研究したいのですが、仏語や独語の知識はどれくらい必要でしょうか？

前期課程「研究者養成型」プログラム志望者でフランス思想やドイツ思想を研究対象とする人の場合には、仏語や独語の読解力がある程度そなえていることが望ましいといえます。独仏語で受験できればそれに越したことはありません。とはいえ入試そのものは英語で受験することが可能です。受験に臨んでまずは英語の読解力に磨きをかけ、前期課程のあいだに仏語や独語の読解力を鍛えてゆけばよいでしょう。むしろ英米思想の研究志望者の場合には、独仏語の代わりに英語のテキスト読解にいったん注力してください(なおキャリアアップ型プログラム履修生の場合には独仏語をかならずしも必要としないと考えてもらって差し支えありません)。

先端社会論コース

現代社会では、人間・自然・社会の相互関係が大きく揺らぎ、ますます複雑化してきています。「先端社会論」コースは、この現代社会の先端的な問題群を、人文・社会科学を交差する学際的アプローチによって、領域横断的に検討することを課題としています。例えば、男女の性差を社会的に構成されたものにとらえるジェンダー論の視点から、家族や個人や国家をめぐる考え方の変化を分析すること。貧困、移住、人権侵害、体制転換などのグローバルな課題の公正な解決法を構想すること。メディア・テクノロジーの革新が促進する消費社会の情報化と多文化社会が要請する新たな社会観や人間観を模索すること。「先端社会論」コースは、こうした錯綜する諸問題を理論的に解きほぐし、それらに現実的に対処していくためのトレーニングの場です。

進路実績 (前期課程) 兵庫県庁、富士通BSC、(株)三菱倉庫、(株)コベルコシステムなど
(後期課程) 花園大学文学部創造表現学科准教授、京大グローバルCOE研究員など

在籍学生数 (前期課程) 8名
(後期課程) 5名

論文テーマ例 (前期課程)
●日米印三国におけるインフォームド・コンセントの比較・検討
●The Politics of 'Koizumi Theatre': On the Reconstruction of Japanese Nation-State at the Neo-Liberal Moment
●代理出産の「資格」
●日本における外国人技能実習制度の現在—中国人技能実習生の調査を踏まえて
●Representation of Romanies in Tony Gatlif's films
●ニュー・クワイ・シネマが抱える消費と可視性のジレンマ
●Can "Street Dance" Speak(by Dancing)? A Study of the Policing of Street Dance Scenes in Taiwan
●What is "Gayness"? :From Narratives in Britain and Japan
●宝塚歌劇はなぜ女性観客を集めるのか
—日本と中国における『ベルサイユのばら』の観劇レポート分析を中心に
●東方で生まれた二人のシャーロック・ホームズ
—『半七捕物帳』と『霍桑探案』の比較研究
(後期課程)
●Occupation and Sexuality:GHQ's Policy-Making on Prostitution
●関係性としてのフェミニズム—イメージ、個人、方法論の相互作用から
●道徳的個人主義の展開と「心」の変化
●「つくられる共同体」の社会学的研究

所属教員の紹介

青山 薫 教授 ジェンダー社会文化論特殊講義ほか

専門は社会学、ジェンダーとセクシュアリティ。グローバル化、多文化主義、社会的排除と包摂、親密権、表象の問題などに関心を持ち、移住、ケア/性労働、同性婚、性同一性「障害」など、公私にわたる変化を引き起こす事象について、理論・方法論・実証研究を結びつけて追求しています。

小笠原 博毅 教授 メディア社会文化論特殊講義ほか

専門は社会学、カルチュラル・スタディーズ。とくにメディアとスポーツをフィールドとして多文化資本主義と人種差別的な文化との関係を、実証的、理論的、かつ思想的に検証し考察しています。

工藤 晴子 講師 文化規範形成論特殊講義ほか

国際社会学を専門とし、ひとの国際移動とジェンダーやセクシュアリティの関わりについて特に難民・強制移住におけるセクシュアリティの規範という視点から研究しています。また難民支援現場での実務経験から、支援の暴力性や支援者／被支援者の権力関係という問題にも関心を持ち取り組んでいます。

桜井 徹 教授 現代法規範論特殊講義ほか

専門は法学、「グローバル・ジャスティス」。つまり、移民・難民問題、経済格差、テロ、人権侵害といったグローバルな課題を前に、国境という境界線がいかなる意味をもつのかというテーマを研究していますが、最近では特に、国際移住が増加する中で、普遍的な人権の保護とナショナリズムの再興との間の衝突をいかに調整するかという問題に取り組んでいます。

西澤 晃彦 教授 現代社会理論特殊講義ほか

専門は社会学、都市社会学、社会問題論。社会的排除と貧困を主たるテーマとして、自己アイデンティティの構築・社会的世界の形成・都市空間の構成と社会的排除の関連について研究を行ってきました。

所属学生からのメッセージ

フィリップ・ヒューズさん

(博士後期課程 3 年)
イギリス、リバプール・ジョン・ムーア大学経営学部卒業
研究テーマ: Gayness and Identity

神戸大学国際文化学研究所に入学したきっかけは、現代における社会問題とその背景にある事情を学ぶことも、現在の日本と私の出身地であるイギリスなど他国との関係を歴史的にさかのぼって学ぶこともでき、広い学際的視野で研究ができると思ったからです。実際に、研究科には、研究に励むことができる環境が整っており、追究したいことが追究できる自由さがあります。自分自身の研究テーマは、世界でも日本企業でも課題となっている性的少数者 (LGBT) への社会の対応についてですが、とくに私が所属する先端社会論コースは、このような先進的課題を研究するのに最適のコースだと思います。

研究科全体が、多様性を尊重することを重要視しており、異なる国、文化、常識が常に身近にある環境となっています。その中で生活することは、自分自身にとって大変貴重な経験になります。また、大学院で研究を行う上で、毎週必ず何らかの演習や講義が行われ、指導教員のアドバイスを受けることができるようになっています。その中で研究することは、学問的・人間的に成長し続けることであると感じています。



神田 南さん

(博士前期課程 2 年)
都留文科大学文学部卒業
研究テーマ: 「越境して行われる人身取引」と性産業従事者を取り巻く女性運動」

私が本研究科へ進学したきっかけは、学部の頃の研究をより深めたいと思ったことです。当時のテーマはインドとネパールの間で展開される性的搾取を目的とした人身取引でした。

低開発地域からトランスナショナルに行われる人身取引の問題は、グローバル化、ジェンダー間の不平等、貧困、移民の増加などの様々な要因が複雑に絡み合っています。その中でもインドでは多くの女性や子どもが近隣諸国から人身取引を目的に連行されています。この問題の解決を困難にしているのは、国境を越えた連携が不十分であること、女性の身体や性は売られてはいけないという家父長的な規範が、巻き込まれた女性たちの存在を地下化して当事者の声を届きにくくする状況があることだと考えられます。このような問題関心から、私はインドの女性運動に着目し、それはいかに当事者たちの声を代弁しているのかを検討する試みをしています。

このテーマを研究するにあたり、先端社会論コースでは、ジェンダー論の視点で移民や性労働といった事象を分析する講義などがあり、自身の研究領域の専門的に学ぶことができると感じています。また本コースはその名の通り現代社会における諸問題に関して、それぞれの分野を専門にされている教授方から幅広く学ぶことができます。それぞれの講義や演習で教授からのアドバイスを受けてたり院生同士で議論を活発に行う中で、研究を進めるうえでのヒントを得ています。

また他のコースの講義や演習を受講することも可能ですので、自身とは違う領域を専門とする教授や院生と議論を交わすことができます。こうして違った関心や視点を持つ方々との関わりの中で、自身の研究に関する新たな課題を発見することができました。

このように先端社会論コースでは自身の研究を学際的な視点から見つめること、現代社会における問題に関して自分の研究関心を通して考えることができる力を身につけられる環境であると感じています。

修了学生からのメッセージ

張 嘉慧さん

(博士前期課程修了)

私は、学部時代の卒業論文の課題をさらに研究したいと思い、神戸大学国際文化学研究所に入学しました。博士前期課程で取り組んだ研究テーマは「宝塚歌劇はなぜ女性観客を集めるのか—日本と中国における『ベルサイユのばら』の観劇レポート分析を中心に」です。具体的には、日中の SNS における宝塚歌劇の観劇レポートを比較考察し、一定の日中若年女性の生き方や女性の間の関係性に対する願望の傾向の、類似点と相違点を分析し、修士論文を書きました。

在学期間中、コースでは、自分で専攻領域や研究課題を追求することはもちろん、演習などで研究に必要な知識や指導教員の意見を受けることができました。また、研究科全体では様々な分野の演習や講義が設けられ、複数の分野の先生・院生の意見を聞き、啓発を受けることができました。便利な研究環境も備えられており、グローバルな学術ゼミに参加する機会も多く、多様な国籍や経歴をもつ先生方や院生の仲間とともに学び、視野を広げることができました。国際文化学研究所・先端社会論コースは、学問的にも人間としての成長にとっても、とても恵まれた環境だったと言うことができます。

田 恩伊 (チョン ウニ) さん

(2011 年度博士後期課程修了)

神戸大学大学院国際文化学研究所博士前期・後期課程修了後、京都大学 Global COE Program 研究員に就任
博士論文題目: 「『つくれる共同体』の社会学的研究—共同体運動の現代的意味と新たな展開」
現在の研究テーマ: 「現代の共同体をめぐる公共政策の新たな取り組みについて—日本と韓国の公共政策から」

大学で研究者としての訓練を受けて「研究者たちの社会」に出てみると（入ってみると）という表現が正しいのかもしれませんが、自分の専門領域だけではなく、それと関連する様々な領域の知的訓練がどれだけ貴重で役に立つものかがよく分かってきます。というのは、緻密にミクロな世界を探りながらも全体としての社会を考えていきたいと願っている私自身の研究姿勢からすると、理論と実践両方からなる深い専門的知識はもちろん、社会的市民活動・交流への参加など、時には国籍を越境する実践的行動力を必要とする場合があるからです。

この先端社会論コースに設けられている社会学、哲学、法学、文化研究などの幅広い研究領域には、こうした研究活動に直結する高度な知的訓練装置が用意されています。もちろん、研究科のこうした装置を自分のものにできるかどうかは、あなた自身の努力と心構えによりますが！ この研究科は、多くの領域を融合させ現代社会をよりユニークな視点から探究したい人にとって、堅実な専門性を培ってくれる場だと思います。

「学際的に取りくむ」ということは、そうした従来の分野が単独では扱いきれない問題に取りくむ、ということですから、あまり専門分野は気にしなくてもいいんじゃないかしらね。

それにしても、学部時代の専門とはだいぶズレているんですが、だいじょうぶでしようか？

この研究科には、そういう人のためにキャリアアップ型プログラムがありますし、入試問題に合格点が取れるだけの基礎学力があれば、あとは入学後の熱意と努力だと思いますよ。

すみません。私も質問していいですか。私はドクターまで進学したいという希望を持っているのですが、先端社会論コースの研究者養成型プログラムの入試はかなり難関なのではないでしょうか？

ドクター進学を考えているのなら、前期課程の入試よりもむしろ後期課程の入試に注意してください。募集人数を見てもわかりますように、前期課程に入学しても後期課程に進学できるとは限りませんから。研究者養成型プログラムを選択するのでしたら、前期課程・後期課程の 5 年間で博士論文を完成させるつもりで、そのために必要な基礎学力をしっかりと身につけておいくださいな。

Q&A

コース名の「先端社会論」という言葉はあまり聞いたことがなく、なじみがないのですが？

そうですね。「先端社会」とってどんな社会なの？と思われちゃうかもしれませんね。でも、「先端社会論」コースは、「先端社会を論じる」コースではなく、「先端的な社会問題を論じる」コース、っていう意味なんです。もう少し詳しくいうと、「現代社会の先端的な問題群に学際的に取りくむ」コースです。

ああ。そうだったんですか。だけど、「先端的な問題群」とって、たとえばどんな問題ですか？

科学技術の進歩とか情報化、それにグローバル化とか、現代社会に特有な性格によって引き起こされている新しい問題群、っていうくらいいいかしらね。たとえば格差と貧困、レイシズム、国際移住の増加に伴う多文化化とか。身近なところでは、男女の性差の意味合いがゆれ動いていることとか。

そういう問題だったら、ずっと気になっていたことにカブってくるかなあ。でも、さきほど「学際的に取りくむ」というお話でしたけれど、専門分野としてはどうなるのでしょうか？

専門分野っていう言い方をすると、今現在のコーススタッフは、社会学、カルチュラル・スタディーズ、ジェンダー論、法学、哲学っていうことになるかしら。けれども、

芸術文化論コース



芸術文化論コースは、芸術文化コンテンツ系と芸術文化環境系から構成され、造形美術（絵画）、文学、舞台芸術（音楽、オペラ、演劇）、ファッションなどの芸術（アート）作品と社会との関わりについて研究しています。

コンテンツ系では作品内容の分析を通してそこに反映される社会意識や世界観を考えます。環境系では、創作の自由やアートへ容易にアクセスできる権利の保障、文化施設運営の実際などについて、国際比較を踏まえて考察し、文化政策のグランドデザインや、その具体的実践としての芸術と社会をつなぐアートマネジメントに取り組んでいます。

本コースでは、学部時代の専門に関わらず、芸術とそれを支える環境に関心を持ち、専門的に学ぼうとする意欲にあふれた学生の受験を歓迎します。

進路実績（前期課程）神戸大学創造連携本部助教、びわ湖芸術文化財団、兵庫県立芸術文化センター、神戸市民文化振興財団、関西フィルハーモニー管弦楽団、広島市現代美術館、同志社大学職員、大阪大学職員、安芸市役所、豊岡市役所、京都市役所、NHK、カフェ・カンパニー株式会社、株式会社ナレッジラボ、岡谷銅機株式会社、株式会社SIG、他

（後期課程）同志社大学教授、福井大学准教授、京都橋大学准教授、東北工業大学准教授、大阪府商工労働部主任研究員、サントリーホールディングス、神戸大学非常勤講師、大阪市立大学非常勤講師、関西学院大学非常勤講師、大手前大学非常勤講師、流通科学大学非常勤講師、龍谷大学准教授。

在籍学生数（前期課程） 11名
（後期課程） 2名

論文テーマ例（前期課程） 地域コミュニティ、パブリックシアターの組織運営、民間非営利組織間のネットワーク形成、持続可能なコミュニティアート、崇仁地区のアートプロジェクト、ベルリンの「社会文化センター」、スウェーデンの文化政策と市民活動、文化遺産の保護と活用：フランスと中国の旧市街地、パリ市の都市空間整備、ベルギーにおけるコンゴ系ディアスポラ、日韓インディーズバンド、ロシア帝政期の教会建築、ジャポニズム、林忠正、印象派画家カイユボット、フランスの女性作家、前衛書と抽象表現主義絵画、コルセットの表象、日本のストリートファッション、他

（後期課程） 文化政策と社会的包摂、日本の近代広告、ドミエと近代都市パリ、戦前の日本における近代フランス音楽の受容、ジャポニズム期の日本陶磁器コレクションと日仏の交易、宮沢賢治と光学、シンガポールの文化政策、他

所属教員の紹介

池上 裕子 教授 現代芸術動態論特殊講義ほか

第二次世界大戦後の美術と国際美術シーンのグローバル化。専門はアメリカ美術ですが、戦後の国際政治における文化外交にも関心があり、日米交渉史や戦後日本美術の研究に取り組んでいます。綿密な作品研究から芸術を比較文化的・社会政治的に論じることを目指しています。

岩本 和子 教授 芸術文化共生論特殊講義ほか

研究テーマはフランス語圏文化、特に19世紀のフランス文学と、隣の多言語国家ベルギーにおける文化的アイデンティティの問題や文化政策です。また、マグレブ、クレオールなどのフランス語圏ポストコロニアル文化、マイノリティ文化にも関心があります。

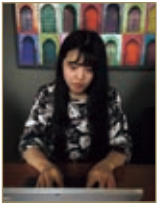
岡本 佳子 講師 芸術文化表現特殊講義ほか

研究分野は舞台芸術学、西洋音楽史です。特に20世紀転換期の中・東欧の舞台芸術作品（オペラや演劇等）を対象として、音楽や文学、パフォーマンスの側面から成立過程の解明と作品分析を行うとともに、作品が古典化されていく歴史の変遷について研究しています。

高田 映介 講師 文化環境形成論特殊講義ほか

19世紀ロシアの作家・劇作家チェーホフを専門に、人間が抱える諸問題と文学と科学の関係について研究しています。また、現代ロシア文学にも関心があります。授業では文学や芸術の豊かさに触れながら、異文化を知り広い視野で物事を捉える場を皆さんと作っていきたいと考えています。

所属学生からのメッセージ



劉 丹さん

(博士後期課程 3 年)

陝西師範大学外国語学部日本語学科卒業

研究テーマ：中日におけるフランス文学の受容に関する考察ーヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』を中心に

私は、中日におけるフランス文学の受容について研究しています。幼い頃から世界各国の文学作品を読んできて、世界各地の文化に興味を持っていました。中国と日本の近現代文学は、西洋文学に深く影響を受けたことがわかりました。博士前期課程において、フランス文学の巨匠ヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』を例として、この小説はいかに中日に移入され、受容されたのか、また中国への移入はいかに日本に影響されたのか、研究しました。将来色々な国に足を踏み入れ、異文化研究についての仕事をしたいと思います。

今は芸術文化論コースにおいて、フランス語圏文化についての知識を習い、自分の研究分野以外にも、様々な芸術分野の先生方からご指導をいただいています。幅広い知識に触れながら、専門的な研究をすることができ、国際交流の機会もたくさんあるのは、本コースの特色だと思います。留学しながら研究するのは大変ですが、恵まれた環境の下で充実した日々を過ごすことができています。これからも博士論文完成を目指して研究を深めていこうと思います。



吉田 浩子さん

(博士前期課程 2 年)

大阪教育大学教育学部卒業

研究テーマ：多様性受容をテーマにしたアートワークショップの実践研究

私は、他者とのコミュニケーションを促す美術のワークショップについて研究しています。私自身、小学校教諭として勤務した経験があり、1年生の担任をした際、学級という小さな社会で、初めて出会う子どもたち相互の関わりを増やし、関係を築いていくためにどのような学級経営をすればいいのかを考えたことから、異なる他者との関わりについて関心を持ち、今の研究テーマにいきつきました。

現在、本研究科の教育プロジェクトにて、美術を介することで初めて出会う他者とのコミュニケーションや、異なる他者に対する考え方にどのような影響があるのか、アーティストと協働してワークショップを実施して研究を進めています。今後は、分断や対立が進む社会で、美術を通して人や地域との関わりを生み出す活動に携わりたいと考えています。

本研究科は、コースの枠にとらわれず、他コースの授業も受講できますし、また神戸大学の別の研究科の授業も受講が可能です。先生方も多様な領域を専門とされていて、学生も経済や歴史、音楽など様々な専門分野をもつ人がいます。社会人経験のある人も少なくないので、授業内のディスカッションでも様々な視点に触れることができます。多様な視点から研究テーマにアプローチできることは、大きな魅力だと思います。

修了学生からのメッセージ



橋本 麻希さん

神戸大学発達科学部卒業、同大学院国際文化学研究科博士前期課程修了。研究テーマはアートマネジメント、コミュニティアート。現在、城崎国際アートセンターにアートコーディネーターとして勤務（豊岡市職員）。

大学院在学中も、地域に根差した活動とともにコンテンポラリーダンスを発信するNPO法人DANCE BOX（神戸新長田）での劇場インターンや、別府現代芸術フェスティバルでのボランティアをはじめ、様々なアートプロジェクトの現場に関わりました。修了レポートでは、イギリス発祥のコミュニティアートの歴史を振り返り、日本において“地域に根差し持続可能な”アートプロジェクトとはどのようなものか、現場での経験とフィールドワークをもとにまとめました。

現在は、国内でも珍しい舞台芸術に特化したアーティスト・イン・レジデンスの拠点「城崎国際アートセンター」に勤務し、アーティストの受け入れや地域の方々とアーティストとの交流プログラムのコーディネートを担当しています。専門性の高い授業を受けることができ一方で、現場にも積極的に出ていける研究科の雰囲気がお陰で、舞台芸術制作者としてのスタートを切ることができ先生方や学友たちには大変感謝しています。



寺田 卓矢さん

立命館大学政策科学部卒業、同大学院政策科学研究科博士前期課程修了、神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程修了

研究テーマ：近代日本音楽文化史

現在、兵庫県立芸術文化センター勤務

国際文化学研究科在籍中は、アジア・太平洋戦争期の音楽運動に焦点を当て、激動の時代に山田耕筰や清水脩ら指導的音楽家が音楽によって何を訴えようとしたのか、そして時代の制約の中で成し遂げたこと、できなかったことを探求し、博士論文にまとめました。他方で多数のコンサートやシンポジウムの運営にも関わり、アーティストや研究者らの現代文化に関する刺激的な見識と情熱に触れることができました。常に研究と実践の両輪で進む大学院生時代でしたが、両者は絶えず交差しており、先人の功罪を知ることが「より良い未来」を具体的に構築していくための足場になっていったように思います。現在は公共劇場で専属オーケストラの運営を担当しており、日々、国内外の第一線で活躍するアーティストから地域の市民団体まで、多様な芸術の担い手と交流し、芸術の過去と未来を考えるたくさんのヒントを頂いています。

Q&A

学部時代の専門は芸術がテーマではないのですが？

芸術文化の研究もまた歴史や現代社会のさまざまな事象につながるものですから、学部時代の勉強を生かしてテーマ設定をすることは可能です。また博士前期課程では、自分の関心あるテーマだけではなく、いろいろな作品にできるだけ幅広く触れてほしいと考えています。

語学力は必要でしょうか。

研究する際に必要になる考え方の多くが欧米の研究を基礎としていることもあり、英語を知っていることは研究の大きな助けになります。また、芸術文化は言語と密接な関係にありますので、すくなくとも入学後には研究対象と関係する語学を学習してほしいと思います。

言語コミュニケーションコース



「ことば」は概念やメッセージを相手に伝える単なるコミュニケーションの手段であるだけでなく、人間の認知・思考・習慣とも密接に関わる文化そのものともいえます。本コースでは言語構造や言語慣用に関する比較・対照分析を基に、外国人に対する有効な日本語教授法の探求、第二言語習得や翻訳・通訳における言語的・文化的分析と方法論の開発、多種多様なレトリックの比較分析などを進め、グローバル化の進展の中で今や不可欠になりつつある異文化間コミュニケーション上の諸問題の解決に積極的に取り組んでいます。基礎から応用に至る、言語コミュニケーションに関わる様々な講義・演習を通して、実践的応用能力あるいは教育・研究能力を持つ人材の養成を目指しています。

所属教員の紹介

石田 雄樹 講師 言語慣用類型論特殊講義ほか

フランス文学を中心に、言語学や物語論の理論に基づいた、文学作品の語りの特徴や構造の分析を主に行っています。また、自己同一性、幸福、翻訳、異文化理解といった思想・文化的問題を「語り」という側面から研究しています。私は「私」をどのように語るのか、自己語りの幸福とは何かといった問題に特に関心があります。

川上 尚恵 講師 日本語教育応用論特殊講義ほか

中国や日本国内を対象とした日本語教育史研究を主に行っています。学習／教育に関わる人々の実践や日本語教育の枠組みを史的な観点から分析することで、日本語教育の社会的意義や役割、あり方を問いたいと思っています。日本語教育の実践分野に関する研究も視野に入れており、特にノンネイティブの日本語教師養成について関心があります。

小松原 哲太 講師 レトリカル・コミュニケーション論特殊講義ほか

言葉の意味を効果的に表現するレトリックを、意味論、文法論、語用論を中心とした言語学の立場から研究しています。意味を理解し、ときに誤解する、私たち言語使用者の柔軟な解釈を重視する、認知言語学の理論を背景として、具体的な用例の収集、記述、分析にもとづく、言語のコミュニケーション機能の探求を行っています。

齊藤 美穂 准教授 日本語教育方法論特殊講義ほか

方言を含む現代日本語の文法を中心に研究をしています。また、外国人に対する日本語教育に携わってきたこともあり、日本語教育分野全般、特に外国人児童生徒に対する教育に関心を持っています。今後は、文法の研究を中心しつつ、その成果を活かした日本語教材の開発や教授法の研究にも力を入れていきたいと思っています。

進路実績 (前期課程) 東京都立高等学校(英語教員)、大阪府立高等学校(英語教員)、兵庫県公立中学校(英語教員)、(株)資生堂、(株)シャープ、アップ教育企画、日本放送協会、JR西日本関連会社、特許事務所、他
(後期課程) 天津外国語大学准教授、中国電子科技大学准教授、関西学院大学准教授、東京大学特任講師、他

在籍学生数 (前期課程) 15名
(後期課程) 6名

論文テーマ例 (前期課程) バイリンガリズム、日・仏語のフィラー、カタカナ表記語と社会言語学、説得とレトリック、マンガのオノマトペ翻訳、日本語教育の社会的側面、日本語の接続詞、他
(後期課程) 第二言語の形態統語の習得、複合動詞、日中同形漢語、フィクションのレトリック、物語論、自由間接法と文体論、日本語教育の歴史、日本語のモダリティ表現、格助詞「に」「で」「を」の習得における定例フィードバックの効果、他

田中 順子 教授 第二言語習得論特殊講義ほか

第二言語習得(SLA)プロセスにおけるアウトプットとフィードバックの役割や、個人差(言語学習適性など)がSLAに及ぼす影響について研究をしています。また、第一言語(L1)には存在しない第二言語(L2)概念が、どのような過程で正しく(あるいは誤って)区分されてL2形態にマッピングされるのかに関心があります。SLAのみならず、教室内での外国語学習やマルチリンガル環境下での言語習得とその問題点も扱っています。

朴 秀娟 講師 日本語教育内容論特殊講義ほか

記述的研究の立場から、主に現代日本語を対象とした文法研究を行っています。留学生に対する日本語教育に携わっていることから、日本語教育や対照言語学の視点を取り入れた文法研究も行っています。特に、副詞に関心を持っており、副詞の意味・用法やその変化に関する研究、日本語教育における副詞の研究を中心に行っています。

藤澤 文子 教授 翻訳行為論特殊講義ほか

翻訳行為を異文化間コミュニケーションとして捉える機能主義的一般理論と、それを具体的な翻訳行為と翻訳事例(主に日独英語間)にどう応用するかがテーマです。翻訳において文化の差異をどう乗り越えて伝えるか、また受容者・メディア・目的などの要因が翻訳行為にどのような影響を及ぼすかに興味があります。

南 佑亮 准教授 比較・対照言語論特殊講義ほか

言語記号は人間の認知能力とコミュニケーション上の目的によって動機づけられていると考える認知・機能言語学の立場から、英語と日本語の様々な文法構文について研究しています。特に、あまり注目されてこなかった現象に光を当て、その分析を通して話者の言語知識のあり方を少しずつ解明していくことに力を入れています。

所属学生からのメッセージ



澤木 翔さん

(博士前期課程 2 年)
龍谷大学国際学部国際文化学科卒業
研究テーマ:「疑い」のモダリティ形式「ダロウカ」「カナ」「カネ」
についての考察

「先生、まだですかね？」
「先生、まだでしょうか？」
「かね」や「でしょうか」はモダリティ形式と呼ばれており、これまでの研究では同様の用いられ方をするとされてきました。
ですが、
「早くしてくれませんか。こっちは急いでいるんです。」
「早くしてくれませんか。こっちは急いでいるんです。」

この場合はどうですか?「でしょうか」を好んで使う人は少ないと思います。「なぜ似ているのに使わないのだろう?」私の研究はこのような「なぜ」を出発点に、類似の形式の相違点を明らかにすることを目的にしています。

言語コミュニケーションコースでは指導教員の先生からはもちろん、中間発表会などを通して様々な専門分野を持つ先生方から研究に関する貴重なアドバイスをいただくことができます。レトリックや日本語教育、翻訳など、学際性豊かな環境の基で、研究を進められるのは本コースの大きな強みです。みなさんもこのコースと一緒に「なぜ」を深めていきましょう。



佐川 寛知さん

(博士後期課程 1 年)
熊本県立大学文学部卒業
研究テーマ: E. サイデンステッカーの翻訳論—自由間接話法に着目して—

「いや、アンタ、なんでその人の目線でしゃべってんのよ(笑)」
「それ、一体だれ目線だよ(笑)」
——とツツコミたくなる瞬間が、ときにコミュニケーションの中で起こったりしませんか? このような瞬間は日常的なコミュニケーションの場だけではなく、小説の「語り」の中でも現れることがあります。「誰目線でこれは語られているの? 登場人物? それとも語り手?」という瞬間がまさにそうです。これは自由間接話法という小説における表現技法の一つです。私は、学部時代に好きな翻訳家であるサイデンステッカーの翻訳でこの技法を見かけました。しかし日本語原文を読んでも「自由間接話法らしさ」を感じることができませんでした。これが私の研究の出発点です。日本文学の翻訳家サイデンステッカーの文体を通して、日本語のどんな要素が、何が自由間接話法になるのか、どうして自由間接話法として翻訳されたのか。これらを追求することが私の研究です。

言語コミュニケーションコースでは、このような研究を支えるための見識を広げられます。言葉による表現技法を別の「目線」で見れば、レトリック(修辞技法)とも言えます。さらに別の「目線」で見れば、私の研究は、ある翻訳家の翻訳手法についての分析とも言えます。また、他の「目線」では、物語における視点についての研究、物語論からの分析とも言えます。どれも日本の大学院ではあまり扱われていない分野です。しかし、このコースは、レトリック、翻訳研究、物語論の全てを扱っている数少ない大学院です。私の研究のような、言語コミュニケーションにまつわる学際的な研究ができるのは、ここだけでしょう。言葉の巧みな使い方とはいかなるものか、翻訳とは何か、物語の構造はどうなっているのか。このコースでは「言語コミュニケーションとは何か」が追求できる環境が用意されています。このコースでは是非一緒に研究テーマを追求しましょう。

修了学生からのメッセージ



牟 鵬程さん

(2018 年度博士前期課程修了・研究者養成プログラム)
西南交通大学日本語学部卒業、神戸大学国際文化研究科博士前期課程修了
研究テーマ: 中国人留学生の達成戦略—使用とL2 日本語熟達度との関係について
現在、北京第二外国語学院成都附属中学校英語教師

私は大学四年生のとき、交換留学プログラムのおかげで来日しました。来日してから、自分や周りの留学生と日本語母語話者との間の会話に注意を払うようになり、我々はどのような戦略で日本語母語話者との意味伝達上の問題を解決しているのに関心を持ちました。そこで、大学院に進学し、コミュニケーション・戦略に関する研究を始めたのです。国際文化研究科に進学し、人生のルールや正しい礼儀などについて指導教員に教えられ、これからの人生の宝物になると思いました。また、構想発表会、研究会 TaLCS、中間発表会で本コースの多くの先生方から貴重な意見を頂き、自分の研究にとって大変役に立ちました。ここで、再び先生方に感謝の気持ちを表したいと思います。

多様な授業科目が開設されていることと様々な研究方向を持つ先生が集まることが国際文化研究科の一番大きな魅力です。私は大学院の授業で第二言語習得、日本語教育の講義から日本語模擬授業の実践にまで至り、さらには本コース以外の授業科目も履修し、言語だけでなく、芸術、歴史、統計など様々な科目で有意義な大学院の授業を楽しみ、多様な角度から研究や人生を考えることができました。

最後に、中国のある有名な詩を皆さんに送りたいと思います。「长风破浪会有时，直挂云帆济沧海」(長風が荒波を突き破る時はきっと来る、船に帆を揚げてこの海原を渡らん)



藤原 優美さん

(2013 年度博士後期課程修了)
四川外国語大学日本語学部卒業、神戸大学大学院国際文化研究科博士前期課程・博士後期課程修了
研究テーマ: 日本語のサ変動詞とそれに対応する中国語の対照研究: 語構成の異同と文法的振る舞いを中心に
東京大学教養学部附属グローバルコミュニケーション研究センターの特任講師として採用され、現在、広島市立大学専任講師。

外国語を学習する際、母語の知識が活用できれば、習得を促進することがあります。これは日本語や中国語においても同じです。日本語と中国語の中には、同形漢語が多数存在しているため、中国語母語話者が日本語に接した際にも日本語母語話者が中国語に接した際にも、漢語に親しみを感じると思います。在学中、私は日本語と中国語の対照研究、特に 2 字同形漢語について研究を進めました。ゼミでは、研究指導や報告などを通した議論が行われ、国内外の研究調査や学会報告なども先生方がフォローしてくださいました。私も指導の先生をはじめ、コース内の先生方からきめ細かなご指導をいただき、また生活面でも親切に相談に乗っていただきました。院生室では、毎日異文化コミュニケーションが体験できます。先輩方も同級生の仲間たちも仲がよく、助け合いながら一緒に歩んできました。

このように、私は実りある豊かな大学院生活を送ることができました。国言コミで過ごした 5 年間は私にとって、大切な思い出です。皆さんもぜひここで自らの夢に向かって頑張ってください。皆さんが充実した楽しい学生生活を送れることを願っています。

Q&A

言語コミュニケーションコースの授業の特徴としてどのようなことが挙げられますか?

本コースの教員は、留学生に対する日本語教育や日本人に対する外国語教育について豊富な経験をもっています。したがって、教育経験に基づく疑問点・問題点が絶えず授業の中心にあり、問題解決を念頭においた授業を行なっています。

本コースではどのようにして修士論文や博士論文のテーマが決められているのでしょうか?

本コースでは、入学してきた学生の問題意識や関心・興味を第一に考えています。したがって院生は、指導教員と相談しながら自らテーマを決めることになります。

指導教員にしか論文指導をしてもらえないのでしょうか?

例えば前期課程では 1 年次後期から 2 年次後期にかけて、計 3 回程度コースの教員・院生の前で修士論文・修了研究レポートの中間発表をする機会を設けています。つまり、修士論文・修了研究レポートの作成をコース全体でサポートする体制をとっています。

感性コミュニケーションコース



人とひとの間のコミュニケーションにおいて要求されることの一つは、気持ちが通じあうことでしょう。しかし実際のコミュニケーション場面においては、たとえば「言葉は通じているのに気持ちが通じていない」と思える場合があります。この場合、「気持ちは通じていないか」「言葉（音声）は本当に通じているか」といったベーシックな問題について検討する必要があります。感性コミュニケーションコースは、コミュニケーションの過程を音声生成など身体的なプロセス、心理学・脳科学など認知的なプロセスの水準から探求します。またネイティブの発音に近い発音を可能にする方策、対人関係を改善する技法といったプラクティカルな問題についても学生諸君と一緒に研究を行っています。

進路実績 (前期課程) ユニクロ、アステラス製薬、イーオン、ATR Learning Technology、ANA(全日空)、(中国の国立)中国銀行、神戸市(上級行政職)、航空大学校、島津製作所(上海)
(後期課程) 理化学研究所、神戸大学国際文化学研究所、韓山師範学院、神奈川県科学捜査研究所、国立障害者リハビリテーションセンター研究所、日本学術振興会特別研究員(PD)、武漢大学、バナソニック、京都精華大学、情報通信研究機構(NICT)、東北大学、大阪大学

在籍学生数 (前期課程) 7名
(後期課程) 3名

論文テーマ例 (前期課程) 注意、ワーキングメモリ、情動、視覚認知、表情、音声コミュニケーション、外国語発音における母語干渉、エラーニング、社会性、マルチモーダル分析
(後期課程) 数表象、プライミング、視覚的注意、外国語音声習得のメカニズム、音声の産出と知覚、ボライトネス

所属教員の紹介

林 良子 教授 言語行動科学論特殊講義ほか

音声科学・心理言語学。日本語や諸外国語における音声の特徴や、外国語を学ぶときの発音の困難点などについて実験的手法を用いて研究しています。言語障害や言語発達、各国における音声コミュニケーションの教育方法の比較についても興味があります。

松本 絵理子 教授 コミュニケーション認知論特殊講義ほか

認知心理学、認知神経科学。人間の知覚、行動、記憶、注意といった認知活動について、心理実験や脳活動計測などの手法を用いて研究しています。特に、注意について、不安やストレスなどの個人特性が及ぼす影響や、どうして表情や恐怖の対象には注意が素早く向けられるのか、等について関心があります。コミュニケーションの背景にある人間の行動や認識の傾向を認知心理学的というのぞき窓を通じて探ってみませんか。

北田 亮 准教授 非言語コミュニケーション論特殊講義ほか

心理物理学・生理学など複数の方法を活用して、知覚から社会認知に至るまで様々な認知神経科学的な研究を行っています。特に複数の感覚機能に着目して、どのように先天的な要因と後天的な要因が絡み合うことで私たちの知覚や認知能力が形成されるのかに興味があります。これらの研究を通じて未来の研究の土台となる枠組みを提案することを目指し、様々な分野の研究者との連携により成果の社会実装への道を探ります。

興 智子 講師 コミュニケーション文法論特殊講義ほか

第一言語習得、心理言語学。私たちはどのように言語を習得するのか、を中心のテーマとして研究をしています。また、言語変化、発達語用論、コミュニケーションと言語の関係など色々なテーマに関心があります。実験やコーパスデータの分析を通じて言語を探索、活発な研究の場を創りたいと考えています。

南本 徹 助教 言語インターフェース論特殊講義ほか

言語学、歴史言語学、印欧語研究、古代ギリシア語研究。主に古代ギリシア語の方言を研究しています。古代ギリシア人はそれぞれ地元の方言を使っていたので、各地の碑文を比べるとそれぞれの方言の特徴や歴史的背景を探ることができます。その他、「人間の言語はどれくらい多様であり得るのか」にも興味があり、少しずつ日本手話を勉強しています。

所属学生からのメッセージ



江 維豪さん

(博士後期課程 3 年)

神戸大学大学院国際文化研究科博士前期課程修了

研究テーマ:「大学生のセルフコントロールと心理的・主観的 Well-being の関係」

学部時代から私は社会心理学、対人コミュニケーションという分野に心を惹かれましたため、多様な観察・調査研究を行いました。そこから一番興味深いテーマは大学生における「セルフコントロール」、つまり自分を制御することです。学習と趣味を両立するために、人々は常に自分の行動や感情を制御しなければなりません。そのセルフコントロールの方法や結果が人の対人関係または精神的健康にどのような影響を及ぼすのかをより詳細に知るために、私は国際文化研究科感性コミュニケーションコースへの入学を希望しました。

入学以来、特殊講義科目と演習科目を重ねて、社会心理学だけではなく、発達・認知・実験心理学などの幅広い分野の専門性の高い知識を身につけることができました。また授業の形式も多種多様であり、専門的な知識の他に、研究を立てる時考慮すべきことと研究を進ませる時の方法についても色々な課程から学ばせていただきました。研究者としての考え方や伝え方は私がこれらの課程から得られたもう一つの重要なものだと思っています。さらに、言語学の学生たちの連合発表会を通じて、他の視野から自分のテーマを再検討することもできるようになりました。

研究室の雰囲気がとても暖かくて、ゼミナールで学生と先生が自由に自分の観点を討論することができました。外国人である私が日本人の先生と他の文化圏のテーマについてディスカッションする時に、お互いの文化圏における差異が意識され、その原因と影響をさらに調べることも本コースにおける一種の醍醐味だと思います。また、先生から熱心な指導をたくさんいただいたお陰で、学会発表に挑むことも行っていました。

感性コミュニケーションコースにおける勉学を通じて、「セルフコントロール」に対する認識が深まる同時に、それと関連する他の領域のテーマも視野に含めることができました。これから本学で学んだ知識を活かして、さらなる研究に挑戦したいと思います。



王 可心さん

(博士前期課程 3 年)

中国人民大学外国語学部卒業

研究テーマ:「丁寧な発話様式と発話意図に関する音声的特徴」

私の出身大学と神戸大学とは協定校であり、毎年 4 名ほどの学生が交換留学制度を利用して神戸大学に留学しています。交換留学を経験した学生たちの話を聞いて、中国にいた頃から神戸大学の魅力を感じていました。大学三年生の時、日本語音声学に興味を持ち始め、留学することを決めました。当時大変お世話になっていた神戸大学で修士課程を修了した日本人の先生に推薦していただき、無事に神戸大学大学院国際文化研究科に入学することができました。

私たち外国人が日本語を勉強する動機はさまざまですが、一般的にはアナウンサーのようにきれいな日本語を話そう、自然な会話をして気持ちを通わせてみたいという方が多いでしょう。その際に、失礼な話し方をして品のない人だと思われたくないですね。この社会的文脈に応じた「丁寧さ」に関しては、文法の問題だけではなく、音声にも大きく関わるものです。同じ言葉なのに違う音声で話すと全く違うように聞こえます。しかし、学習者にとって発話場面や対話者に応じた言葉適切な音声で話すことは容易なことではありません。例えば、「ボールペン貸してください」というたった一言の依頼表現でも、それを丁寧に話さか、恐縮して話さか、または強い語気で話さかによって、対話者が受ける印象は大きく変わります。このような話し方や伝え方による意味の微妙な違いは、音声コミュニケーションの醍醐味だと思っています。

感性コミュニケーションコースには、言語学だけではなく心理学の先生もいらっしゃいますので、異なる視点から指導を受けられるのが 1 つの大きなポイントだと思います。私も実際に心理学の授業をとり、感情や表情などについて勉強しました。この領域について視野が広がる一方、自分の研究にも活かせる学びをすることができたと思います。今後は、さらに専門的な知識を学び、さまざまな学会や研究会に参加し、音声学研究の最前線において、どのような研究がなされているのかをもっと知り、吸収したいと考えています。

修了学生からのメッセージ



宿利 由希子さん

(2018 年度博士後期課程修了)

群馬大学社会情報学部卒業、東北大学文学研究科博士前期課程修了、神戸大学大学院国際文化研究科博士後期課程修了。研究テーマは「行為者のキャラに着目したポラリティ研究」。現在、東北大学講師。

韓国、香港、ロシアなどで日本語教育に携わってきました。非母語話者である日本語学習者が、教室で学んだ日本語を完璧に話しても、日本語母語話者が「何その言い方!」「失礼な!」と不機嫌になる場面に何度も遭遇し、なんとかしなければと神戸大学国際文化研究科受験を決意しました。博士論文では、発信者がどのような「キャラ（人物像）」かによって、受信者の評価が異なることを示すことができ、これまでの画一的な日本語教育の限界を指摘できたと思います。

博士課程は、非常勤で日本語を教えながらという二足の草鞋の 3 年間でした。心配はありましたが、先生方のご指導や（年下の）先輩方のご助言のおかげで、博士論文を書き上げることができました。感性コースでは、さまざまな専門の先生方から多角的なご指摘をいただき、大変鍛えられました。

大学、特に博士課程は自分で学ぶところだと私は思っています。どんどん学会で発表し、ばんばん論文を投稿して、研究を進めていくください。



川島 朋也さん

(2018 年度博士後期課程修了)

神戸大学国際文化学部卒業、神戸大学大学院国際文化研究科博士前期課程修了、神戸大学大学院国際文化研究科博士後期課程修了。研究テーマは「注意制御機構の認知神経科学的研究」。現在、大阪大学大学院人間科学研究科助教。

ヒトがどのようにものを見たり記憶したりしているのかに興味があり、この感性コースに進学しました。ヒトの注意や記憶などは目に見えないものですが、心理実験や脳機能計測によってそのこころの活動に迫ることができます。本コースにはそのための行動実験室や脳波計測室などの充実した設備があります。また、ヒトを対象とした研究では、専門的な知識だけでなく、その周辺領域を含めた幅広い知識が必要です。その中で本コースは、さまざまな領域の先生から指導を受ける環境にあり、一つの学問領域に閉じこもることなく広く諸領域から自身の研究を見直すことができます。

本コースにはさまざまな国や地域からの学生が集まります。多文化なバックグラウンドをもつ学生同士の交流は、自身の視野をいっそう広げてくれます。感性コースにご関心のある方は、研究室の訪問だけでなく、ぜひ院生室にもお越しください。

Q&A

感性コミュニケーションに入るには、心理学や脳科学と、言語学、コミュニケーション論などを全部勉強していないと、ダメなのでしょうか。

そんなことはありません。とりあえず、どれか、で結構です。

言語について研究したいと思っているのですが、このコースと言語コミュニケーションコースはどう違うのですか？

感性コミュニケーションでの言語研究は、自然に発話されたデータや、様々な機器を使って実験的に計測を行ったデータを主に扱います。またパラ言語と言われるいわゆる伝統的な言語学ではあまり扱われてこなかった分野（例えばため息、沈黙、声の

音色など）や視覚情報（目線、表情、口の形、ジェスチャーなど）も含めて研究したいという方、実験して色々測ってみようという方には当コースをお勧めします。

脳の研究をやりたいのですが、どんなことが可能ですか？

感性コースでは、脳波計、光トポグラフィーを使って脳機能計測実験を行うことができます。もちろん、精密に計画して組んだ心理学実験によって、認知情報処理が脳内でどのように行われているかを検討することも可能です。チャレンジをお待ちしています！

情報コミュニケーションコース



情報コミュニケーションコースは、コンピュータやインターネットに代表される、情報通信技術を用いたコミュニケーションについての教育・研究を行うコースです。当コースでは、インターネットにおける最新の情報発信技術、コンピュータを用いたコミュニケーション情報の収集・分析・整理方法といった、すぐに活用できる高度な情報処理技能の習得や、将来におけるより効果的なコミュニケーションの実現を目的とした情報通信技術の研究・開発を行なっています。

就職実績 (前期課程) 株式会社DeNA、日本IBM、チームラボ株式会社、日本電気株式会社、西日本電信電話株式会社、滋賀県立成人病センター職員、コベルシステム株式会社、スミセイ情報システム株式会社、富士通FIP、東京農工大学職員、神戸情報大学院大学准教授、富士通ビー・エス・シー、神戸情報大学院大学職員、グッドスカイ(株)、中国電信北京支社、中国広発銀行、野村総研、アクセンチュア、ヤマハ発動機株式会社、セゾン情報システムズ

(後期課程) 大阪大学大学院基礎工学研究科特任助教、立命館大学情報理工学部講師、神戸情報大学院大学助手、神戸女子大学助教、大阪産業大学講師、北九州市立大学准教授、大妻女子大学短期大学部准教授、中国国家核電エンジニア、台湾実践大学講師、廈門理工学院講師、関西学院大学理工学部研究員、鹿児島純心女子大学人間教育学部准教授、株式会社NTTデータ技術開発本部研究開発職

在籍学生数 (前期課程) 8名
(後期課程) 6名

論文テーマ例 情報科目学習形態分析、文書の自動分類、XML検索法、IT技術者向け学習システム、外国語学習システムにおける誤りレベル判定機能、記憶の仕組みを活用した学習システム、質問支援システム、コミュニケーション指向の都市評価、逆引オノマトベ辞典、ユーザインタフェース、コミュニケーション支援、ニューラルネットワークによるコンピュータ「錯視体験」

所属教員の紹介

大月 一弘 教授 コンピューター・コミュニケーション・システム論特殊講義ほか

情報通信システムに関する研究をしています。阪神・淡路大震災において情報を持ち使う側の視点と情報伝達システムを構築する側の視点との間に、ある種のギャップがあることを痛感し、「使う側の人の目・現場の目」を重視するようになりました。

康 敏 教授 コンピューター・シミュレーション論特殊講義ほか

情報通信技術の情報教育及び外国語教育への応用に関してコミュニケーションの視点から研究・開発を行っています。特に統計的アプローチを用いてユーザのニーズにあった情報を提供することとユーザの特徴を抽出することに焦点を当てています。

清光 英成 教授 情報ベース論特殊講義ほか

データベースシステムやWeb情報システムを用いてデータを高次利用することを目的としています。アクセス履歴などの利用者プロフィールや場所・時間などの状況を参考に「いつもの」という入力に利用者個別の答えを出力することをテーマにしています。

西田 健志 准教授 計算科学応用論特殊講義ほか

情報システムの操作性を向上するユーザインタフェースの研究、人どうしのやり取りを円滑にするコミュニケーションシステムの研究をしています。特に、意見がまとまらない、批判的な意見が言い出せない、外国語が流暢でないなど、コミュニケーションがうまくいかない状況を情報と心理の両面から見つめ直すこと、開発したシステムを実際に運用して知見を得ることを重視しています。

村尾 元 教授 認知情報システム論特殊講義ほか

生物に倣った「柔らかな情報処理」の技術を用いて、人間をはじめとする生物の集団に現れる知的な振る舞いの分析と応用について研究をしています。対象となるのは、人間などの個体が構成する小さな集団から、社会、経済、インターネットまで様々です。
キーワード：社会システム科学、機械学習、データサイエンス

所属学生からのメッセージ

宮崎 仁弥さん

(博士前期課程 2 年)

神戸大学国際文化学部卒業

研究テーマ:「Transformer を用いた対話フローの可視化」



学部時代にプログラミングの授業を受け、情報分野に関心を持ちました。プログラミングのスキルと情報分野の専門知識を身につけたいと考え、情報コミュニケーションコースへの入学を希望しました。

現在は自然言語処理を専攻しており、機械学習や言語モデルについて学習をしています。大学院からそれらの専門分野について学び始めたのですが、情報コミュニケーションコースの先生方が様々な疑問に熱心に答えてくださるので、楽しく学ぶことができます。また、このコースは文系の研究科に所

属しており、多種多様な学生が集まってきます。その関心もいろいろですので、日々刺激を受けながら研究に取り組むことができます。

情報コミュニケーションコースは文系の研究科にある少し変わったコースですので、情報の専門的なバックグラウンドを持っていないくても、情報分野に興味があればぜひ挑戦してみてください。みなさんと一緒に研究できることを楽しみにしています。

前川 絵吏さん

(博士後期課程 2 年)

神戸大学大学院国際文化学研究科博士前期課程修了

研究テーマ:「生成ネットワークを用いたテキスト平易化」



私が興味を持っているのは、テキスト生成ネットワークを用いたテキスト平易化に関する研究です。日本語学習者が新聞やニュース記事を読むと、知らない言葉や表現があつて理解できないことがあります。そのため、難しい文章をやさしい文章に書き換えて提供するサービスがありますが、そのほとんどが人の手で書き換えたものです。ニューラル機械翻訳を使ってその書き換えを自動化することが、私の研究のテーマです。

日本語はデータセットが少ないため、外国語(特に英語)と比べると、言語を扱う情報技術は発展が遅いと感じます。しかし、

本研究科には言語学や日本語教育を研究しているコースもあるので、日本語を扱う自然言語処理を学ぶには理想的だと考え、入学を希望しました。

入学から現在までの期間に、テキストマイニングによってデータ分析をしたり、文書生成プログラムを作ったりしました。プログラミングは経験がありましたが、機械学習のプログラムを作ったのは入学してからです。自然言語処理に関する知識もほとんど大学院に入学してから習得しました。自然言語処理やディープラーニングは近年めまぐるしく発展しており、新しい論文を理解するだけでも大変です。新しい技術が何に活用できるのか、自分の研究にどう繋がるのかを常に考えています。

私は入学前から教育に関わる仕事に就いていて、現在も仕事量を調整しながら研究を進めています。なかなか研究が進まないこともありますが、研究室の学生や、先生方の熱心な指導を受けて、充実した日を過ごせています。

修了学生からのメッセージ

謝 涵さん

(2017 年度博士前期課程修了)

研究テーマ:「物語の登場人物を把握しやすくする読書支援システム」

現在、シンプレクス株式会社勤務



私は学部生の頃に、外国語学部にも所属し、日本語を専攻しました。もともと情報通信分野に興味を持っていたので、このコースの紹介や先生たちの論文を読んで、この分野に挑戦したいと思い、大学院に進学しました。博士前期課程修了後、金融システム開発の会社でシステムエンジニアとして働き、システムデザインと実装開発の仕事を中心に担当しています。現場で院生の時に勉強したIT知識とものづくりの経験を生かしています。

本コースでは、自分が今まで勉強してきたことだけでなく自分が興味を持つテーマについて研究することができます。講義で情報に関しての様々な研究分野を知り、視野を広げられ、新たな目線で周りの世界を観察することができます。また、グループで一緒にアイデアを出して、ものづくりの楽しさも味わえます。研究については、アイデアと研究目的を重視し、情報の力で身の回りのコミュニケーション問題を解決していきます。先生たちは学生のアイデアを尊重し、しっかりサポートしてくれます。文系と理系という境界ははっきりしてなく、両方の知識を用いて研究をすることが情報コミュニケーションコースの魅力だと思います。

大学院に進学することで、専門性の高い授業も受けることができますし、学会発表などの経験でグローバルな視野を身に付けることもできます。本コースに興味ある方は、ぜひ挑戦してみてください。

川村 晃市さん

(2019 年度博士後期課程修了)

同志社大学文学部卒業、南カリフォルニア大学大学院教育学研究科修士課程修了、神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程修了
現在、鹿児島純心女子大学人間教育学部准教授

情報コミュニケーションコースへの進学を希望する方のもっとも知りたいことは、「情報通信系の専門知識がなくてもついていけるのか」ということだと思います。個人的な意見になりますが、この問いに対する私の答えは「やる気次第です」。もちろん、プログラミングなどの専門知識があるに越したことはないですが、専門知識より主体的に研究する意欲があることの方が重要だと思います。私自身、私立文系学部出身ですがついていくことができました。

次に知りたいことは「情報コミュニケーションコースはどのような雰囲気なのか」ということかと思います。こちらも個人的な意見になりますが、「自由です」です。研究に関して、先生方は院生の考えを尊重して下さいますし、いろいろな挑戦を許容していただけます。いわゆる、押し付けや強要とは無縁です。私も指導教官に自主性を尊重していただけたことで研究のやりがいと面白さを知ることができ、充実した研究生生活を送ることができました。

最後に、当コースの特徴を書いておきます。情報コミュニケーションコースには様々なバックグラウンドを持った学生が在籍しており、互いに切磋琢磨できる環境があります。また、コースの性質上、情報機器が充実しておりシステムの開発環境もあります。特に強調したいこととしては、先生方と院生の距離が非常に近く、研究意欲のある院生に対しては熱心にご指導していただける研究環境があることです。

Q&A

大学では情報や通信の専門的な勉強はしてきていないのですが、大丈夫でしょうか？

当コースを選ぶにあたっては、必ずしも、理工系の情報通信を専門とする必要はありません。高度な情報通信技術を学び、それらを自分の専門分野に生かそうという意欲をもった院生を歓迎します。

数学が苦手なのですが、ついていけるでしょうか？

当コースでは、最先端技術をより高めていくような技術革新といった研究ではなく、既存の技術がどのように使われるのか、また、より良い使い方はないのかといった応用面での研究を行なっています。仕組みを理解しその仕組みを工夫する事でどのような新しい活用ができるかを模索するには、より広い意味での理解力は求められますが、高度な数学を駆使することはほとんどありません。

外国語教育システム論コース



外国語教育システム論では、英語を中心とする外国語教育の基礎を担う言語学、心理学、言語表象作品分析など様々な領域の学際的知見を援用して研究を行い、それらを有機的・総合的に連関させることで、外国語教育のシステムの研究・実践にあたることができる人材の養成を行う。

本教育研究分野では、特に、

1. 言語学、心理学など関連諸分野の知見に基づく学際的な言語教育研究
2. 幅広い言語文化・表象作品の言語教授法への応用と方法論研究
3. IT 教育など言語教育環境整備に関わる実践的研究
4. 言語習得、言語使用を取り巻く社会的・文化的要因に関わる研究
5. 心理言語学的研究により得られた知見の教育現場への応用
6. 教育現場における指導実習等の活動支援

を重視して研究指導を行っている。

所属教員の紹介

島津 厚久 教授 言語文化表象論特殊講義ほか

アメリカ現代文学。中でもユダヤ系アメリカ文学で、特に小説家バーナード・マラマッドの長・短編小説を「表現」の観点から読み解こうと試みています。

高橋 康德 准教授 言語対照基礎論特殊講義ほか

中国語学、音声学、音韻論。中国語諸方言の声調に関する現象を音声学・音韻論の観点から研究しています。

濱田 真由 助教 言語教育環境論特殊講義ほか

心理言語学、外国語教育。第二言語・外国語での言語処理時のプロセスについて検証し、得られた知見を外国語教育にどのように応用することができるのかについて検討しています。

廣田 大地 准教授 言語文化環境論特殊講義Ⅰほか

フランス文学。ボードレールを中心とした近代フランス詩を研究対象とし、その詩学を言語学的観点から記述することを目標としています。他にも WEB やコンピュータを用いた文学研究・語学教育に関心があります。

進路実績 (前期課程) 千葉県私立高等学校、大阪府立高等学校、神奈川県立高等学校、他
(後期課程) 兵庫教育大学、神戸学院大学、近畿大学、自然科学研究機構、神戸市工業高等専門学校、立命館大学、桃山学院大学、他

在籍学生数 (前期課程) 7名
(後期課程) 6名

論文テーマ例 (前期課程)

- ・留学生を対象とした日本語ライティング支援室に関する事例研究: 書き手と読み手の対話に注目して
- ・英語ライティングにおける結束性
- ・Lexical Competition Effects During Spoken Word Learning for Japanese EFL Learners

(後期課程)

- ・Connecting D. H. Lawrence to Emily Brontë: Adoration for Nature and the Shadow of "Death"
- ・How conceptual accessibility affect sentence production: Evidence from Chinese JFL learners with a focus on animacy information
- ・Japanese EFL learners' meaning-syntax mapping mechanism for English sentence comprehension: Evidence from Psycholinguistic Investigation
- ・A functional analysis of a football coach's utterances: Toward a pedagogical model for enhancing student-athletes' language development
- ・Content and language integrated learning in tertiary EFL contexts in Japan: Teachers' perceptions and practices

保田 幸子 教授 言語科学論特殊講義ほか

第二言語習得論、第二言語ライティング、ジャンル分析、カリキュラム開発。「第二言語で書く」という行為をめぐる、書き手の方略やジャンル意識、言語的・文体的特徴に焦点を当てた研究を行っています。これらが長期的にどのように変化するか、なぜ変化するかという発達プロセスを明らかにすることが研究テーマです。

安田 麗 講師 言語文化環境論特殊講義Ⅱほか

音声学、ドイツ語教育。外国語の音声習得、発音指導に関して、音声学的観点よりドイツ語、日本語を含む様々な言語を対照しながら研究しています。

横川 博一 教授 言語教育科学論特殊講義ほか

英語教育学・心理言語学。第一言語および第二言語のリーディング、リスニング、ライティング、スピーキングおよび語彙の認知処理メカニズムとその授業実践への応用可能性を探ることが主な研究テーマです。

所属学生からのメッセージ



津阪 菜名さん

(博士前期課程 2年)

神戸大学国際人間科学部卒業

研究テーマ 「英語コミュニケーション能力の測定・評価」

学部時代は、初等教育、特に体育科教育を専門として、小学校教員を目指して学んでいましたが、小学校での教育実習や支援員活動の中で、2020年度から教科となった外国語に対して、先生たちが不安を抱えているという現状を目の当たりにしました。小学校という大切な時期の子どもたちに効果的に英語を教える方法を研究し、小学校英語教育を牽引できるような教師になりたいと思い、本コースへの進学を希望しました。

現在は、外国語教育系の授業の履修に加え、小学校専修免許取得のための、他研究科における授業も履修しています。大変ではありますが、先生方のご指導のおかげで、実りある日々を送ることができています。本コースの授業では、外国語教育の基礎的な理論から、実践的な演習まで、幅広く、多角的に学ぶことができます。また、自身の研究進捗を発表する集団指導演習が定期的に行われ、コースの先生方から助言をいただけるため、計画的に、再考しながら研究を進めることができます。

外国語教育領域の魅力の1つは、社会人を経験された方や、現職の先生、留学生の方など様々なバックグラウンドをもつ院生が集まっていることだと思います。自分にはない視点を持っている方が多いので、授業やゼミでの交流を通して、視野を広げることができ、良い刺激を受けています。このように充実した環境で、研究生活を送ることができることを非常にうれしく思います。



西条 正樹さん

(博士後期課程 3年)

同志社大学文学研究科博士後期課程単位取得満期退学

研究テーマ Exploring the social construction of football coaching in training sessions: Toward the development of pedagogical resources for English for sports purposes

現在は、スポーツ学部がある大学で英語教員をしながら、学生アスリートのスポーツ留学を支援する業務に携わっています。日本の学生アスリートたちは、競技レベルが非常に高く、海外では即戦力になり得ます。しかし、中には、外国語によるコミュニケーションが苦手だったり、異文化に溶け込めず、自分の実力がうまく発揮できない学生アスリートたちもたくさんいます。現在は、そのような学生たちを対象にした英語学習教材の開発に向けて、サッカートレーニングでの予備調査を行なっています。具体的には、実際に英語を使ってサッカーを指導しているコーチたちのトレーニング時におけるコーチングの様子およびインタビュー結果を記録し、「コーチング技術」、「発話技術」、「コーチング哲学」の観点からどのようなパターンが見つかるかを明らかにすべく、質的分析法を用いて調査をしています。このように、言語を取り巻く「コンテキスト」とその言語の「機能」の関係を明らかにすることで、より学習者のニーズに沿った学習教材を作成したいと考えています。

研究を進めていく上で、指導教員の先生をはじめ、コース、および研究科の先生方からは大変貴重なアドバイスをいただいています。「システム論演習(研究方法論)」の授業では、実証主義、解釈主義という研究を遂行していく上で欠かせない認識論上の立場の違いがあることを学び、自分の研究がどのように位置づけられるのかを知るきっかけとすることができました。また、「言語科学論特殊講義」の授業では、これまでの第二言語習得理論を概観することで、自分がこれから作成していく学習教材にどのような理論のどのような手法を取り入れていくべきか考える際の指標を得ることができました。指導教員の先生からは、自分が書いた論文に対して毎回、懇切丁寧なフィードバックをいただけるので、自分に足りなかった視点などを客観的に振り返ることも大変役立っています。

修了学生からのメッセージ



平野 亜也子さん

(2018年度博士後期課程修了)

研究テーマ Japanese EFL learners' meaning-syntax mapping mechanism for English sentence comprehension: Evidence from Psycholinguistic Investigation

現在、京都産業大学准教授

私は、別の大学で博士前期課程を修了した後、しばらく大学の英語教員として教鞭に立っていました。しかし、効果的な英語教育について深く追求したいと思い、神戸大学博士後期課程に進みました。仕事と研究の両立が可能かどうかで悩みましたが、結果的に神戸大学に進学を決めたことで、世界が大きく広がりました。現在、進学を考えていらっしゃる皆様には、神戸大学で研究を進めることを強くおすすめします。超一流の先生方から直接指導を受けられることに加え、博士学位取得までの段階的なシステムが準備されているからです。

例えば、毎年の進級審査会では、所属コース以外の先生にも自分の研究内容をプレゼンテーションし、有益なコメントを頂くことができます。また、進級するためにはジャーナルでの掲載など一定の基準をクリアする必要があるため、中だるみせずに研究を進めることができます。さらに、博士基礎論文、博士予備論文、博士論文、といった具合に段階的に論文を提出する必要があるため、短期的および長期的のスパンで目標を設定することができます。ゼミでは、研究について熱く語り合い、お互いに切磋琢磨するかけがえのないつながりを得ることができました。

今後は博士課程での学びを生かして、より一層日本の英語教育に貢献したいと考えています。



山田 美咲さん

(2013年度博士課程前期課程修了)

研究テーマ 「日本語会話における中国人学習者のスピーチスタイルに関する一考察」

現在、神戸野田高等学校国語科教諭

大学学部時代に中国へ1年間留学し、日本語を勉強する多くの中国人学生と出会いました。お互いに母語を教えあう中で、日本語を上手く伝えることのできないもどかしさを感じ、大学院進学を決意しました。神戸大学国際文化学研究科では、言語学や教育学に関する基礎的な知識を学ぶことができるとともに、教育現場に直結する実践的な内容に取り組む授業も受講できることが魅力的です。私は、各国から神戸を訪れた留学生とグループで調べ学習をしたり、留学生の日本語の授業に入ってサポーターをしたりしました。その結果、基礎から実践まで幅広い内容を身につけることができました。

自身の研究では、誤用が多く、習得が困難とされている敬語に着目し、進めていきました。状況や相手によって使い分けが必要なスピーチスタイルを、中国人母語話者は実際にどのように用いているのか、調査をしていきました。参考となる論文を踏まえ、調査計画を立て、実行に移していく中で、指導教員の先生をはじめ、コース、および研究科の先生から多くのアドバイスをいただきました。その都度、改善していきながら研究に専念することができたのは、熱心な先生のサポートのおかげです。この二年間で、一つのことに深く向き合い、新しい視点で物事を考えることができるようになりました。この成果は私にとって大きな自信となり、今の生活にも繋がっています。この素晴らしい環境で、ぜひ、皆さんにも充実した学生生活を送ってほしいと思います。

Q&A

外国語教育システム論コースとは、どのようなことを研究するコースでしょうか？

外国語教育システム論とは、外国語教育の基盤となる基礎研究の知見について理解を深め、学際的な立場から新しい時代の外国語教育のあり方を探求しようとするコースです。

外国語教育システム論コースでは、どのようなことが学べるのでしょうか？

このコースでは、外国語教育のシステムを支える、言語学・心理言語学、外国文学、文化学について広く学びながら、外国語教育の研究を行ったり、実践力を身につけることができます。また、英語のみならず、ドイツ語、フランス語、中国語、日本語などの言語を専攻する院生にも対応しています。

中学校・高等学校の英語教員志望ではないのですが、このコースには不向きでしょうか？

このコースは、英語の教員養成のみを目的としたものではありません。たとえば、外国語教育への応用を考えながら、心理言語学や音声学の研究を行ったり、外国語習得を意識しながら、アメリカ文学、フランス文学を専門とするなど、幅広くかつ深く学ぶことができます。

入学後は、コースが開講する授業しか履修できないのでしょうか？

外国語教育システム論コースに所属していても、他コースの授業を履修することが可能です。外国語教育システム論コースに開設されている授業科目を中心に、たとえば、外国語教育コンテンツ論コースが開講する授業科目を履修することができます。

外国語教育コンテンツ論コース



外国語教育コンテンツ論コースでは、新時代の外国語教育の創造に主体的に参画できる人材育成を目指し、外国語教育の内容・方法・展開に関わる研究を総合的に行っています。本コースでは、言語学（コーパス言語学・認知言語学・語用論・音声学）と教育学（授業論・指導法・教育工学）の学問的基盤をふまえつつ、特に、教育現場での実践的展開を見据えた研究に精力的に取り組んでいます。本コースにおいて、外国語教育を取り巻く諸問題に多面的にアプローチする能力を付けた修了生は、国内外の教育機関等で活躍しています。本コースでは、学部時代の専門にかかわらず、外国語教育を通して社会のグローバル化に貢献しようとする意気込みにあふれた学生の受験を歓迎します。

進路実績（前期課程） 小学校教諭、中学校教諭（尼崎市・神戸市）、高校教諭（兵庫県・滋賀県・岡山県・鳥取県・沖縄県）、東京大学附属中等教育学校教諭、神戸大学附属中等教育学校教諭（2）、神戸女学院中等部教諭、西大和学園中高講師、金沢大学非常勤講師、Sony Global Manufacturing Operations、(株)矢崎産業、(株)SONY Computer Entertainment, Taiwan、三菱電機、(株)白鳩（インターネット通販）、(株)日立ソリューション、富士通、他。

（後期課程） 外国人特別研究員（神戸大学）、近畿大学准教授、環太平洋大学教授、大阪大学准教授、広島国際大学専任講師、福井大学助教、大阪工業大学特任講師、関西外国語大学（非）、関西大学（非）、流通科学大学（非）、中京財政政法大学講師、山梨科技大学講師、西安理工大学講師、中国四川外国語大学講師、他

在籍学生数（前期課程） 7名 研究科の中でも学生数の多いコースの1つです。助け合い、競い合って学べる環境が用意されています。
（後期課程） 4名

論文テーマ例（前期課程） 「小学生のための基本名詞コロケーションリスト」「中国北方方言話者の日本語有聲破裂音に対する日本語母語話者の知覚」「日本語書き言葉における「形容詞＋条件節」の使用」「日本人英語学習者のライティングにおける英語習熟度とパラグラフライティングに対する知識・理解及びアウトラインの関連性について」
（後期課程） 「Some Interactional Practices Teachers Use to Pursue a Response from Students in EFL Classrooms」「作文に見る学習者のヘッジ使用」「学習段階の変化が日本語学習者の外來語使用に及ぼす影響」「日本語学習者書き言葉コーパス」を用いた縦断調査」

石川 慎一郎 教授 外国語教育内容論特殊講義Ⅱほか

応用言語学の観点から、コーパス（大規模テキストデータベース）を使った英語・日本語の言語分析・教材分析・教材開発・語彙習得などを主として研究しています。あわせて、語彙処理の心理的機制や、小中高大での言語教育のカリキュラム設計、教授法・インストラクショナルデザインにも関心を持っています。科学的な視点から言語や教育の問題を考えてみたい学生を歓迎します。

柏木 治美 教授 外国語教育工学論特殊講義ほか

情報通信技術の学習環境への応用に関する研究を行っています。最近では、音声認識を取り入れ、外国語や日本語で緊張せずに自身の意見や考えを話せるようになることを支援するためのコミュニケーション活動環境について検討しています。新しい技術を取り入れた学習環境の開発研究に興味を持つ学生を歓迎します。

木原 恵美子 准教授 外国語教授学習論特殊講義ほか

英語話者は構文をどのように選択しているのか、その背後にはどのような仕組みがあるのかを研究しています。英語母語話者だけではなく、英語学習者の話し言葉や書き言葉も分析しながら、英語の文法学習や教授法の研究を行っています。英文法の分析や記述に興味がある学生を歓迎します。

Tim Greer 教授 第二言語運用論特殊講義ほか

言語表現とそれを用いる人との関係に関心を持っています。会話分析を始めとし、質的調査方法を使用し、第二言語語用論（L2 Pragmatics）を専門にしています。二ヶ国語で行う会話、オーラル英語能力試験での会話、日常会話など様々な場面で「言葉を使った社会的行為」を研究しています。また、言語教育、アイデンティティ構成、バイリンガリズム、などの研究も行っています。

朱 春暉 教授 言語対照応用論特殊講義Ⅱほか

言語音声を生理的、物理的、心理的諸側面から研究し、外国語の発音をいかに効率よく教えるかを検討しています。調音的にはMRI動画の分析、音響的には音声のスペクトルやピッチ等の分析をしています。言語音声や外国語の発音・発音指導に興味を持つ学生を歓迎します。

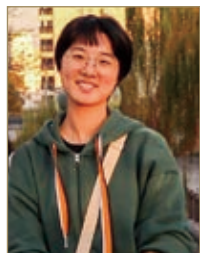
芹澤 円 助教 言語対照応用論特殊講義ほか

歴史語用論の観点から、近世ドイツの印刷メディアにおける口語性・文語性、構文や語彙の分析をしています。また最近では、テキストと図像の関係性（ビジュアル・リテラシー）の分野にも関心を持っています。

大和 知史 教授 外国語教育内容論特殊講義Ⅰほか

英語教育の中でも、英語発音指導（特にイントネーションなどのプロソディ）を主な研究テーマとし、学習者の英語音声の使用実態の把握、指導への応用などを主に研究しています。また、語用論的能力育成のための指導に関連した理論的背景の精緻化や指導法にも関心があります。

所属学生からのメッセージ



林 嘉寧さん

(博士前期課程2年)
海南大学外国語学部日本語学卒業
研究テーマ 日本語学習者における動詞ナインの各アクセント習得

私は大学で日本語を専攻しました。大学三年生の時、交換留学で初めて日本に来ました。交換留学の間、外国語教育に関する授業を受け、日本語教育、特に音声教育に興味を持ち始めました。というのも、共に日本語を学んでいた友人の日本語発音と日本語母語話者の発音の違いがあることに気づいたからです。それは特にアクセントやイントネーションの違いでした。

中国語を母語とする学習者は動詞ナインを発音するとき、よく「ナ」にアクセント核を置いてしまいます。「食べない」を例として挙げると、学習者の発音では、「ナ」がアクセント核になります。しかし、母語話者の発音では、「ベ」がアクセント核になります。このような動詞ナインのアクセント核の違いは中国語話者の間にしか生じないのか、それとも他の言語を母語とする学習者にも生じるのかという疑問を持ちました。幸いにも神戸大学国際文化学研究所に入学することができ、この疑問をより学術的に深く検討することができるようになりました。

本コースには音声学、コーパス言語学、第二言語語用論、情報通信技術学、歴史語用論など様々な分野に精通した先生方がおられます。また、私にとって一番難しいことである統計分析についての知識も学ぶことができます。HADやLangtestなど使いやすい統計処理のツールも紹介していただき、集めたデータの処理に困らずスムーズに分析することができます。さらに、本コースには毎学期に2~3回の集団指導があります。集団指導では自分の研究進捗を発表し、専門分野が異なる先生方や院生から色々なコメントやアドバイスをもらうことができます。コメントやアドバイスを聞きながら、自分の研究を改めて整理することができ、新しいアイデアも生まれます。

今はまだコロナウィルスの影響により調査を進めることが難しい状況ですが、院生の皆さんと助け合いながら頑張っていきたいと思っています。

修了学生からのメッセージ



齋藤 景子さん

(2021年度博士前期課程修了)
神戸大学国際文化学部卒業
研究テーマ 日本人英語学習者の論文文における熟達要因に関する質的調査
現在、東京大学教育学部附属中等教育学校 英語科教諭

英語作文を上手に書ける人とそうでない人の違いは、いわゆる英語力だけでしょうか？なかには文法語法のエラーが全くなくても、作文としてまとまっていない文章もあります。私はこの点について、書き手の作文産出過程に注目して研究を行いました。作文課題とインタビュー調査を行い、主に作文への動機づけの観点から、日本人英語学習者が熟達した英語作文の書き手へと成長するための要因を質的に探索しました。

とはいえ、入学当初から研究テーマを確定できていたわけではありませんでした。私は英語教員を志しており、外国語教育に関する専門性を高めたいという思いからこのコースへの進学を決めました。しかし学部では別の分野を専攻しており、進学当初は外国語教育という分野が具体的にどう構成されているのか、研究とはどういふものかについて全く理解していませんでした。

このように無知な状態でのスタートでしたが、特殊講義や演習科目で外国語教育分野に必要な要素を満遍なく学ぶにつれて、少しずつこの分野の地図を思い浮かべられるようになりました。また、感染症の流行により一度も対面授業や発表がない状況でも、指導教員と何度もビデオ面談を重ね、同期とオンラインで繋がり、研究や発表の方法を学び合うことができました。さらに本コースの特徴である年5回の集団指導をM1から受けることで、2年間安定して自分の研究に向き合うことができました。これらの広く深いサポートにより、研究について具体的なイメージがなかった私も、これだと思えるテーマを見つけ、好奇心を絶やすことなく研究することができました。

このコースで学んだことで、英語教員としての基盤を築くことができたと感じています。外国語教育分野の研究を志す方は勿論、教員を志望している方にとっても有意義な学びの場になると思います。

Q&A

英語以外の外国語教育を学ぶことはできますか？

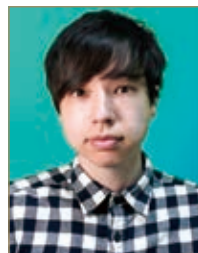
本コースでは、英語・日本語・中国語・ドイツ語の研究指導も行っており、所属学生もこれらの言語を専攻し、分析しています。多言語の視点から外国語教育を考えられるのも本コースの特徴の1つです。

英語教員免許を取得できますか？

学部時代に一種免許状を取得している場合は、博士前期課程で指定された科目の単位を取得することによって専修免許状を取得することができます。また、一種免許状を取得していない場合は、大学院に在籍しながら学部科目を並行履修して、教員免許（一種免許状）取得に必要な科目の単位を取得することが可能です。

学部時代の専門が語学や教育学ではないのですが、本コースで研究していけるのでしょうか？

これまでに在籍していた院生の学部時代の専門は、言語学・言語教育学のみならず、文学・法学・経済学・理工学などさまざまです。語学力と語学教育への熱意があれば、大学院において新たに外国語教育の研究を始めることも十分に可能です。本コース



Zachary Nanbu さん

(博士後期課程3年)
神戸大学大学院国際文化学研究所博士前期課程修了
研究テーマ Second Language Pedagogy and Use in an English Village: Interactional Practices and Sequential Structure

During my time as an undergraduate at University of Hawaii at Hilo, I began working as an ESL tutor and discovered that I enjoyed teaching. After graduating with a bachelor's degree in linguistics, I decided to move to Japan to further my education and learn more about second language learning. Following a series of serendipitous events, I found myself in Kobe University's master's program under the guidance of Tim Greer where I began using Conversation Analysis (CA) to examine the interactional practices of language learners.

After completing the master's program, I opted to continue furthering my research by entering Kobe University's PhD course where I am currently using CA to examine naturally occurring interaction among language learners and teachers at an English village.

Like the master's program, Kobe University's Ph.D course has provided me with an excellent environment for cultivating my research. The Shudan Shidou (group guidance) format continues to be a valuable source of exposure to concepts and ideas from a wide variety of research approaches. Regularly presenting my own work has been excellent for improving my presentation skills, and the expert feedback I have received from the professors and my peers has proven invaluable to strengthening my dissertation.



中西 淳さん

(2020年度博士後期課程修了)
研究テーマ 日本人英語学習者による前置詞使用
現在、大阪工業大学特任講師

私は、学部時代に、自分が留学中に書いた英語日記を調査することによって、自身の英語能力の変化を明らかにしたいと思い、第二言語習得研究 (SLA) という分野にたどり着きました。特に、前置詞の使用にはとても苦戦したこともあって、日本人英語学習者の前置詞使用にどのような問題点があり、

これらの問題点を改善するにはどのような学習や指導が必要になるのかについて興味を持つようになりました。このような点を明らかにするための1つの手段として学習者コーパス研究があるということを知り、大学院では、コーパス言語学を専攻しました。

外国語教育コンテンツ論コースでは、コーパス言語学をはじめ、認知言語学や、語用論など、様々な専門領域で活躍されている先生方からの指導を受けることができ、さらに、まったく異なる分野の研究をしている院生とたくさん交流することができました。これらの経験のおかげで、常に広い視野を持って自身の研究に取り組むことができたと感じています。また、本コースでは、定期的に院生が学内発表をする機会が設けられており、これに向けて自身の研究を進めることができ、くわえて、他の院生の研究成果を聞くことができました。これらは、自身の研究の励みになり、5年間、コツコツと研究を継続させていくことができたと感じています。

本コースでは、こういった経験や刺激をたくさん得られるので、将来、研究者になりたいと考えている人だけでなく、自分の興味や視野を広げてみたいと考えている人にとっても、とても有意義なものになると思います。

では、導入的な講義を体系的に開講しているので、2年間で修士レベルの知識や分析スキルを身につけ、さらに、博士課程で研究を深めることができます。

留学経験者は多いのでしょうか？

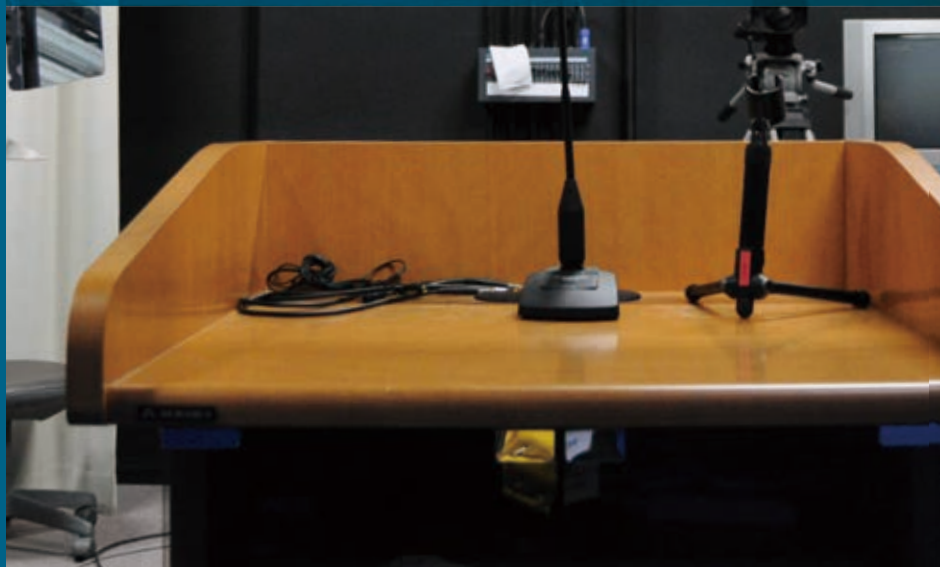
在籍中に、米国、ドイツ、豪州などで留学を経験した学生も多くいます。また、韓国で実地調査を行った学生もいました。院生が留学しても、指導教員はメールなどで頻りに連絡をとり、きめ細やかな指導とサポートを提供しています。在籍生には留学生も多く（中国、米国、モリタニア等）、国際色豊かなコースです。

修了後の進路状況はどうですか？

教育職への就職が非常に多くなっています。前期課程修了者は、全国の公私立の高校・中学校の英語教諭として活躍しており、後期課程修了者は国公立大学や海外の大学の教員に就職しています。この他にも、民間企業の海外部門で活躍する修了生もいます。また、高校や大学で教員として勤務しながら本コースで研究活動に取り組んでいる学生もいます。

連携講座（博士後期課程に設置）

先端コミュニケーション論コース



ますます増大する文化摩擦問題や、近い将来われわれが直面することになるであろうロボットとの共存問題は、コミュニケーションの問題に他なりません。人間のコミュニケーションとはどういうもので、そこにどのような文化差があるのか。言語・パラ言語・非言語行動そして身体は、コミュニケーションの中でそれぞれどのような役割を果たすのか。それはわれわれの外国語学習にどのように活かせるか。先端コミュニケーション論コースは、最新の技術や機器などを駆使してこのような問題を解明し、新しいコミュニケーションの可能性を切り開こうとするコースです。

連携先：株式会社国際電気通信基礎技術研究所（ATR）



進路実績 甲南大学教授、産業技術総合研究所、国際電気通信基礎技術研究所、PD研究員他

在籍学生数（後期課程）2名

- 論文テーマ例**
- 外国語学習における知覚訓練と語彙訓練の順序効果
 - 英語音声の韻律知覚に及ぼす諸要因の研究
 - 外国語音声学習における音響的・意味的文脈効果の研究

所属教員の紹介

内海 章 客員教授 先端コミュニケーション論特別演習

画像認識・視線検出・マンマシンインタフェースなどの分野を主として研究しています。

住岡 英信 客員准教授 先端コミュニケーション論特別演習

人とロボットのコミュニケーションの分野を主として研究しています。

山田 玲子 客員教授 先端コミュニケーション論特別演習

第二言語の音声知覚、音声言語学習、eラーニングなどの分野を主として研究しています。

日本語教師養成サブコース

SUB-COURSE ON TEACHING THE JAPANESE LANGUAGE

本研究科では、博士前期課程の学生を対象に「日本語教師養成サブコース」を設置しています。これは、「外国語としての日本語教育」の基礎知識を体系的に学ぶための副専攻課程相当のコースです。追加の履修条件を満たせば、博士後期課程の学生も履修可能です。

所属コースにかかわらず、すべての本研究科学生がサブコースを履修できます。所定の科目群の中から必要な単位を修得して申請を行うと、修了時に研究科から公式の「修了認定書」が発行されます。

本研究科で学ぶ学生の中には、研究科で身につけた専門分野の知見や国際的な視野を活かし、海外で働くことを希望する人、そして実際に海外で働く人が多くいます。その際、現地では、日本語・日本文化の紹介や指導を求められる場面も少なくありません。この意味で、自身の専門分野に加え、日本語教育の知見を持つておくことは、海外でのキャリア形成にも有益です。また、近年日本国内では外国人居住者が増加・多様化しています。本研究科の研究領域には、彼らの直面する問題やそれをふまえた日本社会の課題の研究も含まれます。このような研究を行おうとする人たちにとっても、日本語教育について学ぶことは、視野を広げ、研究への示唆を得る機会になるかもしれません。

将来、日本語教師としての就職を目指す方はもちろん、自身の国際的なキャリアや研究の可能性を広げたいという方にも、ぜひ本コースの履修を検討してもらいたいと思います。



名前 藤田 航輝さん
所属コース 2020年度言語コミュニケーションコース博士前期課程修了
研究テーマ 「日本語教育の観点からみた外国人向け介護指導テキストへの提案—介護指導テキストの会話文における「共感」の表現に注目して—」
現在、北洋大学国際文化学部（講師）

日本語教育という分野に関心を持っている方ならどなたでも受講でき、一から学べるのが日本語教師養成サブコースの魅力だと思っています。日本語や教授法についての基本的な知識・理論はもちろん、実習を通して経験を積むこともできます。在学時は、留学生の授業の見学や、同じくサブコースを履修していた学生らとペアを組んで模擬授業を行うなどしました。コロナ禍に入ってから授業形態が対面からオンラインに移行しましたが、そんな中でも先生方は環境・形態に合わせた授業を提供してくださり、私自身も授業づくりに関して結果的に多くの学びを得ました。

私は現在、北海道で留学生に日本語を教えています。まだデビューして1年の新人ですが、授業で教わった知識に助けられることがすでに何度かありました。特にオンライン授業の運営については、在学時の経験が活きたと思います。将来的に日本語教師を目指そうと考えている方には、サブコースの履修を強くおすすめしたいです。



名前 佐々木 恭子さん
所属コース 2021年度外国語教育講座コンテンツ論コース博士前期課程修了
研究テーマ 「母語話者・日本人学習者の英作文における原因の表出:コーパスから得た知見の教育的応用」
現在、鳥取県立米子高等学校（英語教諭）

高等学校の現場で英語教員として働く中で、母語が日本語でない生徒と出会う機会がありました。日本語を教えることは主に国語科教員が携わっていたようですが、「国語」としての日本語と「第二言語」としての日本語の教え方は異なり、苦労があったようです。同じ語学教員として何かできることがあればと常々考えていたところ、大学院のオープンキャンパスで日本語教師養成サブコースがあると知りました。そこで、入学出来たら是非とも履修しようと決めました。

今回このコースを履修し、さまざまな講義を通して、自身が専門とする英語とは異なる統語構造の細部など、それまであまり意識することのなかった日本語の特徴や日本語を学ぶ子どもたちに関わる問題点を認識できました。また、このコースでは日本語について学ぶだけでなく、模擬授業を通し学習者に日本語を教える際の注意点に関しても実践的に学ぶことができました。これらを学ぶ中で、自身の母語を客観的に見つめる機会をいただき、ゼミでの英語や学習者英語の研究においてもその知見が役立つことが多々ありました。今後教育現場で多様な生徒や学生と接する機会が増えると考え、このコースを履修することで、その多様性への対応の視点を得られることは大きいと考えます。

留学案内

STUDY-ABROAD INFORMATION



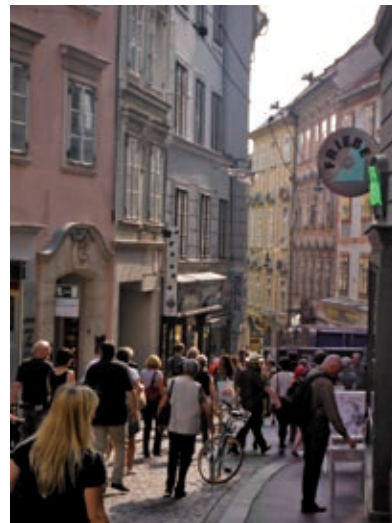
海外の大学と交換留学協定を結んでいます。

国際文化学研究科は海外の大学と協定を結び、学生の交換を行っています。協定による留学は、私費留学とは異なり、以下のようなメリットがあります。

- (1) 授業料：留学先大学の授業料が免除されます（ただし、神戸大学に規定の授業料を支払わなければなりません）。
- (2) 単位互換：留学先で取得した授業の単位について、審査を経て、本研究科の単位として認定される制度があります。
- (3) 修業年限：留学中も神戸大学に在籍中と見なされるので、前期課程の場合は1年間（または半年）の留学期間を含めて最短2年で、後期課程の場合は最短3年で修了することができます。

(1) の留学先の授業料免除は、当該国の大学制度や物価によりさまざまで、大きなメリットになる場合とならない場合がありますが、一般に欧米の大学は留学生から高額授業料を徴収しており、授業料が免除されることは大きなメリットといえます。(2) 及び (3) は協定による留学ならではの利点です。奨学金は日本学生支援機構、神戸大学独自の渡航費と滞在費の一部を補助する奨学金があります。

派遣学生の選考は、次の4点を基準に国際交流委員会が筆記試験及び面接で行っています。(1) 研究目的・計画 (2) 言語能力 (3) 適性 (4) 文化交流。なお、英語圏に留学する場合は要求されている TOEFL 又は IELTS のスコアをクリアしなければなりません。



下中 隆太郎さん

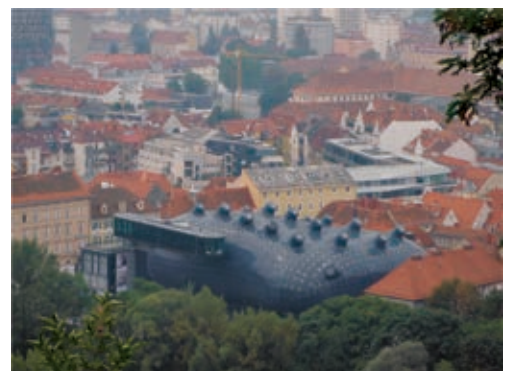
(博士前期課程2年)

神戸大学国際文化学部卒業

研究テーマ：「H・アーレント晩年のカント判断力論」

半年間のリモート留学での私の目標は、ドイツ語力向上はもちろん、ドイツで現在、近現代ドイツ哲学、なかでも政治哲学がいかに論じられているのかを知ること、そして哲学の専門的知見を高めることでした。

ライプツィヒ大学哲学科では、授業の種類が豊富で、学生と教員数が多いこともあって、活発な議論を、しかも割と和やかな雰囲気の中で交わすことができました。ライプツィヒの哲学科の特徴として „Forschungskolleg Analytic German Idealism” という研究機関が設置されており、ドイツの古典哲学（主にドイツ観念論）を、いわゆる英米系の分析哲学的手法で読解する試みが盛んなことが挙げられます。言ってみれば大陸哲学と英米系分析哲学の架橋、という最先端かつスリリングな知的挑戦がなされている環境に身を置くことから多くの刺激や気づきを得ました。最先端と言っても目先の流行に流されるのではなく、古典の一言一句に向き合うことが求められます。さらに、教員や学生たちの間でも研究手法や考え方の違いがあり、多角的に議論を深化させることができ、上述した読解方法の限界について批判的に検討する目も養われたと思います。たしかに現地ではしか得られない経験もありますが、リモート留学であっても、充実した教育・研究体制の恩恵に少なからず与ることができ、当初の目標は一定程度達成されたと思います。



ダブルディグリー・プログラム

DOUBLE DEGREE PROGRAM

本研究科には、ダブルディグリー・プログラムがあります。これは本研究科に在学中の大学院生が留学先研究科に最低1年間留学し、所定の単位を修得して修士論文を提出することによって、最短2年間で修士の学位を本研究科及び留学先研究科において取得できるプログラムです。

それぞれの研究科で取得した単位の一部は互換され、カリキュラムも連携しています。授業料等については、本研究科の学生は神戸大学に支払うだけで、留学先研究科では免除されます。

■派遣大学

ナポリ東洋大学（イタリア）、パリ大学（旧：パリ・デイドロ大学）、ルーヴェン大学（ベルギー）、ハンブルク大学（ドイツ）、フランス国立東洋言語文化学院（INALCO）

■派遣人数

各大学1～2名

■出願資格

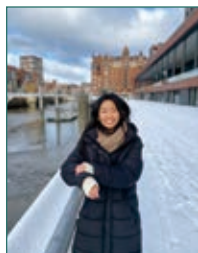
- （1）国際文化学専攻前期課程に所属していること
- （2）派遣大学の語学要件等を満たしていること
- （3）指導教員より推薦を受けられる者

■派遣学生の選考は、次の3点を基準に書類および面接で行います。

- （1）研究計画、（2）語学力、（3）適性

■受入学生の研究テーマ：「現代の日本における『メイド・イン・イタリア』」、「Japan's cultural diplomacy in France」など。

■派遣学生の研究テーマ：「EUの社会的通商政策の形成過程」、「ヨーロッパの高等教育改革と各国のマイノリティへの対応」など。



小林 睦さん

（博士前期課程3年）

神戸大学発達科学部卒業

研究テーマ：「アマチュアオーケストラ活動を支える社会文化的環境 ―ドイツと日本の大学オーケストラに焦点を置いて―」

私は学部生のころ、ハンブルク大学に1年間留学しました。留学生向けの授業を受講する傍ら、ハンブルク大学交響楽団にも所属して、神戸大学交響楽団との違いなどを肌で感じました。帰国して大学を卒業し、修士課程進学後、ドイツと日本の文化的環境の相違点・相似点についてさらに知りたいと考え、ハンブルク大学とのダブルディグリー・プログラムに応募しました。

ハンブルク大学での正規学生として授業は大変なものでしたが、それをなんとかこねせたのは、指導教員の先生の丁寧な指導と留学以前に知り合っていたドイツの友人の支えによることが大きかったと思います。

ハンブルクに行きつづけたころ、新型コロナがドイツでも流行り始め、大学も閉鎖されることになりました。学長はそれに対して、「大学は本来政府から独立していることが絶対の義務であり、政府の指令に従うようなものではないのだが、今回の新型コロナの問題に対処するためにはこのような措置は避けがたい」といったことについての長大なメッセージを学生に向けて発信していました。ナチスを経験したドイツの大学では、何よりも大学の独立が重視されるのだということを深く感じさせるメッセージでした。留学時期はコロナ禍と重なり苦しかった時もありましたが、両大学の先生方のご尽力のおかげで研究にはげむことができました。両大学の諸先生には心より感謝しています。

プログラムを通して、実際に神戸とハンブルクの大学オーケストラで参与観察や質問紙調査を行い、それらの調査を土台に、両国のアマチュア音楽活動の背景にある社会文化的環境を明らかにする修士論文を執筆しました。ドイツの文化に日常的に触れられる環境で学ぶことができ、その経験も踏まえ、日本語とドイツ語で論文を書けたのは、非常に貴重な経験だったと思います。

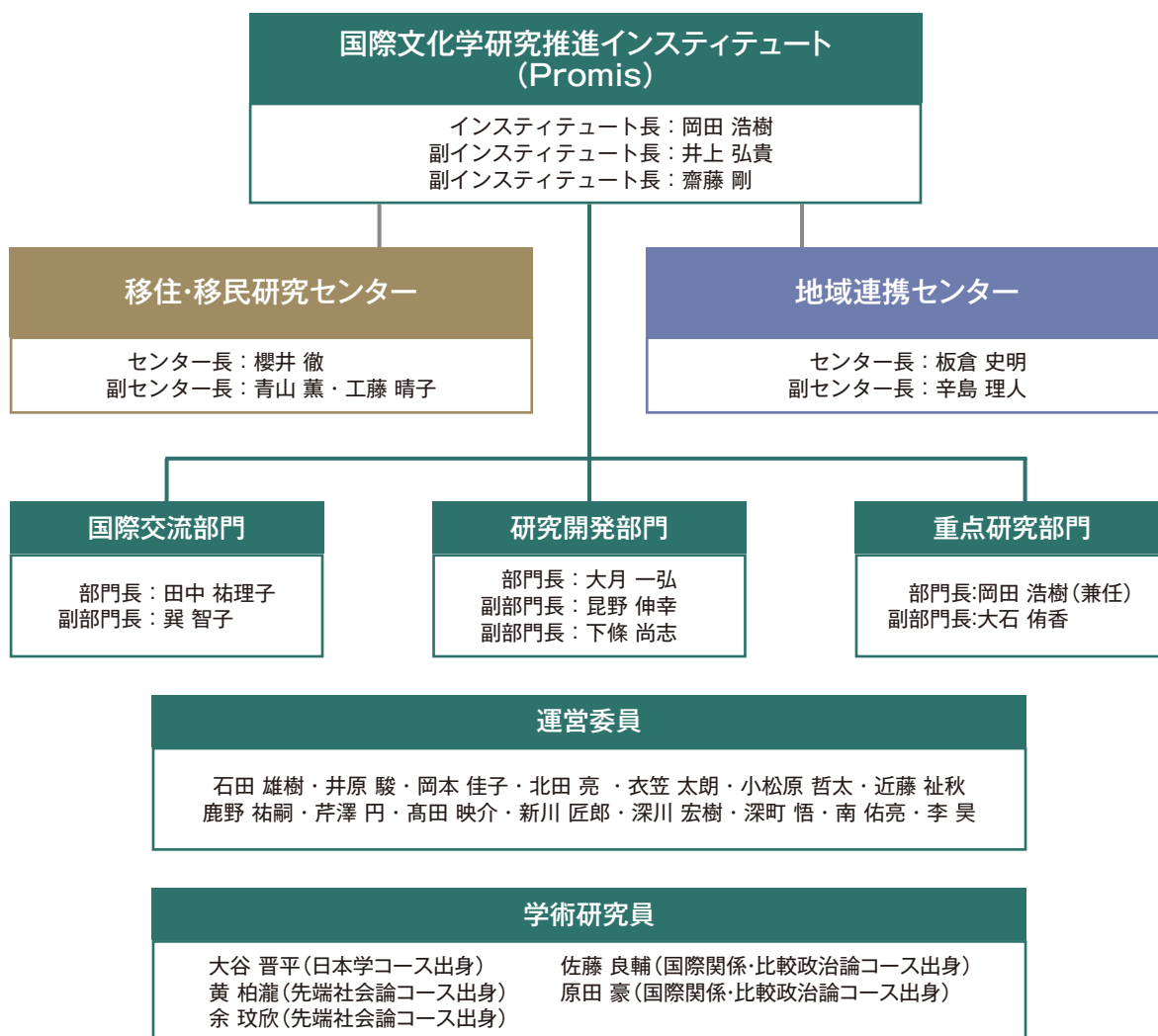
研究科協定校一覧		
ロンドン (SOAS)	イギリス	全学協定
エセックス		全学協定
バーミンガム		全学協定
マンチェスター		
ケント		全学協定
ユタ州立	アメリカ	
ニューヨーク市立クイーンズカレッジ		全学協定
ジョージア工科大学		全学協定
テネシー大学		
ヒューロン・ユニバーシティ・カレッジ	カナダ	
オタワ		全学協定
ブラジリア	ブラジル	
ハンブルク	ドイツ	DD プログラムあり
ベルリン自由		
ライプツィヒ		
ハレ・ウィッテンベルク		
トリアー		全学協定
キール		全学協定
ダルムシュタット工科大学		全学協定
ミュンヘン工科大学		全学協定
グラーツ		全学協定
ライデン		全学協定
ルーヴェン	ベルギー	DD プログラムあり
サンルイ		
ヘント		
ブリュッセル自由 (仏語系)		
ブリュッセル自由 (蘭語系)		全学協定
グルノーブル・アルプ	フランス	
レンヌ第1		
パリ第2		全学協定
パリ (旧：パリ第7)		全学協定
パリ・ナンテール (旧：パリ第10)		DD プログラムあり
フランス国立東洋言語文化学院 (INALCO)		全学協定
リール		DD プログラムあり
エクス＝マルセイユ		全学協定
ニューカレドニア		全学協定
ボローニャ	イタリア	全学協定
ボローニャ (フォルリ)		
ヴェネツィア		全学協定
ナポリ東洋		DD プログラムあり
バーゼル	スイス	全学協定
バルセロナ	スペイン	全学協定
バルセロナ自治		
ベルゲン	ノルウェー	
ヘルシンキ	フィンランド	
カレル	チェコ	全学協定
ワルシャワ	ポーランド	
ニコラウス・コペルニクス		全学協定
ヤゲウォ		全学協定
エトヴェシュ・ローランド		全学協定
バベシュ・ボヨイ	ハンガリー	全学協定
ソフィア	ルーマニア	Erasmus+ プログラム
サンクトペテルブルク	ブルガリア	全学協定
ウラル連邦	ロシア	全学協定
ウーロンゴン		全学協定
西オーストラリア		全学協定
クイーンズランド		全学協定
ニューサウスウェールズ	オーストラリア	全学協定
カーティン		
武漢		全学協定
上海交通		全学協定
清華	中国	全学協定
南京		全学協定
華東師範		全学協定
中国人民		全学協定
浙江		
香港		
北京外国語		
中央民族		
国立台湾		全学協定
国立政治	台湾	全学協定
国立成功		全学協定
ソウル国立		全学協定
済州		全学協定
中央	韓国	
国立釜山		
モンゴル国立		全学協定
ベトナム国家 (ホーチミン)	モンゴル	全学協定
アテネオ・デ・マニラ	ベトナム	
タマサート	フィリピン	
ガジャ・マダ	タイ	
南洋理工	インドネシア	
	シンガポール	全学協定

国際文化学研究推進インスティテュート

RESEARCH INSTITUTE FOR PROMOTING INTERCULTURAL STUDIES (PROMIS)

2022年4月、国際文化学研究推進センターは国際文化学研究推進インスティテュート(Research Institute for Promoting Intercultural Studies, Promis)に発展的に改組し、そのもとに移住・移民研究センターと地域連携センターを設置するとともに、研究開発部門、国際交流部門、重点研究部門の3基幹部門を置くことになりました。この新しい統合的組織のもとで、国際文化学研究推進インスティテュートは国際文化学研究科の研究プラットフォームとして、さらなる今後の取り組みを進めていきます。

国際文化学研究推進インスティテュート(Promis) 組織図



名前 清川 祥恵さん

所属コース 2012年度文化相関専攻ヨーロッパ・アメリカ文化論コース博士後期課程修了

研究テーマ 「ウィリアム・モリスの文学作品における中世主義」

2013年度より、Promisの前身である異文化研究交流センターや国際文化学研究推進センターに学術研究員・協力研究員として在籍、2021年度より連携フェロー。現在、佛教大学文学部(講師)。

国際文化学研究科で基本的な知識や手法を身につけ、博士号を修得すると、晴れて一人前の研究者となり、以降これまで「先生」だった研究科教員や先輩方もある種対等な仲間となります。国際文化学研究推進インスティテュート(Promis)では、互いに様々なノウハウを共有しながら、協力し合って研究を進めていくことができます。実際に私も、研究プロジェクト助成制度を利用して研究科の先生や院生時代の先輩方との複数の共同プロジェクトを組み、科研費の取得や論集の出版といった成果につなげることができました。

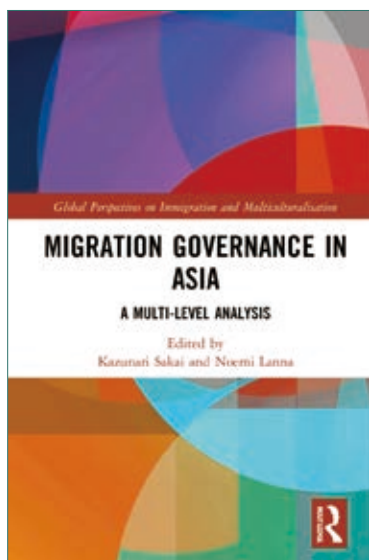
Promisの活動に携わることで培える企画力、組織力、実務能力(各種申請書の作成、広報、ウェブサイト管理、オンライン／対面会議の開催・補佐、論集編集等)は、研究者にも多様なスキルが要求される今日、未永く研究活動を続けていくために、またアカデミアでのキャリアを築いていくにさいしても、確実に自分の助けとなるものです。博士課程修了後の道行きは誰にも定められていないからこそ、着実かつ持続的な旅の第一歩を Promis の仲間と踏み出せたことは、今も私にとって大きな糧となっています。

移住・移民研究センター

2016年度から2021年度まで、日本学術振興会の研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）として「日欧亜におけるコミュニティの再生を目指す移住・多文化・福祉政策の研究拠点形成」が採択され、国内外の研究ネットワークを構築しながら研究が進められてきました。この研究プロジェクトを発展させるかたちで、2021年10月からは日本学術振興会「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（学術知共創プログラム）」として「移住・移民の常態化を前提とする持続的多文化共生社会の構築」が採択され、移住・移民研究センターが中心となってこの研究プロジェクトを推進していきます。この研究プロジェクトは、人文社会科学を核としつつ、自然科学との協働を通じてグローバルに展開する移住・移民をめぐる諸課題に取り組むものです。



移住移民のワークショップの様子



英語による学術成果の刊行

地域連携センター

異文化研究交流センターの時代から、アートマネジメントをつうじた地域とのかわりや、兵庫県国際交流協会、神戸市定住外国人支援センター、南あわじ市といった諸団体との連携を進め、2009年には南あわじ市と包括連携協定を締結するに至りました。国際文化学研究推進センターの時代には、神戸映画資料館、公益財団法人淡路人形協会、宇宙航空研究開発機構（JAXA）といった諸団体との連携を深めてきました。地域連携センターでは、神戸大学の地域連携推進本部とも緊密に連絡をとりあいつつ地域連携をさらに組織的に深化させ、従来からの映画研究や多文化共生のフィールドワー

ク調査にくわえて、観光まちづくりといった新しいテーマに取り組みの幅を広げていきます。

研究開発部門

研究開発部門では、国際文化学研究科所属の教員、あるいはPromis学術研究員や協力研究員が中心となって企画するセミナーの開催や広報をサポートするほか、Promisが公募する研究プロジェクト等の選定、修士論文・修了研究レポートの収蔵管理をおこなっています。また、神戸大学学術研究推進室（URA）と連携して、科学研究費助成事業をはじめとする外部資金申請のための支援をしています。2021年度の研究プロジェクト（移民研究プロジェクトを含む）は以下の通りです（肩書は2021年度現在）。

- 新しい「神話的物語」の創生と日本ポップカルチャー（代表：植朗子協力研究員）
- 多文化共生における信頼感に関する国際比較研究—日中比較研究を中心に（代表：林萍萍協力研究員）
- 近現代ドイツにおける地理的「中間Mitte」の思想史：「中間民族Mittelvolk」自己像の生成と類型（代表：野上俊彦協力研究員）
- 日本人学習者の中国語第三声習得に関する研究（代表：呉琪協力研究員）
- 「モノ」のエスノグラフィー：アート、伝承文学、エコロジーにおけるポスト・ポストヒューニズムの探求（代表：小林瑠音学術研究員）

国際交流部門

国際交流部門では、国際文化学研究科と緊密に連携をとりつつ、海外の研究機関と学術協定締結をおこなっています。これまでに、チアパス自治大学先住民研究所（メキシコ）、マヒドン大学人口社会研究所（タイ）、アムステルダム自由大学社会学部／社会学研究科（オランダ）と協定を締結し、国際ワークショップ・シンポジウムの開催や研究者間交流を進めています。

重点研究部門

重点研究部門では2022年度、大学共同利用機関法人人間文化研究機構のネットワーク型基幹研究プロジェクトである「グローバル地域研究推進事業」を推進していきます。

学術研究員

各年度、国際文化学研究科博士課程後期課程で学位を取得した者のなかから若干名を学術研究員に採用しています。学術研究員には研究者番号が付与され、Promisにて各種の研究プロジェクト等に従事するとともに、事務補佐員とともにPromis事務局を構成し、国際文化学研究推進インスティテュートの管理運営を担っています。

協力研究員

各年度、国際文化学研究科博士課程後期課程で学位を取得した者を協力研究員に委嘱しています。協力研究員には研究者番号が付与されるほか、Promisが公募する研究プロジェクト等に研究代表者として応募することができます。海外大学院に在籍する若手研究者がPromisで研究に従事するための客員協力研究員の制度もあります。

連携フェロー

国際文化学研究科ないしは国際人間科学部に過去に在籍した教員、あるいは国際文化学研究科博士課程後期課程で学位を取得し、他大学にて専任教員の職を得た者を連携フェローに委嘱しています。連携フェローは、Promisが推進する各種の研究プロジェクトの研究分担者や研究協力者として、Promisの国内外の研究ネットワークの一翼を担っています。

就職と進学

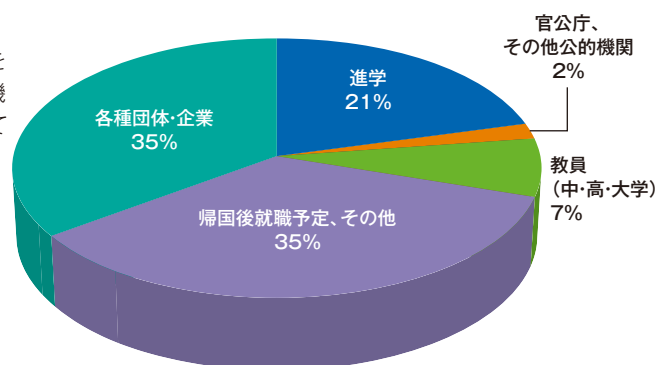
EMPLOYMENT AND CAREERS



国際文化学研究科は、創設以来、学界・教育界・ビジネス界に有為な人材を多数輩出しています。修了生はグローバル社会を切り拓くフロントランナーとして多面的に活躍しています。

1. 前期課程修了生の進路概況

2021年度の前期課程修了生 43名のうち 19名が、前期課程修了後研究成果を活かして就職し、社会の第一線で活躍しています。就職先には、各種法人、各種教育機関、多様な分野の民間企業があげられます。また、9名が博士後期課程に進学しています。帰国後に本国で職につく留学生もいます。



2021年度（43名修了）

2. 前期課程修了生（旧研究科を含む）の近年の主な就職先実績

高度な語学力と情報処理能力をベースに国際文化学の幅広い専門知識をつけた修了生は、さまざまな業種で活躍しています。公務員としては韓国法務省、パラオ政府芸術文化省、ベトナム政府関連など、海外からの留学生の活躍も目を引きます。教員としては英語、日本語、韓国語など、修了コースの特性を活かした分野で活躍する修了生もいます。

主要就職先

公務員他	【国際機関】
	パラオ政府芸術文化省、韓国外交産業省、タイ大使館、国連ハピタット（アジア・太平洋地域事務所）、ベトナム政府投資企画庁など
	【国家公務員】 防衛省・語学職（英語）、大蔵省（現財務省）、国立民族学博物館、京都大学原子炉実験所（技官）、神戸大学職員など
教員	【地方公務員】
	兵庫県人と防災センター、兵庫県警、大阪市役所、西宮市役所、新潟市役所、神戸市芸術センター、兵庫県立芸術文化センター、神奈川県葉山町生活環境部、神戸市役所、三田市役所など
	【その他】 JICA（国際協力専門員）、国際交流基金、青年海外協力隊（エルサルバドル派遣）、関西経済連合会、日本原子力研究開発機構、海外産業人材育成協会、在外公館派遣調査員、独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構、長崎原爆資料館など
運輸	【大学】神戸大学、兵庫県立大学、ラオス国立大学 【中学校・高等学校その他】大阪府、兵庫県、東京都、岡山県、山口県、鹿児島県、福井県、神戸市など
広告	全日空、JTB、川崎汽船、阪急交通社、NEXCO中日本、羽田空港など
情報	電通、リクルートメディアコミュニケーションズなど
食品	三混紡研DCS、NECソフト、NTTデータ、ソフトバンク、日本IBM、日本IBMインダストリアルソリューション、野村総合研究所、ヤマトシステム開発、住生コンピューターサービス、日立システムエンジニア、メディアフュージョン、ゴールドマン・サックス、日本オラクル、NTT西日本、NECシステムテクノロジー、富士通FIP、富士通ビー・エス・シー、フジクラ、ウェブリオ、日本製薬、リクルートなど
製造	JR 西日本フードサービス、カネテツデリカフーズなど
マスコミ	三菱重工業、日立製作所、住友ゴム工業、富士通、ダイハツ工業、NEC、YAMAHA、日本HP、日本IBM、関西電力、日立電線、川副機械製作所、トヨタ、シャープ、帝国電気、コスモ石油、バンダイ、コベルコシステム、ニチダイフィルタ、明和、矢崎創業、台湾日立化成工業、博瀬電機貿易（上海）有限公司、帝国電機、中国電信北京支社、JNC、パナソニック、ローランド、明星産業、華美電子など
文化	共同通信、時事通信、神戸新聞社、毎日新聞社、産経新聞社、日本放送協会（NHK）、京都新聞社、高知新聞社、MBSラジオなど
	関西フィルハーモニー管弦楽団、（公益財団法人）びわ湖芸術文化財団、（公益財団法人）ニッセイ文化振興財団、公益財団法人吹田市文化振興事業団など



3. 前期課程修了生（旧研究科を含む）の近年の主な進学先実績

本学の大学院博士後期課程をはじめ、他大学の大学院にも多数が進学しています。2021年度の例では、修了生43人中、9名が博士後期課程に進学しています。

主要進学先

神戸大学	国際文化学研究科、人文学研究科、人間発達環境学研究科、工学研究科など
その他国公立大学	京都大学大学院、九州大学大学院、総合研究大学院大学、東京都立大学大学院、神戸市外国語大学大学院など
海外大学・私立大学	シェフィールド大学、ハンブルク大学、ルーヴン大学、パリ第7大学、ナポリ東洋大学など

4. 後期課程修了生（旧研究科を含む）の進路概況

大学教員や学芸員などの職についています。2021年度修了生は15名で、日本学術振興会特別研究員(PD)、神戸市看護大学教員、兵庫県立大学教員、神戸大学非常勤講師、芸術文化観光専門職大学非常勤講師、摂南大学非常勤講師などに就職しました。

5. 後期課程修了生（旧研究科を含む）の近年の主な就職実績

海外・国内の大学において、多くの修了者が研究者・教育者として活躍しています。また近年、学位取得後、大学だけではなく企業や研究所に就職する人も増えてきています。

主要就職先

海外大学	天津外国語大学、青島大学日本語学部、浙江大学人文学院、ヤンゴン大学人類学科、中国人民大学外国語学部、台湾国家科学委員会・人文学研究中心研究員、大連外国語学院日本語学院、湖南工業大学外国語学院、中国国立広州中医薬大学、中国内蒙古大学トルコ・チャナッカレオンセギズマルト大学など
国公立大学等	【国立】大阪大学、神戸大学留学生センター、神戸大学百年史編集室、静岡大学、京都大学留学生センター、福井大学教育地域科学部、国立沼津工業高等専門学校教養科、福井大学、ジェトロ・アジア経済研究所など 【公立】島根県立大学看護学部、神戸市外国語大学、兵庫県立総合衛生学院、北九州市立大学基盤教育センターなど
私立大学	桃山学院大学国際教養学部、大阪工業大学、近畿大学、同志社大学、プール学院大学国際文化学部、広島国際大学、大妻女子短期大学、甲南女子大学、四條畷学園短期大学、花園大学文学部、神戸学院大学経営学部、関西学院大学国際学部、関西学院大学言語教育研究センター、甲南大学人間科学研究科研究員、神戸情報大学院大学、武庫川女子大学、武蔵大学社会学部、環太平洋大学、京都精華大学など
学芸員	呉市海事歴史科学館学芸員など
行政・企業	神奈川県警察科学捜査研究所、朝日新聞、兵庫留学生会館、イオン、教育開発出版、メディキット、カナフレックスコーポレーション、財団法人安全保障貿易情報センター、国際交流基金、愛知県西尾市教育委員会、アステラス製薬、ファーストリテイリング、三菱銀行(中国・広州)、中国航空工業集団、国際電気通信基礎技術研究所など

充実したキャリア・サポート

国際文化学研究科はキャリア・サポートのコアに教育を据え、それを補強する就職支援活動を強力に、きめこまやかに推進するユニークな研究科を目指しています。近年は、特に外国人留学生の就職支援活動を充実させるように努めています。

就職支援を担当する鶴甲第一キャンパスキャリアサポートセンター(鶴一CSC)は、就職、留学、資格試験、人生設計などに関するキャリア関連図書が閲覧できる独自のコーナーを設け、企業で働く方々の体験談や専門分野の知識の企業での生かし方などの講演会や就職活動体験報告会等の働き方の探求に関わる行事を開催しつつ、面接対策、インターンシップ対策など就職活動に直接関わる各種の情報提供をしています。全学の就職支援活動と常に連携しながらも、院生一人ひとりの進路選択の相談に応じるなど、充実したサポート体制をとっています。近年は、グループディスカッション講座など、新しい企画にも挑戦する一方、特に留学生のための就職支援活動に力を入れています。

全学の研究支援施設・学生寮・奨学金

RESEARCH FACILITIES, DORMITORIES, SCHOLARSHIPS



CALL 室 / ランゲージ・ハブ室

研究科のキャンパスには、国際コミュニケーションセンターが運営する外国語学習支援施設があります。「アクティブラーニングラボ (AL Lab)」と「インタラクティブラーニングラボ (IL Lab)」では、外国語学習において、ペアワークやグループディスカッションなどの双方向型学習が円滑に行えるような教室環境が整えられています。

「ランゲージ・ハブ室」には、英・独・仏・中・露・韓の各国語を話す留学生が常駐しており、気軽に外国語による会話体験を持つことができます。また、「ランゲージ・ハブ室」では、英語プレゼンテーション・セミナーなど、さまざまな外国語教育プログラムが提供されており、学んだ外国語を実際に使う場が用意されています。これらの充実した施設を活用することで、外国語の実践的運用力の向上が期待できます。英語をはじめとした既修外国語のブラッシュアップはもちろん、ぜひ、新しい外国語の習得にもチャレンジしていただきたいと思います。



学生寮

大学の寮として、男子学生用に「住吉寮」「住吉国際学生宿舎」「国維寮」「白鷗寮」、女子学生用に「女子寮」「住吉国際学生宿舎」「国維寮」「白鷗寮」があります。学生寮の寄宿料は月額4,700円～18,000円(光熱費などは別)です。格安であること、研究科を超えた友人を作りやすいことなどが寮のメリットです。また、「女子寮」を除き、日本人学生と留学生の混住型となっており、国際的な交流が期待できます。

国際文化学図書館

神戸大学には各キャンパスに図書館があります。中央図書館というものはありません。国際文化学部図書館の入口には「総合図書館」と「国際文化学図書館」という2つの看板が掛けられています。総合図書館というのは全学共通教育の学習支援を行うことを目的としており、全学問分野の資料の充実に努めています。国際文化学図書館は、国際文化学部・本研究科の学生・院生向けに、文化交流や各国の文化事情など国際文化学に関わる資料を中心に収集しています。

本図書館では、「学生希望図書」という予算費目があり、本研究科の大学院生は、学術的な図書の購入希望を申請することができます。図書館では、蔵書の貸し出しに加えて以下のサービスが提供されます。複写申し込み、学内の他の図書館からの取寄せ、他大学からの図書貸与やコピーの申し込み、購入希望の受付などです。またこれらのサービスは、図書館まで行かずに、学内のパソコンの画面から依頼することができ、さらに文献やコピーの到着をEメールで案内してくれるので大変便利です。また図書館のホームページで電子ジャーナル検索、データベース検索、新聞記事検索を利用できます。平日は8:45から21:30まで、土曜日は10:00から18:00まで開館しています。



奨学金

日本学生支援機構奨学金と神戸大学独自の奨学金、財団や企業、地方自治体などが支給する奨学金があります。日本学生支援機構の場合、第一種奨学金(無利子貸与)と第二種奨学金(有利子貸与)があり金額も異なります。

研究会・研究誌の紹介

RESEARCH GROUPS AND JOURNALS



国際文化学研究科には多くの研究会・プロジェクトが組織され、研究科の教育と研究の重要な一翼を担っています。

神戸大学大学院生紀要『国際文化学』

神戸大学国際文化学研究科は、研究科に所属する大学院生の研究を促進することを目的とし、研究成果を広く公開するために、『国際文化学』（大学院生紀要）を刊行しています。

『国際文化学』の前身は、2011年度まで年2回（通算25号）、神戸大学国際文化学会（学術組織）が発行してきた学術雑誌です。この雑誌は、研究科の教育・研究の一翼を担ってきましたが、2012年度より、大学院生の学術研究をサポートし、大学院教育の効果を強化するために、オンラインの大学院生紀要としてリニューアルいたしました。年1回の発行で、投稿資格者は国際文化学研究科の大学院生および編集委員会が認めた者です。

『国際文化学』の編集方針は、前身誌の方針を引き継ぎ、さらに大学院教育の一環としての特徴を備えております。大学院生が論文を投稿すると、指導教員以外から複数の査読委員が選ばれ、その論文の審査にあたります。専門的なコメントが必要な場合は外部の研究者に査読を依頼する事もあります。査読教員は、論文掲載の可否を決定するだけでなく、論文に問題がある場合には、それをどう修正すべきかについて懇切丁寧なコメントを投稿者に返します。論文の修正期間が十分に確保されているので、投稿者は指導教員とも相談しつつ、じっくり論文を書き直すことができます。このような査読―修正―再投稿のプロセスを経て、大学院生は全国学会などに投稿するための学問上の基本的な作法、必要とされる学術水準について学びます。

ホームページ

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/kernel/seika/eISSN=21872082.html>

『神戸文化人類学研究』

『神戸文化人類学研究』は、2007年に創刊された文化人類学コースが発行する学術雑誌です。これは、2002年に創刊された旧神戸大学社会人類学研究会が発行した学術雑誌『ほぶるす』を前身としたものです。『神戸文化人類学研究』は、学内外2名の研究者による厳正な査読によって学術的水準を維持しています。本誌では、文化人類学を専攻する本研究科所属大学院生の研究成果が主に公表されていますが、近年では他大学の大学院生、研究者も投稿するようになっています。

なお、文化人類学コースでは、本コース所属大学院生を中心とした神戸人類学研究会が組織されています。定期的に行われる本研究会では、学内のみならず学外の研究者も招いて活発な議論が交わされ、その開催数は、2017年6月の段階で75回を数えています。

ホームページ

<http://web.cla.kobe-u.ac.jp/group/kobe-anthro/>

『日本文化論年報』

『日本文化論年報』は、1998年3月、学部および大学院の日本文化論講座（現在は日本学コース）を母体に創刊、年1冊の刊行を続けています。

講座・コースの研究・教育活動の牽引を目的に、教員および大学院生の研究成果、また優れた学部卒業論文などを掲載しています。その他教育活動に関する彙報、卒業生情報などもあります。刊行に際しては、神戸大学山口誓子学術振興基金の補助金を得ています。

ホームページ

<http://web.cla.kobe-u.ac.jp/staff/gakunone/home/nenpou.html>



研究サポート

RESEARCH SUPPORT

キャンパス内での院生の生活・研究を強力にサポートします。

空き時間は、ここでくつろぎ、勉強する ― 院生研究室 ―

国際文化学研究所には、院生専用の研究室が設置され、各研究室にはデスクのほか、書架やロッカーも配置されています。また、院生研究室には数多くのパソコンが配置され、インターネットや電子メールを自由に利用することができます。

自分のペースで研究を進めたい方に ― 長期履修学生制度 ―

この制度は、職業を有している等の事情により、2年間で博士前期課程修了に必要な単位を修得し修了することが困難な者が、入学時に計画的に2年を超えて単位を修得し修了することを申請し、大学がこれを認めた場合、2年間の授業料で2年を超えて在学できる制度です。

2年間の授業料の合計額を長期履修学生として認められた年数で除した額が年額授業料となります。ただし、在学中に授業料が改定された場合には、改定時から新授業料が適用されます。職業を有している等の事情とは、次のいずれかに該当する者で、標準修業年限内での修学が困難な者です。

- (1) 職業を有し就業している者（自営業および臨時雇用〔単発的なアルバイトを除く。〕を含む。）
- (2) 家事、育児、介護等の事情を有する者
- (3) その他研究科長が相当と認めた者

なお、この制度の利用には、上記の職業を有している等の事情以外に一定の条件があります。申請希望者はあらかじめ担当係に相談してください。



ハラスメントのないキャンパスをめざして ― ハラスメント防止委員会 ―

大学では、自由で充実したキャンパス・ライフを送ってほしいと思っています。性別、年齢に関係なく、互いを尊重する人間関係を築くことが大切です。とはいえ、人間関係が広がれば、望んでいないような不愉快な言動をされたり、気づかぬうちに相手を傷つけたり、相手から傷つけられたり、ということが起こります。ハラスメントとは、「嫌がらせ」を意味し、就労、就学上の優位な立場を利用して、相手が望まない言動により、精神的、肉体的苦痛を与えることです。性的なことに関連するセクシャル・ハラスメント、教育上のことがらに関連するアカデミック・ハラスメント等々、さまざまな種類があります。

国際文化学研究所には、男性、女性両方の教員からなるハラスメント防止委員会が設置されています。不幸にしてハラスメントを受けてしまった場合、ひとりで悩まないで、早めに委員の教員に相談してください。ひとりで不安であれば、誰かに一緒に行ってもらいましょう。匿名での相談も受け付けています。委員会では、相談者のプライバシー保護に十分配慮していますので、安心して相談に来てください。

コピーカードの支給

授業や研究のために必要なレジュメや資料をコピーできるように、毎年、定額のコピーカードが無料で支給されます。



論文題目

THESIS TITLES



国際文化学研究所 論文題目（令和3年度提出分）

※ (D) 博士論文 (M) 修士論文 (MC) 修了研究レポート

【アジア・太平洋文化論コース】

- (D) 戦中戦後の国際関係における中華民国の対日賠償要求問題
- (D) 文化の流用による主体性を編み込む先住民
—ニュージーランド先住民マオリの歌と踊りをめぐる事例から—
- (D) 内モンゴルの基層社会における文化大革命
— 民族と階級の交差 —
- (D) 清末期外藩モンゴル・オールドス地方へのスクート会（カトリック宣教会）の進出
— 清朝政府のキリスト教政策と地方におけるキリスト教問題への対応 —
- (D) 蒙疆政権の軍隊の形成過程に関する研究
— 徳王の民族運動と関東軍 —
- (M) 日中友好協会の機関紙からみる日本人の文革認識
- (MC) 中国の SNS がコミュニティのルール形成と過激化に与える影響 — Weibo におけるファンコミュニティを例として

【ヨーロッパ・アメリカ文化論コース】

- (D) サモアの「近代」な政治に対する現地住民の反応（1873-1936 年）
— 海外地域との関係や人々の多様性に着目して —
- (M) トマス・ホップスにおけるエロスの人間について：『法の原理』を中心に
- (MC) 中国清末における 19 世紀のイギリスのフェミニズム思想の受容

【文化人類学コース】

- (M) 現代モリタニアにおけるアラブ・ベルベル系民族のエヘルと社会階層制——職業的な関わり合いを通して構築される「家族のような関係」
- (M) 先住民のホームレス—カナダの都市先住民の事例を中心に—
- (M) 海外移住労働者における母子関係維持についての考察—中国朝鮮族移住母の事例を中心に—
- (MC) 「土を活かす」作陶——現代日本における個人陶芸作家を事例として——
- (MC) 媽祖信仰をめぐるグローバルな来訪者に関する文化人類学的研究 — 中国福建省廈門朝宗宮を事例に
- (MC) 地方都市の祭礼における屋台と地域意識—兵庫県姫路市灘のけんか祭りに対する考察—
- (MC) 水族の女性宗教職能者「過陰婆」の成巫過程に関する考察—貴州省三都水族自治県水根村を中心に—
- (MC) 中国四川省凉山彝族社会における爾曹の変容—一家支を中心に—

【比較文明・比較文化論コース】

- (D) 放射線被曝防護の国際的基準策定プロセスの科学史的研究

【国際関係・比較政治論コース】

- (MC) EU 拡大と域内の自動車産業拠点移動の関係の構造分析
- (MC) イタリア・五つ星運動から見る「中抜き」政治
- (MC) ドイツ緑の党の挑戦 —連邦州における選挙パフォーマンスを通じた政権参画の比較分析—
- (MC) シリアにおけるクルド民主統一党（PYD）による自治政体形成の分析

【モダニティ論コース】

- (M) ハンナ・アーレントにおける「暗い時代」の判断力論——カント講義における三つの宥和の観点から

【先端社会論コース】

- (D) Diffusion of Hip Hop: A Critical Reappraisal of 'Call and Response' in East Asian Street Dance Culture
- (D) Queer migration and drag performance in Japan: Rethinking identification, participation and belonging
- (D) 日における『シャーロック・ホームズ』の受容
- (M) 在日中国人技能実習生の階層帰属意識
- (MC) 近親者へのカミングアウトの有無がセックスワーカーの生活に与える影響
- (MC) Intersectionality and employment: discrimination against Muslim women in the process of job-seeking in Japan.

【芸術文化論コース】

- (MC) 言語芸術としての『フルターニウム民謡集 バルザス＝プレイス』とその機能
- (MC) アマチュアオーケストラ活動を支える社会文化的環境—ドイツと日本の大学オーケストラに焦点を置いて—
- (MC) 企業メセナに関する運営者と参加者からの視点—ひのつ子ピアノコンクールを中心に—
- (MC) 異文化間アダプテーションにおける物語の更新——日仏ミュージカル『ロミオとジュリエット』を例として

【言語コミュニケーションコース】

- (M) Free Indirect Style in Literary Translation: Focusing on E. Seidensticker's Works
- (M) 英語ビジネス書の日本語と中国語への翻訳についての研究—翻訳品質と翻訳能力の観点から—
- (M) 中国人日本語学習者による複合動詞の使用について —コーパスの産出データの分析—
- (MC) 映画『ジョコレートドーナツ』の翻訳から見るゲイの男性が話す女ことは
- (MC) ユーモアを異文化圏で適切に機能させるための翻訳ストラテジーの考察—落語を題材に—

【感性コミュニケーションコース】

- (M) 短縮版音楽体験尺度（B-MEQ）の日本語版の構築
- (M) 丁寧な発話態度に関する音声的特徴—日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較—
- (M) 普通話と広東語の語形成の韻律テンプレート—離合詞の目的語の後続許容度に注目した対照研究—
- (MC) 大学生のセルフコントロールと心理的・主観的 Well-being の関係
- (MC) ドラム即興演奏課題における生理的・行動的シンクロニーに空間共有と二者の関係性が及ぼす影響

【情報コミュニケーションコース】

- (M) 2 つの日本語文章コーパスに対する単語の意味変化検出手法の提案と評価
- (M) 口周辺の筋電情報を用いた日本語母語話者と非母語話者の違いに関する研究
- (M) クラ交換の仕組みを取り入れた SNS のデザイン

【外国語教育システム論コース】

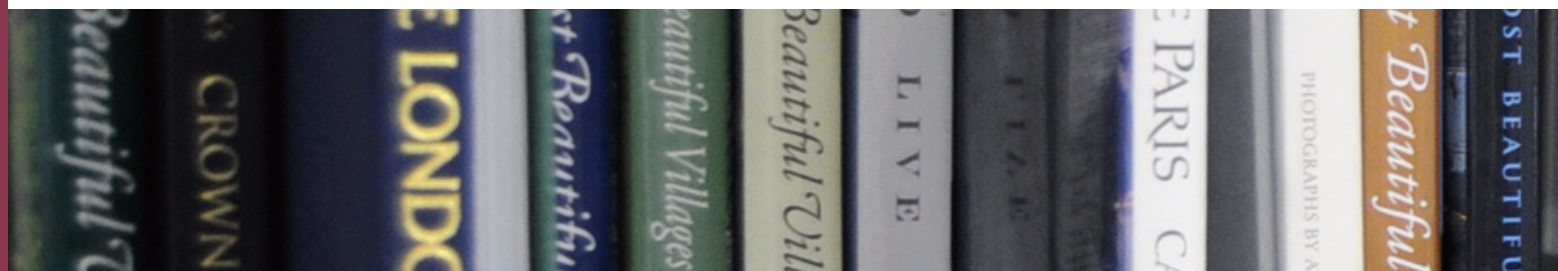
- (D) Connecting D. H. Lawrence to Emily Brontë: Adoration for Nature and the Shadow of "Death"
- (D) How conceptual accessibility affect sentence production: Evidence from Chinese JFL learners with a focus on animacy information

【外国語教育コンテンツ論コース】

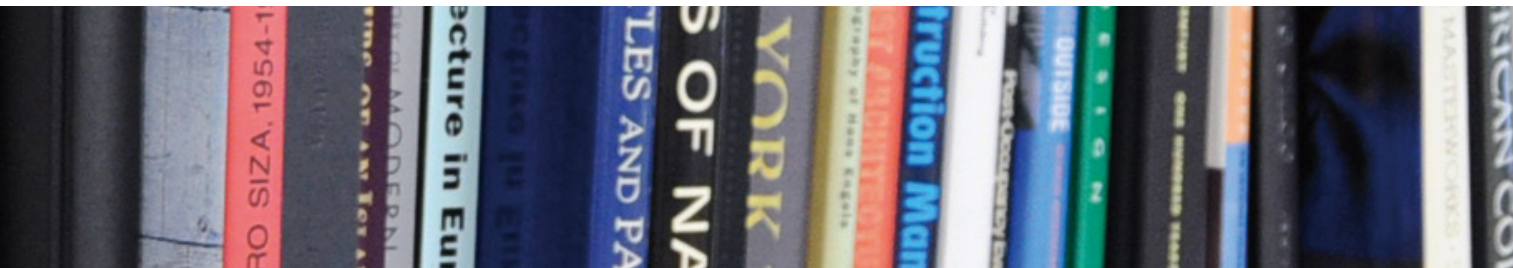
- (D) 日本語破裂音の有声性弁別について
—音響的・知覚的特徴を中心に—
- (D) Experimental confirmation of Japanese Voicing contrasts of Stop consonants: Focusing on Acoustic Characteristics and physical features
- (D) コーパス調査に基づく現代日本語における非和語系語彙の用法解明と日本語教育への応用
- (D) コーパス調査に基づく現代日本語におけるスタンス表出システムの解明と日本語教育への応用：一人称代名詞・文末詞・陳述スタイル・ヘッジの分析
- (M) 日本語アクセントの「おそ下がり」の生成—『日本語話し言葉コーパス』を用いた分析—
- (M) 母語話者・日本人学習者の英作文における原因の表出：コーパスから得た知見の教育的応用
- (MC) 日本人高校生のための重要英語句動詞リストの開発：コーパスを用いた高校生の句動詞使用実態の分析をふまえて
- (MC) 日本語母語話者および学習者による条件表現の使用実態の解明：コーパス言語学の外国語教育への応用を目指して
- (MC) 日本人英語学習者の論文文における熟達要因に関する質的調査

国際文化学研究科教員一覧

ACADEMIC STAFF



コース	氏名	職名	メールアドレス
日本学	板倉 史明	准教授	itakura ■ people.kobe-u.ac.jp
日本学	長 志珠絵	教授	s.osa ■ landscape.kobe-u.ac.jp
日本学	辛島 理人	准教授	karashima ■ people.kobe-u.ac.jp
日本学	昆野 伸幸	教授	nobuyuki ■ port.kobe-u.ac.jp
日本学	寺内 直子	教授	naokotk ■ kobe-u.ac.jp
アジア・太平洋文化論	伊藤 友美	教授	itot ■ kobe-u.ac.jp
アジア・太平洋文化論	貞好 康志	教授	ysd ■ kobe-u.ac.jp
アジア・太平洋文化論	谷川 真一	教授	tanigawa ■ port.kobe-u.ac.jp
アジア・太平洋文化論	深川 宏樹	准教授	fukagawa ■ people.kobe-u.ac.jp
ヨーロッパ・アメリカ文化論	井上 弘貴	准教授	hiro_inouye ■ port.kobe-u.ac.jp
ヨーロッパ・アメリカ文化論	小澤 卓也	教授	ozataku ■ harbor.kobe-u.ac.jp
ヨーロッパ・アメリカ文化論	衣笠 太朗	講師	tkinugasa ■ harbor.kobe-u.ac.jp
ヨーロッパ・アメリカ文化論	西谷 拓哉	教授	takuyan ■ kobe-u.ac.jp
文化人類学	梅屋 潔	教授	umeya ■ people.kobe-u.ac.jp
文化人類学	大石 侑香	講師	yuka ■ diamond.kobe-u.ac.jp
文化人類学	岡田 浩樹	教授	hokada ■ kobe-u.ac.jp
文化人類学	齋藤 剛	教授	t-saito ■ people.kobe-u.ac.jp
文化人類学	下條 尚志	准教授	shimojo ■ people.kobe-u.ac.jp
比較文明・比較文化論	北村 結花	准教授	yuika ■ kobe-u.ac.jp
比較文明・比較文化論	近藤 祉秋	講師	skondo ■ boar.kobe-u.ac.jp
比較文明・比較文化論	田中祐理子	准教授	tanaka.yuriko ■ people.kobe-u.ac.jp
比較文明・比較文化論	塚原 東吾	教授	togotsukahara ■ harbor.kobe-u.ac.jp
比較文明・比較文化論	深町 悟	講師	fukamachi ■ port.kobe-u.ac.jp
国際関係・比較政治論	中村 覚	教授	satnaka ■ kobe-u.ac.jp
国際関係・比較政治論	新川 匠郎	講師	shoniikawa ■ harbor.kobe-u.ac.jp
国際関係・比較政治論	安岡 正晴	教授	yasuoka ■ kobe-u.ac.jp
国際関係・比較政治論	李 昊	講師	lihao ■ people.kobe-u.ac.jp
モダニティ論	石田 圭子	准教授	keikoishida ■ people.kobe-u.ac.jp
モダニティ論	市田 良彦	教授	ucml ■ kobe-u.ac.jp
モダニティ論	上野 成利	教授	ueno ■ people.kobe-u.ac.jp
モダニティ論	鹿野 祐嗣	助教	yujishikano ■ emerald.kobe-u.ac.jp
モダニティ論	松家 理恵	教授	janjur ■ kobe-u.ac.jp
先端社会論	青山 薫	教授	kaoru ■ tiger.kobe-u.ac.jp
先端社会論	小笠原博毅	教授	hiroki ■ kobe-u.ac.jp
先端社会論	工藤 晴子	講師	haruko.kudo ■ people.kobe-u.ac.jp
先端社会論	桜井 徹	教授	sakurait ■ kobe-u.ac.jp
先端社会論	西澤 晃彦	教授	nishizawa ■ people.kobe-u.ac.jp



コース	氏名	職名	メールアドレス
芸術文化論	池上 裕子	教授	ikegami ■ port.kobe-u.ac.jp
芸術文化論	岩本 和子	教授	iwamotok ■ kobe-u.ac.jp
芸術文化論	岡本 佳子	講師	okamoto_y ■ people.kobe-u.ac.jp
芸術文化論	高田 映介	講師	takada.eisuke ■ harbor.kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	石田 雄樹	講師	yishida ■ port.kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	川上 尚恵	大学教育推進機構 講師	kawakami ■ sapphire.kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	小松原哲太	講師	komatsubara ■ port.kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	齊藤 美穂	大学教育推進機構 准教授	msaito ■ people.kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	田中 順子	教授	jtanaka ■ kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	朴 秀娟	大学教育推進機構 講師	sypark ■ aquamarine.kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	藤濤 文子	教授	fumiko ■ kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	南 佑亮	准教授	y-minami ■ people.kobe-u.ac.jp
感性コミュニケーション	北田 亮	准教授	ryokitada ■ port.kobe-u.ac.jp
感性コミュニケーション	巽 智子	講師	tt ■ port.kobe-u.ac.jp
感性コミュニケーション	林 良子	教授	rhayashi ■ kobe-u.ac.jp
感性コミュニケーション	松本絵理子	教授	ermatsu ■ kobe-u.ac.jp
感性コミュニケーション	南本 徹	助教	minamimoto.toru ■ topaz.kobe-u.ac.jp
情報コミュニケーション	大月 一弘	教授	ohtsuki ■ kobe-u.ac.jp
情報コミュニケーション	康 敏	教授	kang ■ kobe-u.ac.jp
情報コミュニケーション	清光 英成	教授	kiyomitu ■ kobe-u.ac.jp
情報コミュニケーション	西田 健志	准教授	tnishida ■ people.kobe-u.ac.jp
情報コミュニケーション	村尾 元	教授	hajime.murao ■ mulabo.org
外国語教育システム論	島津 厚久	大学教育推進機構 教授	shimazu ■ puppy.kobe-u.ac.jp
外国語教育システム論	高橋 康德	大学教育推進機構 准教授	ytakahashi ■ port.kobe-u.ac.jp
外国語教育システム論	濱田 真由	大学教育推進機構 助教	myhama ■ harbor.kobe-u.ac.jp
外国語教育システム論	廣田 大地	大学教育推進機構 准教授	hirotadaichi ■ ruby.kobe-u.ac.jp
外国語教育システム論	保田 幸子	大学教育推進機構 教授	syasuda ■ opal.kobe-u.ac.jp
外国語教育システム論	安田 麗	大学教育推進機構 講師	r.yasuda ■ port.kobe-u.ac.jp
外国語教育システム論	横川 博一	大学教育推進機構 教授	yokokawa ■ kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	石川慎一郎	大学教育推進機構 教授	iskwshin ■ kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	柏木 治美	大学教育推進機構 教授	kasiwagi ■ kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	木原恵美子	大学教育推進機構 准教授	kihara.emiko ■ crystal.kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	グリア・ティモシー	大学教育推進機構 教授	tim ■ kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	朱 春躍	大学教育推進機構 教授	shu_s_y ■ koala.kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	芹澤 円	大学教育推進機構 助教	m.serizawa ■ phoenix.kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	大和 知史	大学教育推進機構 教授	yamato ■ port.kobe-u.ac.jp
先端コミュニケーション論	内海 章	客員教授	utsumi ■ atr.jp
先端コミュニケーション論	住岡 英信	客員准教授	sumioka ■ atr.jp
先端コミュニケーション論	山田 玲子	客員教授	yamada ■ atr.jp

教員アドレスについては、■を@に置き換えてご利用ください。

INVITATION TO THE GRADUATE SCHOOL OF INTERCULTURAL STUDIES



About the Graduate School of Intercultural Studies

Dean's Message

The Graduate School of Intercultural Studies at Kobe University was established in 2007 from what was formerly the Graduate School of Cultural Studies and Human Science. Since the new graduate school shares its name with the Faculty of Intercultural Studies which was established in October 1992 and was succeeded by the Faculty of Global Human Sciences in April 2017, it allows students to learn and research systematically from the undergraduate to the graduate level.

People and culture have continued to blend together as a result of the spread of globalization, particularly following the collapse of divisions created during the Cold War. We ask ourselves how we should understand changes in a globally developing society and what we should make of the significance of those changes. We want to know about changes in phenomena but at the same time ask broad questions about the frameworks through which we view those changes. Above all, there is a pressing need to reconsider thought patterns and recognition based on the nation-state paradigm. Put another way, we should strive to redefine the paradigms of the humanities and social sciences.

The education and research in our graduate school adopts a cultural standpoint to explore transformations and continuities in the contemporary world. Intercultural Studies is not a single discipline. It is a new area of research that approaches the common theme of how various cultures exist and relate to each other across a number of different disciplines. The fifteen courses that make up our graduate school show that providing viewpoints from various disciplines subjectively promotes that very theme.

Ours was the first national university in Japan to have a graduate school specifically designed to advocate intercultural studies. It focuses on cultural standpoints while critically examining the effectiveness of such frameworks and strives to break through to leading-edge research fields and analytical methods.

The door is open for you to develop new frameworks for knowledge. We sincerely hope to work together in this endeavor with intelligent, inquisitive young researchers like you.



Professor Fumiko Fujinami
Dean, Graduate School
of Intercultural Studies

- (1) Pursuit of cultural research that understands culture as a complex entity and takes intercultural relations as its perspective.
- (2) Dynamic research into culture as a complex entity with attention to intercultural interaction in such forms as conflict, fusion, and interchange.
- (3) Multifaceted studies of cultural transformations amid the globalization of contemporary society.
- (4) Development of advanced communication research related to language and information.
- (5) Execution of a shift from monocular, single paradigms that apply over-simplistic dichotomies such as central / peripheral, civilized / uncivilized, and advanced / backward to pluralistic, multiplex paradigms, and the creation of research methodologies adapted to the cultural dynamics of contemporary society.

Admission Policy, Diploma Policy

	Admission Policy	Diploma Policy
Master's Program	<p>The objective of the Kobe University Graduate School of Intercultural Studies is to cultivate individuals who have a deep understanding of intercultural phenomena and flexible communication skills, as well as strong scholarship and creative research skills.</p> <p>In view of this educational goal, the Graduate School seeks students who have the following characteristics.</p>	<p>Degree: Master of Arts</p> <p>The Graduate School of Intercultural Studies awards degrees as follows, based on Kobe University Diploma Policy.</p> <ul style="list-style-type: none"> •Students are enrolled in a master's program at the Graduate School of Intercultural Studies for a period of two years or more. They must obtain the prescribed credits required to complete the program, receive the required research guidance, and pass final examinations as well as a review of their master's thesis or the results of their specific research task. It may be possible for students with excellent results to complete their studies in a shorter period. •Prior to completing postgraduate study, students are expected to acquire the following skills in addition to the capabilities set out in Kobe University Diploma Policy.
	<ul style="list-style-type: none"> •Have a keen interest in understanding culture as a complex entity and pursuing multifaceted studies that convey the richness of intercultural relations. 	<p>Department of Cultural Interaction</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. The ability to research relationships between different cultures from multiple angles while understanding that cultures are diverse and mutually affect one another, resulting in cultural transformation. 2. The ability to carry out interdisciplinary research informed by a high degree of specialization.
	<ul style="list-style-type: none"> •Have a keen interest in understanding the dynamics of language and information communication and addressing the various problems that confront contemporary global society. 	<p>Department of Culture and Globalization</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. The ability to tackle various issues that today's global society is facing, with a deep understanding of the dynamics of linguistic communication and information technology. 2. The ability to carry out interdisciplinary research informed by a high degree of specialization.
	<ul style="list-style-type: none"> •Have a keen interest in carrying out interdisciplinary research with high standards of expertise. 	
Doctoral Program	<p>The objective of the Kobe University Graduate School of Intercultural Studies is to cultivate individuals who have a deep understanding of intercultural phenomena and flexible communication skills, as well as strong scholarship and creative research skills.</p> <p>In view of this educational goal, the Graduate School seeks students who have the following characteristics.</p>	<p>Degree :Doctor of Philosophy</p> <p>The Graduate School of Intercultural Studies awards degrees as follows, based on Kobe University Diploma Policy.</p> <ul style="list-style-type: none"> •Students are enrolled in a doctoral program at the Graduate School of Intercultural Studies for a period of three years or more. They must obtain the prescribed credits required to complete the course, receive the required research guidance, and pass final examinations as well as a review of their doctoral thesis. It may be possible for students with excellent research results to complete their studies in a shorter period. •Prior to completing postgraduate study, students are expected to acquire the following skills in addition to the capabilities set out in Kobe University Diploma Policy.
	<ul style="list-style-type: none"> •Have a keen interest in clarifying cultural phenomena, understanding the dynamics of culture as a complex entity, and exploring an advanced field of cultural research. 	<p>Department of Cultural Interaction</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. The ability to independently explore cutting-edge fields in cultural research, investigating the structure and dynamics of various cultures that are transformed as they mutually affect one another in diverse ways. 2. The ability to carry out cross-disciplinary research informed by a high degree of specialization.
	<ul style="list-style-type: none"> •Have a keen interest in pursuing various language and information communication issues and conducting multifaceted studies focused on the increasingly globalized modern society. 	
	<ul style="list-style-type: none"> •Have a keen interest in carrying out cross-disciplinary research with superior expertise. 	<p>Department of Culture and Globalization</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. The ability to research the globalized modern world from multiple angles, addressing various issues in linguistic communication and information technology. 2. The ability to carry out cross-disciplinary research informed by a high degree of specialization.

Organization of the Graduate School of Intercultural Studies

15 specialized courses for interacting with society and living in the world

Departments and Divisions

When comparing the nature of cultures in modern society in order to address modern issues such as cultural confrontation and conflicts, it is essential to develop the ability to examine cultural trends in an increasingly globalized world. To do this, we have to examine both the cultures of different regions and cross-cultural interaction.

Accordingly, the Graduate School of Intercultural Studies has two departments – *Cultural Interaction*, for multifaceted commentary on the nature of intercultural interaction based on the results of cultural research in different regions, and *Culture and Globalization* to investigate the contemporary cultural phase generated by globalization.

Consisting of the Area Studies Division for interdisciplinary studies regarding region-specific cultural traits and cultural metamorphosis, and the Intercultural Communication Division for multifaceted research on the reality of cross-cultural contacts, conflicts and interactions, the Cultural-Interaction Department aims for (1) understanding of cultures of different regions, (2) understanding of cross-cultural relations and interactions, and (3)

development of cross-cultural communication abilities.

The Culture and Globalization Department consists of the Contemporary Culture and Society Division for comprehensive research into contemporary social and cultural circumstances amid the erosion of modern Western principles accompanying globalization, the Human Communication and Information Science Division for investigation of issues involving verbal and non-verbal communication and use of diverse information media, and the Second Language Education Division for advanced research concerning second language education and production of outstanding practitioners in this field. In addition, there is also a joint research group for Advanced Communication in the Doctoral Course in cooperation with the Advanced Telecommunications Research Institute International (ATR). With these divisions and courses, we aim to (1) investigate acculturation brought about by globalization and the establishment of new public culture, (2) develop advanced global communication, and (3) research foreign language education for the global era.

Department	Division	Course
Cultural Interaction Multifaceted elucidation of the nature and attributes of intercultural interaction based on the results of cultural research in different regions	Area Studies Interdisciplinary studies regarding region-specific cultural traits and cultural metamorphosis	Japanology Asia-Pacific Culture Studies European and American Culture Studies
	Intercultural Communication Diverse exploration of the actual status of intercultural contact, confrontation, and interchange	Cultural Anthropology Comparative Studies of Civilization and Culture International Relations and Comparative Politics
	Contemporary Culture and Society Comprehensive research into contemporary social and cultural circumstances amid the erosion of modern Western principles accompanying globalization	Modernity Studies Contemporary Social Issues Art, Culture and Society Studies
	Human Communication and Information Science Investigation of issues involving verbal and non-verbal communication and use of diverse information media	Linguistics and Communication Studies Human Communication Computers and Communication
Culture and Globalization Elucidation of the contemporary cultural phase generated by globalization	Second Language Education Advanced research concerning second language education and production of outstanding practitioners in this field	Systems of Second Language Education Contents in Second Language Education
	Joint Research Group (Doctoral Program)	Advanced Communication

Master's Program – Two Learning Tracks to Meet Your Aspirations

Develops people who can work in an international society and new researchers who can lead the era

– Different styles for different goals from start to finish

	Career Enhancement Track	Researcher Track
Entrance Exam (General Admission, Special Selection for Adult Applicants, and Special Selection for Foreign Students)	1. Test of basic subjects You must choose one of the following subjects; a foreign language, classical Japanese literature, computer science, or (for non-Japanese applicants only) Japanese. However, the subjects you can choose from also depend on the course to which you are applying, so make sure to check the application guidebook for further details. 2. Test of major subject 3. Oral examination	
Curriculum	<ul style="list-style-type: none"> • Seminars to develop high-level skills in foreign language, information handling and presentation • Students mainly take Special Lectures, which are given to a small group in an interactive manner rather than a one-way lecture. • Students who have earned the required credits and submitted a research report can obtain master's degree. 	<ul style="list-style-type: none"> • Tutors provide quality individual guidance (tutorial). • Students mainly take Advanced Expertise Seminars to build basic skills required for a researcher. • Students may take Special Seminars in the doctoral program. • Students shall submit a master's thesis or master's folio (a combination of achievements).
Future career	Students will obtain master's degree and work in international fields as specialists.	The Researcher Track is for students who intend to take the entrance exam to the doctoral program and proceed to the program. Students aim to become researchers or high-level specialists.

Two Educational Tracks

The program has a Career Enhancement Track and a Researcher Track. Applicants by General Admission and Special Selection for Adult Applicants should select one of these two tracks when applying for admission. Applicants by Special Selection for Foreign Students will have the opportunity to select one after enrollment.

Career Enhancement Track

This track caters to students who intend to enter the workforce after completing the master's program. By acquiring broad expertise and practical applied skills, students seek to develop their career to a higher level. Students can earn the master's degree by acquiring the requisite credits in courses centered on special lectures and by submitting a master's research report appropriate for their career design.

Researcher Track

This track caters to students who intend to continue on to enter the doctoral program. The track offers a curriculum designed to develop researchers and high-level specialists. To complete the track, students are required to take requisite credits in courses centered on advanced expertise seminars and to submit a master's thesis or a master's folio.

Academic Skill Seminars

The objective of the seminars is to effectively learn methods and techniques and acquire other academic skills required for research in various fields.

- Computer Skills Development
- Academic Communication (English)
- Academic Writing (English)
- Academic Writing (Japanese)
- Social Research Methods
- Ethnographic Fieldwork
- Research Methods for the Behavioral Sciences

Master's Folio

The master's folio is comprised of multiple research products that are loosely tied to a single theme, and which can be submitted in place of a master's thesis. As a master's folio does not have to be in the form of a single thesis, many diverse research products that would previously not have been accepted as a master's thesis – compositions, research reports, – are accepted as part of a folio. This makes it easier to conduct applied research that is relevant to one's work or workplace, and because the work is divided up and presented on numerous occasions, it also allows for systematic writing and research.

Doctoral Program – Developing Independent Researchers

For deeper study in a research field

– flexible support to obtain a PhD in three years

	Coursework Program
Research theme	Theme suited for the research field of the course
Research style	Individual research
Research guidance	The entire teaching staff, especially the advisor, provides support.
Process to obtain PhD	<p><1st year> Present a concept in a joint seminar of the course, publish an academic article and submit a foundational thesis.</p> <p><2nd year> Publish an academic article, make a presentation at a conference and submit a preparatory doctoral thesis.</p> <p><3rd year> Submit part of a thesis draft to a joint seminar of the course once a month and receive guidance and support from the whole teaching staff. Submit a doctoral thesis.</p>
Expected achievements	Achievements of academic research where free thinking and creativity are required

Career and Professional Development

– Career Paths to the World

Master's Program

Cultural Interaction Department

- As a specialist

- Specialist at an international organization such as the United Nations or JICA
- Official of various public and private organizations that plan introductions to Japanese culture and exchanges
- Cultural planner at a museum
- Junior/senior high school teacher (English) with a high level of expertise
- Planner for the cultural exchange programs of a local government unit or company
- Person in charge of training in a foreign-affiliated company or joint venture
- Leader of a regional NPO taking the lead in cultural activities and cross-cultural understanding

- As business professional with the ability to take practical actions

- Employee at a foreign-affiliated company or joint venture
- Employee at a trading company or other type of company
- Personnel for overseas expansion of a Japanese company

Culture and Globalization Department

- As a specialist

- Cultural policy specialist or art manager with knowledge of music, fine arts and other types of arts
- Journalist or government employee who addresses the various issues of changing modern cultures such as gender and public nature
- Junior/senior high school teacher (English) with a high level of expertise
- Employee/teacher at a language education company
- Editor of language education materials
- Researcher/specialist/advisor at a foreign student center
- Japanese language teacher
- Interpreter/translator
- Employee of a language/IT corporate laboratory

- As a business professional with an ability to take practical actions

- Software engineer
- System engineer

Doctoral Program

Leading researchers who promote “international cultural studies” in the world

- Researcher at an international organization/research institute
- Researcher at a national/public/corporate laboratory
- Teacher at a college/junior college/specialized vocational high school

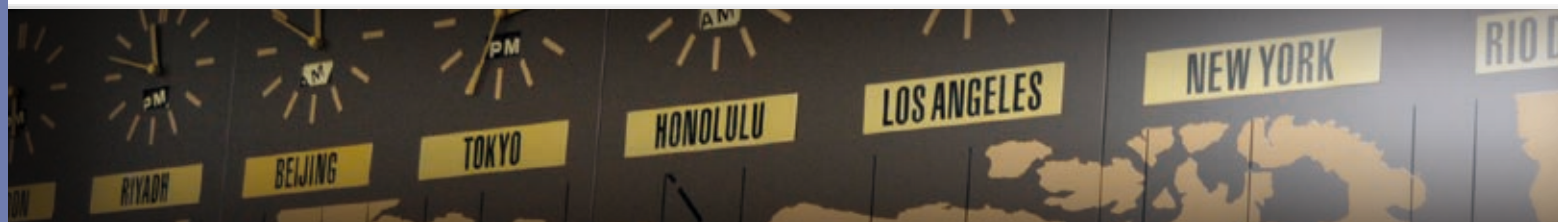
Degrees that can be obtained

- Master's Program
- Master's degree (Master of Arts)
- Doctoral Program
- Doctor's degree (PhD)

Qualifications that can be obtained (Master's Program)

- Junior High School Specialized Teacher's Certificate (English)
- Senior High School Specialized Teacher's Certificate (English)

15 SPECIALIZED COURSES



Japanology

In the Japanology Course, we explore human activities in Japan from a cultural point of view while positioning Japanese culture relative to various cultures in the world. We aim to address, jointly study and learn an extremely wide range of cultural and social issues from ancient to modern times concerning literature, arts, religion and philosophy. The course also provides opportunities to improve professional skills for reading ancient papers and reviewing documents, which are often required to deepen understanding of Japanese culture and society. Moreover, the course provides specialized training to students so that they can discuss Japanese culture and society by an academic process without being limited by popular views of Japan. Our objective is to nurture individuals who can discuss Japan with specialized skills and high-level academic capabilities.

Students' research themes

Master's course: Research on gender equality program of Kobe city; A study on the source History of *Onsenji-temple* in Kinosaki; A research on the thoughts of the flower arrangement practice in the Edo period; Images of Japanese performing arts displayed in journals for national propaganda; A Comparative Study of Horror Expressions and Characterization of Female Protagonists in Horror Games; A historical study on the practice of *gagaku* at Kumamoto-Han domain.

Doctoral course: Ethnographical study on the folk music and dance for rice-planting; A study of folk literature in connection with feudal lords in the early modern era; A study on cultural policy on radio broadcasting in the post-war Okinawa under US military occupation; A study on *iemoto* system in *cha-no-yu* (tea ceremony) since the modern era; A study of the hygiene problems in East Asia in the 19th century: focusing on an open port Incheon, Korea; A study of newspaper reports on Tottori earthquake in 1943; Cinema that "Records" an Author: The "New Wave" and the Avant-Garde Art Movement of the 1950's.

Teaching staff

Fumiaki ITAKURA, Associate Professor

Subjects: Japanese Visual Arts

Research fields: Japanese film studies from international and historical viewpoints.

Shizue OSA, Professor

Subjects: Contemporary Japanese Society

Research fields: Modern Japanese history, specifically the War memory and Occupied Japan.

Masato KARASHIMA, Associate Professor

Subjects: Japanese Social History

Research fields: Japan-Southeast Asia relations, American philanthropy, Transwar studies.

Nobuyuki KONNO, Professor

Subjects: Japanese Language and Culture

Research fields: Japanese intellectual history, specifically on nationalism from the 1920s to the 1940s with an awareness of history and religion.

Naoko TERAUCHI, Professor

Subjects: Japanese Performing Arts

Research fields: Japanese traditional music and performing arts in relation to various cultures in Asia and other parts of the world.

Asia-Pacific Culture Studies

Going through major changes in economy and international exchanges, the Asia-Pacific region is rapidly growing. In this sense it is one of the most active regions in the world. However, just following the superficial flow of such development is not enough to understand the characteristics of the region. East Asia, Southeast Asia and the Pacific Area all have extremely complex and diverse traditions, and have been Transformed by the wave of globalization. Therefore, in order to have a deep understanding of the characteristics of the region, we need to conduct specialized in-depth studies on many aspects including social structure, religion, history and economic circumstances. This course has a well-established guidance system where professors with diverse specialties teach research methods in classes on a broad range of research fields.

Students' research themes

- Studies on Thai wives who have Japanese husbands
- Representations and practices of Ainu Culture today ---Case studies of cultural activities in Shiraoi town
- Historical studies on the influence on the Japanese image in Australia from the early development of Australian-Japan relationships
- Naxi native official surnamed Mu in Lijiang, Yunnan during the Ming Period 14-17 centuries
- College students' conflicts about love and sex in Indonesia
- Studies on secretaries and the training of secretaries in Outer Mongolia in the Qing period
- A study about the Ownership of Farmlands and its Contracts in Inner Mongolia during Manchu Qing Period: Cases in Guihuacheng Tümed Banner (12th Asia Pacific Research Prize Winner article)

Teaching staff

Tomomi ITO, Professor

Subjects: Culture and Society in Southeast Asia

Research fields: Thai studies, studies on modern social history, Buddhism and women

Shinichi TANIGAWA, Professor

Subjects: Society and Economy in China

Research fields: Chinese politics and society

Yasushi SADAYOSHI, Professor

Subjects: National Integration in Southeast Asia

Research fields: Modern history of Indonesia, studies on overseas Chinese

Hiroki FUKAGAWA, Associate Professor

Subjects: Culture and Society in Oceania

Research fields: Cultural anthropology, social anthropology, personhood and sociality

European and American Culture Studies

In the European and American Culture Studies Course, we conduct multifaceted and comprehensive education and research on European and American societies and cultures, which have been playing a central role in world politics, economy and culture in modern times. Although the cultures developed in these regions have spread worldwide, it is being critically reexamined. Moreover, there has recently been progress on studies on the societies and cultures in Europe and America that only played a peripheral role in establishing the modern era. Based on these past achievements, we reexamine Western thoughts and values that are deeply rooted in our modern lives and consciousness, and seek their meanings in the 21st century. We want to reveal the unknown depths of Europe and America through a course of concrete studies in a wide range of fields including history, language, religion, philosophy, literature, art and society.

Students' research themes

The "German Legends" of the Grimm Brothers, A Study on William Morris, Acceptance of Victorian Culture in "Harry Potter", Modern French Fashion, Czech Romani Literature, Czech Baroque Studies, A Study on C. Bronte Establishment of the Mirandese language, Analysis of Visual Gags in I Love Lucy, Stereotype of the Japanese People in Hollywood Movies, Problems of Italian Immigration in America, Pacifism, Isolationism and Populism in the United States of America during Interwar Periods, Japan-Russian Relations through the Imperial Families, Belarusian Nationalism, Chinese Immigrants to the US.

Teaching staff

Hirotaka INOUE, Professor

Subjects: Multiethnicity in North America

Research fields: American studies with a focus on the history of intellectuals in the United States.

Takuya OZAWA, Professor

Subjects: Latin America and Global History

Research fields: Latin America, especially the modern history of Central America, ethnic issues and culture concerning export crops that impact Central American society.

Takuya NISHITANI, Professor

Subjects: Literary and Visual Culture in North America

Research fields: American literature, especially Herman Melville, Nathaniel Hawthorne, and other writers of the American Renaissance; film studies, especially adaptation studies and comparative studies in the narrative representation in film and literature.

Taro KINUGASA, Lecturer

Subjects: History of German and Central-Eastern Europe

Research fields: Modern and contemporary history of German and central-eastern European borderlands, the separatist movement and migration in Silesia.

Cultural Anthropology

The Cultural Anthropology Course specializes in various themes and regions providing a high-quality education and research curriculum. Today's various cultural issues are characterized by the dynamism of the conflict, division, integration, reconciliation, generation and extinction of various cultures and values under the influence of globalization. In the course, we consider methods of allowing dialogues among various cultures based on deep intercultural understanding, by viewing the world from down-to-earth research investigation field work with broad and flexible perspectives. We welcome students who wish to be internationally successful specialists and researchers and foreign students who wish to conduct high-level anthropological studies.

Students' research themes

Master's program: cargo cult, Kazakh identity, tourism, multicultural orientalism, post-Soviet period, postcolonial, status of women in China, Boze in Akuseki Island, local Hawaiian, Peruvian living in Japan, primitive art, kula trade, fare trade in Bangladesh, Education of Nation-State, Over Sea Korean, International marriage, Vietnamese in Japan, Cultural Heritage, World Heritage, Muri-culturalism in Japan, Nikkei in Argentine, Korean American, Hispanic, bilingualism, Chinese American, Caribbean in America, Brooklyn Carnival, Native Canadian, sustainable tourism, ethnic media, multiracial in America, ethnic identity, South Americans in Japan, Nikkei Brazilian, Nikkei Hawaiian, life history, diaspora, transnationalism, Dominican baseball migrants, Pentecostalism in Jamaica, Rastafarian, Christianity and contextualization, development and women in Mexico, participation and development
Doctoral program: cultural authenticity, Aneityum of Vanuatu, historical anthropology, refugee, Karenni, homestay, the Experiment in International Living Care and Family of Korea, Social Change of Korean Village in China, Feminization of Migration, Over-Sea Chinese in Vietnam, Anthropology of Tourism on Vietnam, masculinity, gender in the Caribbean, popular music, reggae, soca, dancehall, identity politics, mixed race, 'Hafu', representation

Teaching staff

Kiyoshi UMEYA, Professor

Subjects: Ethnology

Research fields: Social anthropology, East African ethnography, studies on witchcraft and sorcery, Japanese folk-religion, anthropology of development

Yuka OISHI, Lecturer

Subjects: Social Anthropology

Research Fields: Ecological anthropology, environmental anthropology, global history, subsistence, material culture, Siberian ethnography, Arctic area studies

Hiroki OKADA, Professor

Subjects: Ethnographic Research

Research fields: Societies in East Asia and Vietnam, re-organization of families and religions in the process of colonization and modernization, minorities and multiculturalism, space anthropology.

Tsuyoshi SAITO, Professor

Subjects: Cultural Anthropology

Research fields: Social anthropology, Middle Eastern ethnography, anthropological Islamic studies, Morocco

Hisashi SHIMOJO, Associate Professor

Subjects: Contemporary Cultural Anthropology

Research Fields: Historical anthropology, Vietnamese and Southeast Asian studies, water frontier, wet zomia, ethnicity, religion, hybridity, migration/refugee, war, socialism, survival

Comparative Studies of Civilization and Culture

In this course, we deal with various aspects of civilization and culture that transcend the boundaries of various matters such as geography and language, and conduct comparative studies from a historical point of view concerning the dynamism of the transformation brought about by the transmission and propagation of such aspects with a focus on scientific and technical civilization and linguistic culture. With the asymmetric nature of advantages and disadvantages in civilization and culture in mind, we focus on such aspects as resistance, prejudice and creation underlying the phenomena considered to be unilateral acceptance, and aim to deepen our understanding of the interactions of such aspects and the bidirectionality of transformation based on the recent studies.

Students' research themes

Master's program: Foreigners in Meiji Japan, Text-Image Relations in the Classics, Gardens in Myths, View of Nature, Environmental Issues, Food and Toxic Chemicals, Whitehead's Philosophy of Organism, Xu Guang-qi's View on Mathematics

Teaching staff

Yuika KITAMURA, Associate Professor

Subjects: Translating Classical Literature

Research fields: The reception of classical Japanese literature in modern times with a focus on the "Tale of Genji."

Togo TSUKAHARA, Professor

Subjects: Science, Technology and Society, etc.

Research fields: Science history and technological societies.

Shiaki KONDO, Lecturer

Subjects: Cultural Anthrogy; Alaska Native Studies

Research fields: Alaskan Athabascans and human-animal relationship, multispecies ethnography, and Christianity.

Yuriko TANAKA, Associate Professor

Subjects: Philosophy and History of Modern Science.

Research fields: Epistemology (philosophy of human scientific knowledge), 19th & 20th centuries' history of atomic physics and biomedicine.

Satoru FUKAMACHI, Lecturer

Subjects: Trans-border Literature

Research fields: British literature, military science fiction (especially Invasion literature), propaganda studies, and British near-future war fiction from late 19th century to WWI.

International Relations and Comparative Politics

We welcome students who are looking for chances to study Japanese politics and foreign affairs. Professors of this department are specialists in international relations, international political economy, security studies, public policies and urban administration. The area of research fields of graduate students are varied covering such countries as Japan, China, India, Europe, America, Middle East, etc. The staff, along with graduate and undergraduate students, are actively engaged in research in line with the international standard. Students can master a variety of methodologies and approaches through team teaching run by five academic staff. Please feel free to contact us if you have any questions. This department offers foreign students the opportunity to study the internal politics and diplomacy of their home country from a comparative perspective.

Students' research themes

Thematic approach: Regional integration, Preventive diplomacy, Conflict and Peace building, Security, Ethnopolitics, Party politics, Democratization, Welfare state, Educational policy, Transnational relations, Contemporary history of International relations

Regional approach: EU studies, French politics, British politics, German politics, Spanish politics, Italian politics, Politics in Northern Europe, American politics, Politics in the Middle East, Politics in ex-Yugoslavia, Indian politics, Sino-Japanese relations, Sino-American relations, Politics in the Mediterranean

Teaching staff

Satoru NAKAMURA, Professor

Subjects: Regional Politics

Research fields: Preventive diplomacy in the Middle East, Middle Eastern political economy, Saudi Arabian history

Sho NIKAWA, Lecturer

Subjects: Political Institutions

Research fields: Making and breaking governments in democracies, politics in Germany and Europe, political science methodology (especially qualitative and multimethod research)

Maraharu YASUOKA, Professor

Subjects: Contemporary Politics

Research fields: Comparative public policy, American politics and government, urban politics contemporary modern American politics (especially the federal system and urban issues)

Hao LI, Lecturer

Subjects: Comparative Politics

Research fields: Modern and contemporary Chinese politics, authoritarian politics, party factions, international relations in East Asia



Modernity Studies

The basic framework of our contemporary society consists of three distinct realms: the techno-economic structure, the polity, and the culture. The ruling principles of these three realms, such as functionary rationality, the idea of equality, and expression & realization of "self," originated in Western Europe with the arrival of the modern period. Today, however, these principles are proved to be discordant and are being shaken to their roots along with the progress of globalization. This situation demands a re-examination of the meaning of "modernity" and an accurate reading of just where the world is (should be) heading in this ongoing upheaval. The Modernity Studies Group covers a wide range of disciplines from social thought, economic thought, and political thought to aesthetics, literature and visual arts. Through careful analysis of the prevailing principles of the three realms of the modern world, we aim to cultivate firmly grounded capabilities of cogitation that are required for tackling actual issues in our society.

Students' research themes

Master's program: M. Foucault and Hermine Barbin, Peter Berger's idea of "everyday" and religion, Alfred Schutz's idea of "relevance"

Doctoral program: Ernst Junger, "technology," Niklas Luhmann, social system theory, Herbert Spencer, modernization of Japanese society, D. H. Lawrence, eco-criticism

Teaching staff

Keiko ISHIDA, Associate Professor

Subjects: Cultural Discourse

Research fields: Aesthetics and history of art theory. I conduct studies under such themes as the relations between art and politics in modern times and the artistic communication with others. [My research papers include "Gestalt and <Art – Political Community>" ("Theory of Criticism and Social Theory 1: Aisthesis," Ochanomizu Shobo), etc. Her books include "Politicization of Aesthetics: Modernist Poets and Fascism" (Keio U. P.)]

Yoshihiko ICHIDA, Professor

Subjects: Modern Economic Thought

Research fields: Social thought. I study philosophical segments of politics, economy and culture, with a focus on the contemporary French thought of Althusser, Foucault and Deleuze. [I have published "Althusser: Philosophy of a Connection."]

Naritoshi UENO, Professor

Subjects: Modern Political Thought

Research fields: History of political and social thought. I analyze such key concepts as "violence," "liberty" and "public sphere" in the form of social philosophy, focusing on the history of thought concerning the philosophers of the Frankfurt School including Horkheimer and Adorno. [I have published "Frontier of the Thought – Violence" (Iwanami Shoten).]

Yuji SHIKANO, Assistant Professor

Subjects: Modern Social Thought

Research fields: Contemporary French philosophy, history of philosophy, psychoanalysis. I study the history of philosophy and psychoanalytic theory with a focus on the philosophy of Gilles Deleuze, considering the social and political situation at that time. [I have published "Study and Commentary on Gilles Deleuze's Logic of Sense: event, amor fati, and permanent revolution" (Iwanami Shoten).]

Rie MATSUYA, Professor

Subjects: Cultural Representation

Research fields: English literature and philosophy. I explore the contemporary meanings of Romanticism with a focus on the views of nature and sympathetic imagination. [I have published "Keats and Apollo: Ketas' Poems and Greco-Roman Mythology" (Eihosha).]

Contemporary Social Issues

The interaction of humans with nature has been seriously undermined and is becoming increasingly complex in modern society. The objective of the "Contemporary Social Issues" course is gaining understanding of contemporary society through an interdisciplinary approach that bridges the humanities and social sciences in exploring leading issues in modern society. For example, we analyze the changes in thinking surrounding nation states, families and individuals from the perspective of gender theory to capture socially constructed human relations; envision an equitable solution to global challenges such as overpopulation, absolute poverty, human-rights violation, climate change and seek to understand human nature and society in a multicultural world faced with informatization of the consumer society facilitated by innovation in media technology. The "Contemporary Social Issues" course disentangles these conflicting problems theoretically and provides a means of tackling them realistically.

Students' research themes

- Gender division of labor in the home in urban China
- Euthanasia seen from the perspective of the right to self-determination
- Why is the sex selection of a child unacceptable?
- Racism in dance hall reggae
- A sociological study of "created communities"
- Urban youth subcultures in Japan: The changing perception of public space with reference to the case of parkour
- NPO/NGO network media: Is accessing the public sphere possible through the Internet?
- Occupation and sexuality: GHQ's policy-making on prostitution (Doctoral dissertation)
- Feminism as relation: From the perspective of interaction between images, individuals and methodology
- Changes of heart and the development of moral individualism (Doctoral dissertation)

Teaching staff

Kaoru AOYAMA, Professor

Subjects: Gender and Society

Research fields: Sociology, migration, gender and sexuality. I am also interested in issues such as globalization, multiculturalism, social exclusion and inclusion, the right to intimacy and representation. She is pursuing a combination of theoretical and empirical research methodologies to look into phenomena that cause changes across public and private lives such as immigration, care / sex workers, same-sex marriage, and gender identity "disorder."

Hiroki OGASAWARA, Professor

Subjects: Media and Cultural Studies

Research fields: I am studying sociology and cultural studies. I am critically examining the relationship between multicultural capitalism and racism especially in the fields of media and sport from empirical, theoretical and historical perspectives.

Haruko KUDO, Lecturer

Subjects: Norms and Cultures

Coming from transnational sociology, my research focuses on the relationship between international migration and gender and sexuality, particularly the norms of sexuality in refugee and forced migration. Having worked in the humanitarian field, I am also interested in the issue of violence within humanitarian assistance/activities and the power relations between humanitarian workers and beneficiaries.

Tetsu SAKURAI, Professor

Subjects: Contemporary Jurisprudence

Research fields: My specialty is legal philosophy; I am particularly engaged in "global justice," i.e., how we should understand the meaning of national borders when we address global issues such as absolute deprivation, economic disparities, human rights violations and environmental pollution. I am now working on conflicts between universal human rights and national sovereignty that contemporary large-scale immigration raises.

Akihiko NISHIZAWA, Professor

Subjects: Contemporary Social Theory

Research fields: I am studying sociology and urban studies. I have been dealing with contemporary social problems, focusing on the life-world and the identity of the urban poor confronted with social exclusion. [My recent books include *The Sphere of Poverty: Who is excluded?*, Kawadeshobo Shinsha, etc.]

Art, Culture and Society Studies

Art and Culture Theory Courses are configured from an arts and culture environment system and content-based arts and culture. Research is conducted on fine art (painting), literature, performing arts (music, opera, theater), and fashion art and how they are related to society.

In content-based arts and culture, social awareness and the worldview as reflected through analysis of artwork are considered. In the arts and culture environment system, arts management connects the arts and society examining and the grand design of cultural policies, considering factors such as the right of easy access to art and actual cultural facility management from an international perspective.

In this course, we welcome candidate students, regardless of their undergraduate major, who are interested in art and supporting its environment as well as those who are keen to undertake specialist learning.

Students' research themes

Master's program: Local community, Public theater organizational management, Network formation between non-profit organizations, Community art, Art project in sojin area Social and Cultural Center in Berlin, Civic activities and cultural policy in Sweden, Protection and application of cultural heritages: historic sites of France and China, City space improvement in Paris, Congolese Diaspora in Belgium, Indie bands of Japan and Korea, Church building during the Russian Imperial Period, Japonism, Tadamasa Hayashi, French Impressionist painter Gustave Caillebotte, French Women Writer, Japanese avant-garde calligraphy and abstract expressionism painting, Women and modes in France, Japanese Street Fashion.

Doctoral program: Cultural Policy and social inclusion, Modern advertising in Japan, Daumier and the modern city of Paris, Acceptance of modern French music in prewar Japan, Formation of Japanese ceramics collections in France and the trade between Japan and France, Kenji Miyazawa and the optics, Cultural policy in Singapore.

Teaching staff

Hiroko IKEGAMI, Professor

Subjects: Modern and Contemporary Art Studies

Research fields: I specialize in post-1945 American art and its global impact, but I also conduct research and writes about postwar Japanese art. I am currently working on post-WWII cultural exchange between the United States and Japan and its relationship to cultural diplomacy in the Cold War period.

Kazuko IWAMOTO, Professor

Subjects: Art and Multicultural Society

Research fields: My research interests are French-speaking culture, particularly 19th century French literature and the problems of cultural identity and cultural policy in neighboring multilingual Belgium.

Yoshiko OKAMOTO, Lecturer

Subjects: Modernism in Art

Research fields: My main interest is theater studies, particularly Central and Eastern European operas and dramas at the turn of the twentieth century. I am currently analyzing Hungarian music theater works and the process of changes and expansion of their performances.

Eisuke Takada, Lecturer

Subjects: Contemporary Cultural Policy

Research fields: I specialize in the 19th-century Russian writer and playwright Chekhov. My research focuses on the relationship between literature and science, and the problems confronting humanity. I am also interested in contemporary Russian literature.

Linguistics and Communication Studies

Rather than a mere means of communication to convey concepts and messages to another party, "language" is also closely related to culture and human cognition, thinking and customs. This course seeks for an effective method of teaching Japanese as a second language based on comparative and contrastive analysis related to language structure and language usage. Language and cultural analysis and methodologies are developed for second language acquisition and translation/interpretation, and we are working on solving the problems of cross-cultural communication, which is becoming essential with the progress of globalization. This course aims to train those who have education and research abilities through various lectures and exercises related to verbal communication leading from basic to advanced levels.

Students' research themes

Master's program: Fillers in Japanese and French, Persuasion and Rhetoric, Words written in Katakana, Translation of onomatopoeia in comics, Bilingualism, Social aspect of Japanese language education.

Doctoral program: Compound verbs, Rhetoric of fiction, Free indirect speech and stylistics, Contrastive study of verbs in Japanese and Chinese, Acquisition of L2 morphosyntax, Historical study of Japanese language education, Effects of corrective feedback in the learning of L2 Japanese *ni*, *de*, *o*.

Teaching staff

Yuki ISHIDA, Lecturer

Subjects: Usage-based Linguistic Typology

Research fields: My research interest is the analysis of French literature in terms of linguistics and narratology. I am working on ideological and cultural issues such as self-identity, happiness, translation and Cross-cultural understanding. My current research deals with self-narrative and happiness of self-narrative.

Naoe KAWAKAMI, Lecturer

Subjects: Teaching Japanese as a Second Language (Practical application)

Research fields: My research field is the historical study of Japanese language education. In particular, I am interested in the historical progress of the Japanese language in Japan and China. By analyzing Japanese learning and teaching from a historical perspective, I explore the significance, role and status of Japanese language education in society. I am also interested in studying training for non-native Japanese teachers.

Tetsuta KOMATSUBARA, Lecturer

Subjects: Rhetorical Communication Theory

Research fields: My main focus involves the field of figurative language study. Specific attention goes to pragmatic effects of metaphor and metonymy, to creative meaning in wordplay, and to grammatical constructions of figurative language. My theoretical orientation is mainly that of cognitive linguistics, with a special emphasis on conceptual metaphor theory and cognitive grammar.

Miho SAITO, Associate Professor

Subjects: Teaching Japanese as a Second Language (Method)

Research fields: I am currently researching modern Japanese grammar, including regional dialects. In addition, I have a strong interest in the field of teaching/learning Japanese as a foreign/second language. I am planning to carry out research on teaching methods and coursework of Japanese based on the result of the research on Japanese grammar and my own practice of teaching Japanese.

Junko TANAKA, Professor

Subjects: Second Language Acquisition

Research fields: My research interests include the role of feedback and output in Second Language Acquisition (SLA) processes and the role of individual differences in SLA such as age, language aptitude, and motivation. My current research project deals with how a concept in a second language (L2) that does not exist in the learners' first language (L1) can be correctly or incorrectly segmented and mapped onto L2 morphology. I am also interested in classroom SLA as well as SLA in naturalistic or multilingual contexts.

Sooyun PARK, Lecturer

Subjects: Teaching Japanese as a Second Language (Content)

Research fields: My primary area of interest in research is Japanese linguistics. I have been working on the descriptive grammar of modern Japanese. My research interest lies especially in the meaning and function of adverbs in Japanese. My research projects also include the perspectives of pedagogical grammar of Japanese and contrastive linguistics.

Fumiko FUJINAMI, Professor

Subjects: Translation Theory

Research fields: The main themes are general practical theories on using translation for intercultural communication, and how to apply it to actual translation (especially between Japanese, German and English). I also have a keen interest in how to realize translations across cultural differences, and what effect the audience, media and goals have on translation work.

Yusuke MINAMI, Associate Professor

Subjects: Comparative and Contrastive Linguistics

Research fields: My primary interest lies in analyzing grammatical constructions in English and Japanese from the perspective of cognitive and functional linguistics, which holds that linguistic signs are motivated by human cognitive abilities and communicative purposes. My main works include shedding light on grammatical constructions that have not drawn much attention in the literature and exploring what they reveal about the organization of the speaker's linguistic knowledge.

Human Communication

Human Communication Program presents a wide range of opportunities for research about communication based on human sciences and cognitive sciences. Students can learn advanced knowledge of communication by studying phonetics, sociolinguistics, psycholinguistics, psychology, neurology, and performance science.

A PhD candidate must learn basic skills of statistics and will be advised to master an advanced level of statistics. Research should be performed through evidence-based studies. You have to gather enough data in both quality and quantity before you come to a conclusion.

Our M.A. program is divided into two tracks; the career enhancement track and the researcher track.

Career enhancement track is aimed at students who want to develop skills for a career outside of academic societies. Students will acquire up-to-date knowledge and research skills. Students, with guidance from professors and senior students, will submit an MA report.

The researcher track is more aimed at students who want to go on to do a Ph.D. with more focus on research skills than the Career enhancement track. The other main difference is that students submit an M.A. thesis to complete the course.

Students' research themes

- The influence of working memory contents on visual search
- Cueing effects of target location probability and repetition
- A Japanese-Chinese comparison on syntax and sentence delivery
- The traits of tandem learning, seen from scenes of language output difficulties
- Changes in prosody caused by shadowing training of Japanese
- Recognition and acoustic features of attitudes realized in Chinese
- Performer-and-audience dynamics in music communication

Teaching staff

Ryoko HAYASHI, Professor

Subjects: Neurolinguistics

Research fields: Speech science, psycholinguistics. I am researching phonetics in Japanese and other languages as well as experimental solutions to the difficulties in pronunciation for foreign languages. Also, I am interested in speech disabilities, linguistic development and the difference in teaching speech communication between countries.

Ryo KITADA, Associate Professor

Subjects: Nonverbal Communication

Focuses of my research are (1) to understand the mechanisms underlying multisensory perception and social cognition and (2) how innate and postnatal experience are interacted with each other to develop them. I use multiple methods (e.g., psychophysics and neuroimaging techniques) to address these questions.

Toru MINAMIMOTO, Assistant Professor

Subject: Language Interface Theory

Research fields: Linguistics, historical linguistics, Indo-European studies, studies of Ancient Greek. I mainly work on the dialects of Ancient Greek. The Ancient Greek people wrote their decrees and contracts in their local dialects and inscribed them in stones. By comparing inscriptions from different parts of Greece, we can find out the characteristics of each dialect, and can study the historical background of the dialects. I am also interested in how diverse human languages could be, and learning the Japanese Sign Language little by little.

Eriko MATSUMOTO, Professor

Subjects: Neuropsychology and Communication

Research fields: Cognitive psychology, neuropsychology, and cognitive neuroscience. I am interested in how human brain represents the higher-cognitive functions such as the visual perception, attention, and social interactions. I would like to make it clearer through brain imaging techniques and experimental psychological methods. I am also interested in the effects of emotional stimuli on cognitive process.

Tomoko TATSUMI, Lecturer

Subjects: Interactional Grammar

Research fields: Child language acquisition, psycholinguistics. I am studying young children's language learning by using experimental and corpus-analysis methods. I am especially interested in how our linguistic experience is processed and organized into a grammatical knowledge.

Computers and Communication

The Computer Communication course is a course on using information technology, such as computers and the Internet, for teaching and research. This course teaches the latest online information skills, collection, analysis and sorting of communicative information on computers, and other such immediately useful high-level information processing skills, which will also allow more effective communication in future.

Students' research themes

Analysis of the forms of study in branches of information, Automated classification of literature XML searching method Learning system for IT specialists Error-checker in foreign language learning systems, Utilization of memory mechanism in learning systems, Bottom-up question support system, Communication-based city rating, Reverse onomatopoeia dictionary, User interface, Communication assistance

Teaching staff

Kazuhiro OHTSUKI, Professor

Subjects: Computer Communication Systems

Research fields: Research relating to info-communication systems. The Great Hanshin-Awaji Earthquake made it painfully clear that there is a gap between the viewpoint of those using the information, and those building information distribution systems. As such, I've come to place a heavy emphasis on the position of those on the scene.

Min KANG, Professor

Subjects: Computer Simulation

Research fields: The adaptation of information communication technology to computer education and foreign language education. In particular, I am focusing on using statistics-based approaches to extract the user's preferences and give them the information that suits their needs.

Hidenari KIYOMITSU, Professor

Subjects: Information Systems and Databases

Research fields: I aim to use data at a higher level, through web information systems and databases. The theme is being able to personalize output for each user based on time, place, user profile, access history and so forth.

Takeshi NISHIDA, Associate Professor

Subjects: Applied Computer Science

Research fields: I am researching human-human interaction using info-communication technology, as well as human-computer interaction. In particular, I put focus on (1) developing systems based on reflection of common communication problems such as the difficulty of reaching consensus, giving criticism, or talking in foreign languages, and (2) learning from testing systems developed in actual situations.

Hajime MURAO, Professor

Subjects: Social Systems Science

Research fields: Using "soft information processing" technology and multi-agent systems to research the intelligent actions of humans and other groups of living things, analyzing and adapting the results. The targets include small groups of individuals, society, the economy, and the Internet.

Systems of Second Language Education

The graduate program in the Systems of Second Language Education is committed to analyzing a diversity of linguistic phenomena through different modes of inquiry. We examine language through its phonetic systems, acquisition, use in context, and via psycholinguistic models. By valuing the legitimacy and relevance of research at every level of analysis, we aim to help students to build a foundation for language studies. Specifically, we focus on:

- researching language pedagogy by applying knowledge in linguistics, psychology, and related fields
- exploring learners' second language developmental processes from SLA perspectives
- investigating the psycholinguistic and cognitive processes involved in language learning
- researching a range of methods and approaches for teaching literary works
- exploring the environment for language teaching and learning with ICT

Students' research themes

Master's program: Use of Lexical Stress Information in Silent Reading and Speech Production by Japanese Learners of English: Evidence from Eye Movements and Naming Tasks, The Effects of Short-Term Overseas Training and Corrective Feedback on Second Language Writing of Japanese Learners of English

Doctoral program: The automatization of grammatical encoding process during oral sentence production by Japanese EFL learners: A syntactic priming, An investigation of the automaticity in parsing for Japanese EFL learners: Examining from psycholinguistic and neurophysiological perspectives

Teaching staff

Atsuhisa SHIMAZU, Professor

Subjects: Language and Cultural Representation

Research fields: Modern American literature. I am particularly interested in Jewish American literature, and am attempting to decipher Bernard Malamud's novels and short stories from the perspective of expression.

Yasunori TAKAHASHI, Associate Professor

Subjects: Contrastive Linguistics and Cognition

Research fields: Chinese linguistics, phonetics and phonology. I have researched tonal phenomena in Chinese dialects from both phonetic and phonological viewpoints.

Mayu HAMADA, Assistant Professor

Subjects: Language Learning Environments

Research fields: My area of research is psycholinguistics, and I am trying to explore the cognitive mechanisms of L2 comprehension and production especially focusing on syntactic processing in terms of the learners' input and output. I would like to use and adopt findings to classroom teaching.

Daichi HIROTA, Associate Professor

Subjects: Language and Culture I

Research fields: French literature. My object of study is modern French poetry represented by Baudelaire, and I am trying to describe his poetics from a linguistic viewpoint. In addition, I am interested in literary criticism and language teaching through the use of computers and the Internet.

Sachiko YASUDA, Professor

Subject: Linguistic Science (Second Language Acquisition & Foreign Language Pedagogy)

Research fields: My main area of research is in second language writing, particularly longitudinal development of academic literacy of EFL learners.

Rei YASUDA, Lecturer

Subjects: Language and Culture II

Research fields: phonetics in language teaching, contrastive phonetics. I am interested in teaching German pronunciation and currently working experimentally on how Japanese learners pronounce German.

Hirokazu YOKOKAWA, Professor

Subjects: Psycholinguistics and Language Teaching

Research fields: English education studies and psycholinguistics. My main research themes are L2 reading, writing, speaking and listening as well as the cognitive mechanisms for vocabulary, and how all of this might be adapted for practical applications in classes.

Contents in Second Language Education

The aim of the Contents in Second Language Education course is to actively contribute to innovations in language education by training researchers in the methods and directions of Applied Linguistics. In this course, we work with an academic base of linguistics (corpus linguistics, cognitive linguistics, pragmatics, conversation analysis, speech science, grammar, educational science and class theory) and emphasize research with a focus on practical use in the field of education. Through a multifaceted approach to the challenges of teaching other languages, students in this course will be sought after by education agencies all over the world. Even if you haven't specialized in linguistics in your undergraduate studies, we welcome any student with a desire to contribute to the globalization of society through second language education.

Students' research themes

Master's program: English intensifiers, English collocation, English causative verbs, English activating expressions, First and third person German verbs, Japanese katakana, shadowing, phonics rules, Focus-on-form pronunciation aids, English/Japanese code-switching

Doctoral program: Identity and second language use, Developing tests for elementary school English teacher suitability, Formulation in interaction, Japanese compound verbs, Similar forms in Chinese and Japanese, Developing interactional competence

Teaching staff

Shin'ichiro ISHIKAWA, Professor

Subjects: Applied Linguistics II

Research fields: My research fields cover applied linguistics, corpus linguistics, psycho-linguistics, and TESOL (especially vocabulary learning, development and analysis of teaching materials, and language teaching methodologies). I welcome any students who want to consider languages and language educations from a scientific perspective.

Harumi KASHIWAGI, Professor

Subjects: Second Language Learning and Technology

Research fields: Recently, I have been interested in developing a learning system by using the position information of learners and objects in real space. I am also interested in developing a listening-based learning system and a system with an interactive whiteboard. I welcome any students who are interested in developing a learning system with new technology. If you have any questions, e-mail me.

Emiko KIHARA, Associate Professor

Subjects: Second Language Pedagogy

Research fields: My research relates to Cognitive Linguistics, especially to constructions in English. I have focused on the correlation between form and meaning in English (written by the native speaker), and currently I am studying constructions spoken by L2 learners (Japanese college students).

Tim GREER, Professor

Subjects: Second Language Pragmatics

Research fields: I am interested in the relation between linguistic expressions and the way they are used. I specialize in L2 pragmatics, using qualitative investigation methods and detailed, empirical analysis of conversations. I research social activities involving words that come up in ordinary and bilingual conversation, as well as conversation in oral English ability tests. Additionally, I also research conversation analysis, identity construction and interactional competence.

Shunyaku SHU, Professor

Subjects: Applied Contrastive Linguistics II

Research fields: My research interests are situated at the intersection between speech science and second language education. I research speech from psychological, biological and physical standpoints, and consider ways to more effectively teach second language pronunciation. I would like to supervise students with an interest in second language pronunciation and its pedagogy.

Madoka SERIZAWA, Assistant Professor

Subjects: Applied Contrastive Linguistics I

My main area of research is historical pragmatics, and I especially analyze colloquialism/literary style, construction and vocabulary in print media in early modern Germany. Lately I am also interested in the relationship between text and images.

Kazuhiro YAMATO, Professor

Subjects: Applied Linguistics I

Research fields: I am interested in teaching English pronunciation, particularly English prosody (i.e. rhythm and intonation) and currently working on analyzing and describing the use of intonation by Japanese EFL learners. Additionally, I am also interested in the methods and theoretical backgrounds involved in developing pragmatic competence.

Advanced Communication (Joint Research Course in Doctoral Program)

The increasing problem of cultural friction as well as the matter of coexistence with robots, which is a concern we will face in the near future, is nothing if not a communication issue. What is human communication and what cultural differences does it reflect? What roles do languages, nonlinguistic actions, body language and paralanguage play in communication? How can we make use of these in studying foreign languages? The Advanced Communication course is dedicated to using the latest technology to examine these issues, opening new possibilities for communication.

Joint Research with: Advanced Telecommunications Research Institute International (ATR)

Students' research themes

Doctoral program:

- Effects of pronunciation training on foreign language learning
- The role of presenting visualized articulatory gesture in English education

Teaching staff

Akira UTSUMI, Invited Professor

Subjects: Advanced Communication

Research fields: Computer vision, gaze tracking, human-computer interaction

Hidehiko SUMIOKA, Invited Associate Professor

Subjects: Advanced Communication

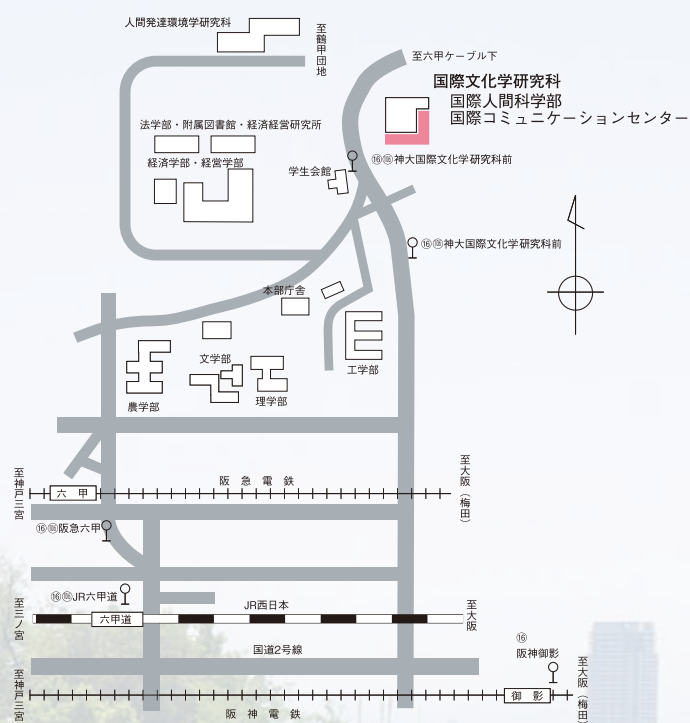
Research fields: Communication between humans and robots

Reiko YAMADA, Invited Professor

Subjects: Advanced Communication

Research fields: Speech perception, production and learning of second language, and development of language learning systems.





■交通機関

阪神「御影」・JR「六甲道」・阪急「六甲」から
神戸市営バス16系統・106系統「六甲ケーブル下」行き
「神大国際文化学研究科前」下車



神戸大学大学院国際文化学研究科

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1-2-1
TEL(078)803-7530 FAX(078)803-7509
<http://web.cla.kobe-u.ac.jp>